

英語語法文法学会第 33 回大会 予稿集

Proceedings

The Society of English Grammar & Usage Annual Meeting 2025

ワークショップ（1 号館 4 階 141 教室）10:40 - 11:40

司会 大澤舞（獨協大学）

1. 「動詞 buzz の多義性」 富依慎也（神戸学院大学学部生）
2. 「アメリカ英語における albeit の補部の歴史的変遷—COHA の用例分析から—」
..... 井上徹（成城大学）
3. 「英文和訳で訳されない but と和文英訳で補われる but」 田岡育恵（大阪工業大学）

研究発表 13:00 - 14:45

第 1 室（1 号館 4 階 141 教室）

司会 西山淳子（和歌山大学）

1. 「Will you 構文と Can you 構文の表す依頼内容の差異について—please と共起した例に注目して—」
..... 宇都陽鳳（大阪大学大学院）
2. 「関係詞節における認識的 will について」 岡麟太郎（日本大学）
3. 「Used to の「推意キャンセル」と進行形可否に見られる整合性」 島本慎一朗（日本大学）

研究発表 13:00 - 14:45

第 2 室（1 号館 5 階 151 教室）

司会 徳永和博（東京農業大学）

1. 「動能構文における動作主の意図性」 加藤翔太（筑波大学大学院）
2. 「談話標識の新奇表現 in long の語法」 木村快（慶應義塾大学大学院）
3. 「不定詞を補文にとる使役表現とその補文内部における完了形・進行形の出現について」
..... 村岡宗一郎（日本大学）

シンポジウム（1 号館 4 階 141 教室）15:35 - 17:45

テーマ「英語へのコンストラクション（構文）的アプローチ」

司会 前川貴史（龍谷大学）

1. 「不定冠詞と複数形名詞が会合するとき」 前川貴史（龍谷大学）
2. 「ネットワークを用いた構文分析—BE V-en INF 構文を例に—」 町田章（日本大学）
3. 「“So, look, I mean, you know, the fact is, is that ...” —語用論標識の連鎖と語法について—」
..... 柴崎礼士郎（明治大学）
4. 「談話構文としての数・量推移構文」 村尾治彦（熊本県立大学）

ワークショップ 10:40 – 11:40

司会 大澤舞（獨協大学）

1. 「動詞 buzz の多義性」 富依慎也（神戸学院大学学部生）
（10:40 - 11:00）
2. 「アメリカ英語における albeit の補部の歴史的変遷—COHA の用例分析から—」
..... 井上徹（成城大学）
（11:00 - 11:20）
3. 「英文和訳で訳されない but と和文英訳で補われる but」 田岡育恵（大阪工業大学）
（11:20 - 11:40）

動詞 buzz の多義性

富依慎也（神戸学院大学学部生）
shinyatomy315@gmail.com

1. はじめに

本発表では英語小説から収集した事例に基づき、動詞 **buzz** の意味拡張がどのようなものであるかを明らかにする。具体的には、動詞 **buzz** はもともと「虫の羽音」を表していたが、今日ではそこからメトニミー的に拡張された「人がブザーを鳴らす行為」が中心的な語義となっていることを提示する。さらに、それぞれの意味におけるインフォーマント調査による for/in 句の判別テストの結果を示し、Vendler (1957)などの語彙アスペクト分類では基本的に「活動」(Activity)であるものの、所要時間を表す in 句の容認度が高くなる場合とその理由を明らかにする。

2. 音（放出）動詞 buzz

音動詞について、Levin et al. (1997)は以下のように述べている。

- (1) The verbs of sound, as a class, denote internally caused events (Levin and Rappaport Hovav 1995); this fact contributes to their classification as unergative verbs. While verbs of sound are often not agentive (e.g., clatter, creak, gurgle), sound emission events nevertheless arise either from a source internal to the sound emitter or as a result of properties that are inherent to the sound emitter.

(Levin et al. (1997: 43))

（音動詞は、1つのクラス（全体）としては、内的使役事象を表す（Levin and Rappaport Hovav 1995）。この事実はこれらを非能格動詞に分類する1つの理由となる。音動詞はしばしば非動作主的であるが（例えば **clatter, creak, gurgle**）、音放出事象はそれでも、音放出するものの内部にある発生源から生じたり、音放出するものに本来備わっている特性の結果として生じたりする）

動詞 **buzz** においても、「昆虫や機器、人などが自らの内部の性質によって、ブンブン・ブー・ガヤガヤといった音を立てる」といった内的使役事象を表すことから、**buzz** は音（放出）動詞の一種で、基本的には非能格動詞であると考えられる。

3. メトニミーによる意味拡張

動詞 **buzz** の興味深い点は、原義と現在頻用される意味の間でメトニミーによる拡張が見られることである。これは Levin and Rappaport Hovav (2014: 339)が言うように、「この世界にある性質が備わっていたり、ある行動をおこなう際に慣習的なやり方があったりすることにより、ある動詞はいろいろな共起特性を有する事象と結び付けられる」ことによると考えられる。動詞 **buzz** 自体にそれと頻繁に共起する「特定の鳴らすもの（ブザーやインターコムなど）」が語彙化された意味が確立されることにより、ブザーなどを鳴らすという行為が、「〈ハチが〉ブンブンと音を立てる」と同じように、「人がブザーなどを鳴らす」→「〈人が〉ブーと音を立てる」（人が音を出す主体）という内的使役の意味へと再解釈されると本発表では考える。それが(2)のような例である。

- (2) a. Kate Erling buzzed. "I'm sorry, Miss Roffe. Sir Alec's out of the office."

(Sidney Sheldon, *Bloodline* : 211)

- b. The secretary buzzed to say Harris was waiting for me. (Warren Kiefer, *The Lingala Code* : 138)

これに人をブザーで呼ぶことを表す前置詞 for が付いたものが(3a)、そこから前置詞 for が脱落したものが(3b)のような例である。なお、収集した実例では(3b)のような他動詞用法の方が多かった。

- (3) a. He buzzed for Lomax and had him do the cryptographic heavy lifting.
(Joseph Finder, *The Zero Hour* : 229)
- b. Jennifer kept Patrick Maguire waiting for forty-five minutes, and then buzzed Cynthia.
(Sidney Sheldon, *Rage of Angels* : 200)

発表者が小説より収集した実例でも、(2)(3)のような「人がブザーなどを鳴らす」を表す用例が一番多く、(2)のような単独用法から、(3)のような人を呼び出す語義、後で見る(7)のような使役移動構文の語義などへの拡張が生じているので、使用頻度が高く、かつ意義展開の起点となっているという点から、「〈人が〉ブーと音を立てる」という語義が瀬戸（編）(2007)の言う中心義となっていると判断できる。

4. 動詞 buzz の基本的語彙アスペクト

動詞 buzz は非能格動詞であるため、基本的には終結点となるような状態変化を表さず、非完結的な「活動」(Activity)である。ただし、経路の終点（着点）を表す前置詞句を伴う例では、その着点への到着が終結点となり、完結的な「達成」(Accomplishment)となる。

4.1. 単独で非完結的となる場合

経路の終点（着点）を表す前置詞句を伴わない、非完結的な「活動」(Activity)となる例における for 句・in 句の判別テストでは、いずれも持続時間を表す for 句が最も自然となり、in 句の容認度は低くなる。これは、原義の「〈ハチが〉ブンブンと音を立てる」の例、そのメタファーによる拡張である「疑問・考えが音を立てる」例、「〈人が〉ブーと音を立てる」ブザーなどを鳴らすという行為の例、いずれにおいてもそうである。

- (4) a. On the window-pane the bee was buzzing - buzzing. . .
(Agatha Christie, *And Then There Were None* : 211)
- b. The bee buzzed {for a few seconds/ ??in a few seconds}.
- (5) a. He was alone and the name "Lisa Oberman" buzzed in his mind, as persistent as a fly at a screen door.
(Richard Osborne, *Basic Instinct* : 178)
- b. The name "Lisa Oberman" buzzed in his mind {for a few minutes/ ??in a few minutes}.
- (6) a. In the middle of the afternoon, Jennifer was taking a deposition when Cynthia buzzed.
(Sidney Sheldon, *Rage of Angels* : 412)
- b. Jennifer was writing a letter in her office when Cynthia buzzed {for a few seconds/ *in a few seconds}.

4.2. 着点句を伴い完結的となる場合

経路の終点（着点）を表す前置詞句を伴う例では、その着点への到着によって完結的な「達成」(Accomplishment)となるので、in 句が容認される。一方、for 句はやや容認度が低くなり、以下の例に

においては通過が完結せず、通過途中までの経過時間を表す解釈となる。

- (7) a. Lee signed and the guard buzzed her through the security gates. (Robert Tine, *ERASER* : 38)
b. The guard buzzed Mary through the security gates {?for a few seconds/ in a few seconds}.

(7b)の in 句を伴った例においては、メアリーがセキュリティー・ゲートを通過し終わるまでの所要時間、for 句を伴った例においては、警備員がセキュリティー・ゲートを開いてメアリーを途中まで通していた持続時間が表されているということである。

5. 着点句を伴わない動詞 buzz で例外的に in 句が容認される場合

経路の終点（着点）を表す前置詞句を伴わない例でも、例外的に所要時間を表す in 句の容認度が高くなる場合がある。それは、「先行事象」か「終結点」のいずれかを想起できる場合である。

5.1. 先行事象の想定可能性

Engelberg (2002: 386)の言う「先行事象」が想起できる場合に「inceptive な起動相的解釈」が見られ、先行事象から buzz が生じ始めるまでの「所要時間」が in 句によって表される。それが(8)(9)のような例である。

- (8) a. The telephone in front of him buzzed. (Harold Robbins, *The Pirate* : 308)
b. The telephone buzzed {for a few seconds/ in a few seconds}.
- (9) a. Jordana felt the champagne buzzing in her head. (Harold Robbins, *The Pirate* : 100)
b. The champagne buzzed in her head {for a few minutes/ in a few minutes}.

(8b)(9b)の for 句を伴った例においては、「電話が鳴っている」持続時間、「シャンパンが頭の中をかけめぐっている」持続時間が for 句によって表される。これは「活動」(Activity)に for 句が付いた場合のふつうの解釈である。

一方、(8b)の in 句を伴った例においては、The caller dialed the number. (発信者がボタンを押した)といったことが先行事象として想定され、そこから「電話が鳴る」という活動が開始されるまでの所要時間が in 句によって表されるという inceptive な起動相的解釈が生じる。(9b)の in 句を伴った例においても、She drunk the champagne. (彼女がシャンパンを飲んだ)といったことが先行事象として想定され、そこから「シャンパンが頭の中をかけめぐる」という活動が開始されるまでの所要時間が in 句によって表されるという inceptive な起動相的解釈が生じるということである。

5.2. 場所を表す前置詞句を伴う場合

動詞 buzz が着点句ではなく場所を表す around の前置詞句を伴う場合、その場所をすべて回る「所要時間」が in 句によって表される。これは出水 (2023: 37-41)で説明されている、動詞の場所を表す直接目的語が〈はかり分け〉を表す例と類似しているが、直接目的語ではなく場所の前置詞句が使われている例だと考えられる。それが(10)のような例である。

- (10) a. Men and women buzzed around the set, moving at double time, because, in the movie business, time quite literally is money. (Clive Clussler with Jack Du Brul, *Plague Ship* : 319)
b. The tourists buzzed around the set {for a few minutes/ in a few minutes}.

(10b)の for 句を伴った例においては、「セットを騒々しく回っている」持続時間が表されている。一方、(10b)の in 句を伴った例の場合、around the set の the set で限定される「セット全体」という範囲が、セットを動き回る尺度として動詞の意味に付与され、すべて回り終わった時点が終結点として解釈できるようになる。そのため、その所要時間を in 句で表す「セットを数分ですべて回った」という解釈が生じるということである。

6. おわりに

- ・原義と現在頻用される意味の間でメトニミーによる拡張が見られ、ブザーなどを鳴らすという行為が、「〈人が〉ブーと音を立てる」(人が音を出す主体)という内的使役の意味へと再解釈されると考えられる。
- ・経路の終点(着点)を表す前置詞句を伴わない例でも、例外的に所要時間を表す in 句の容認度が高くなるのは、「先行事象」か「終結点」のいずれかを想起できる場合である。

謝辞

インフォーマントとして協力して下さった神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学部の Nicholas Robert Musty 先生、指導教員である神戸学院大学人文学部の出水孝典先生、さまざまなコメントやアドバイスを下さった愛媛大学の前田宏太郎先生には感謝を申し上げたい。

参考文献

- 出水孝典 (2023) 『語彙アスペクトと事象構造(下) —事象の枠を捉える 14 章—』(開拓社叢書 37), 開拓社, 東京.
- Engelberg, Stefan. (2002) “Intransitive Accomplishments and the Lexicon: The Role of Implicit Arguments, Definiteness, and Reflexivity in Aspectual Composition,” *Journal of Semantics* 19, 369-416.
- Levin, Beth, Grace Song and B. T. S. Atkins (1997) “Making Sense of Corpus Data: A Case Study of Verbs of Sound,” *International Journal of Corpus Linguistics* 2, 23-64.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (2014) “Manner and Result: The View from *clean*,” *Language Description Informed by Theory*, ed. by Rob Pensalfini, Myfany Turpin and Diana Guillemin, 337-357, John Benjamins, Amsterdam.
- 瀬戸賢一 (編) (2007) 『英語多義ネットワーク辞典』, 小学館, 東京.
- Vendler, Zeno (1957) “Verbs and Times,” *Philosophical Review* 66, 143-160.

引用作品

- Christie, Agatha (2003) *And Then There Were None*, Harper Collins Publishers, London. (First published in 1939 by Collins Crime Club, London.)
- Cussler Clive with Jack Du Brul (2008 / 2009) *Plague Ship*, A Berkley Book, New York.
- Finder, Joseph (1996) *The Zero Hour*, William Morrow and Company, New York.
- Kiefer, Warren (1972) *The Lingala Code*, Random House, New York.
- Osborne, Richard (1992) *Basic Instinct*, A Signet Book, New York.
- Robbins, Harold (1974) *The Pirate*, Simon and Schuster, New York.
- Sheldon, Sidney (1977) *Bloodline*, William Morrow and Company, New York.
- Sheldon, Sidney (1980) *Rage of Angels*, William Morrow and Company, New York.
- Tine, Robert (1996) *Eraser*, A Signet Book, New York.

アメリカ英語における *albeit* の補部の歴史的変遷 — COHA の用例分析から

井上 徹（成城大学）
tinoue@seiyo.ac.jp

1. はじめに

英語の譲歩表現は、従属接続詞（*though/although*）、前置詞（*in spite of* など）、接続副詞（*however* など）に大別される。本発表は、それらと意味機能を共有しつつ歴史的に独自の統語分布を示す *albeit* に焦点を当て、アメリカ英語を対象に *Corpus of Historical American English* (COHA, 1820–2019) に基づき、その補部構造の歴史的変化を明らかにする。

2. 資料と方法

COHA (1820–2019) から抽出した 1,878 例を対象に、10 年区分で *albeit* の節／句の分布推移を集計した。接続副詞・周辺用法（計 19 例＝0.99%）は稀少のため分析対象外とした。分類定義は図 2 を参照。

3. 結果

結果①：頻度推移（図 1）

1880 年代に一時的上昇、1970 年代までは概して横ばいから漸減。1970 年代以降は増加へ転じ、1980 年代以降は顕著に上昇し、2010 年代に最大。これは 20 世紀後半以降の非口語的な書き言葉での再活性化を示唆する。

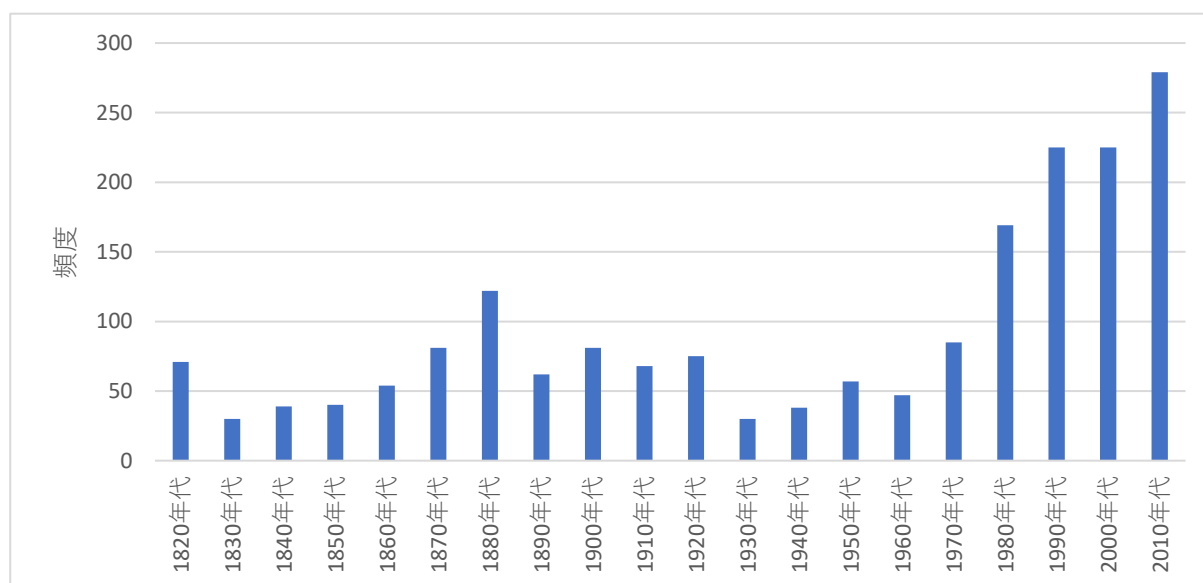


図 1 *albeit* の年代別頻度（1820–2019, COHA）

結果②：補部タイプの推移（図 2）

19 世紀後半までは節が優勢で、1880 年代に一時的ピークが見られる。1900 年代に初めて交差し（節 40 例／句 41 例）、以後は節が低位で推移する。句は 1970 年代以降に急増し、1980 年代以降は主流となり、2010 年代に最大となった。

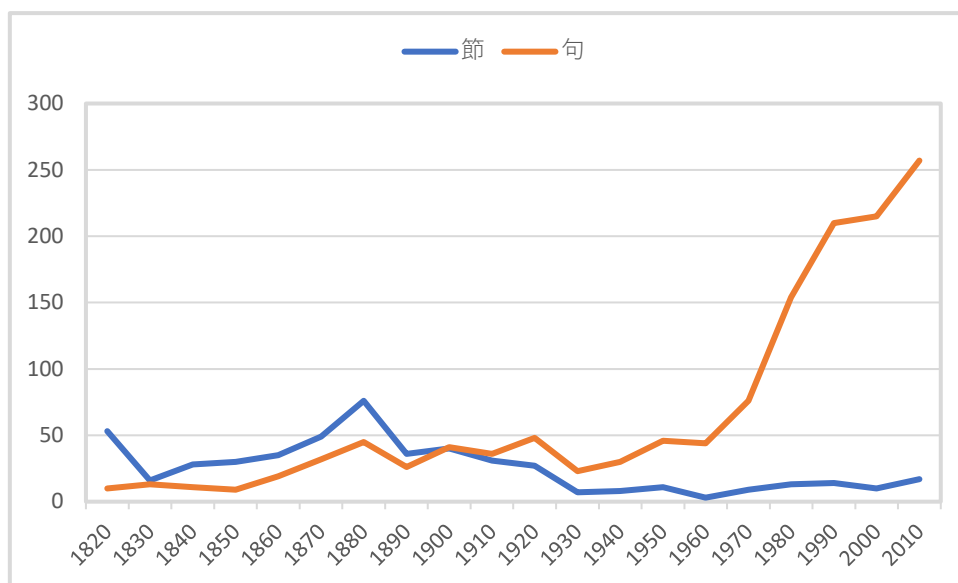


図 2 albeit の補部タイプ分類と 10 年区分別推移 (COHA, 1820－2019)
 分類基準：節＝(a) albeit that SV (定形), (b) albeit SV (定形), (c) 非定形節 (V-ing/-ed)；句＝(d) NP, (e) AdjP, (f) AdvP, (g) PP。
 ※接続副詞・周辺の用法 (計 19 例＝0.99%) は図から除外。

結果③：albeit NP における one の台頭 (図 3)

albeit NP における one の比率推移に着目する (詳細は図 3)。

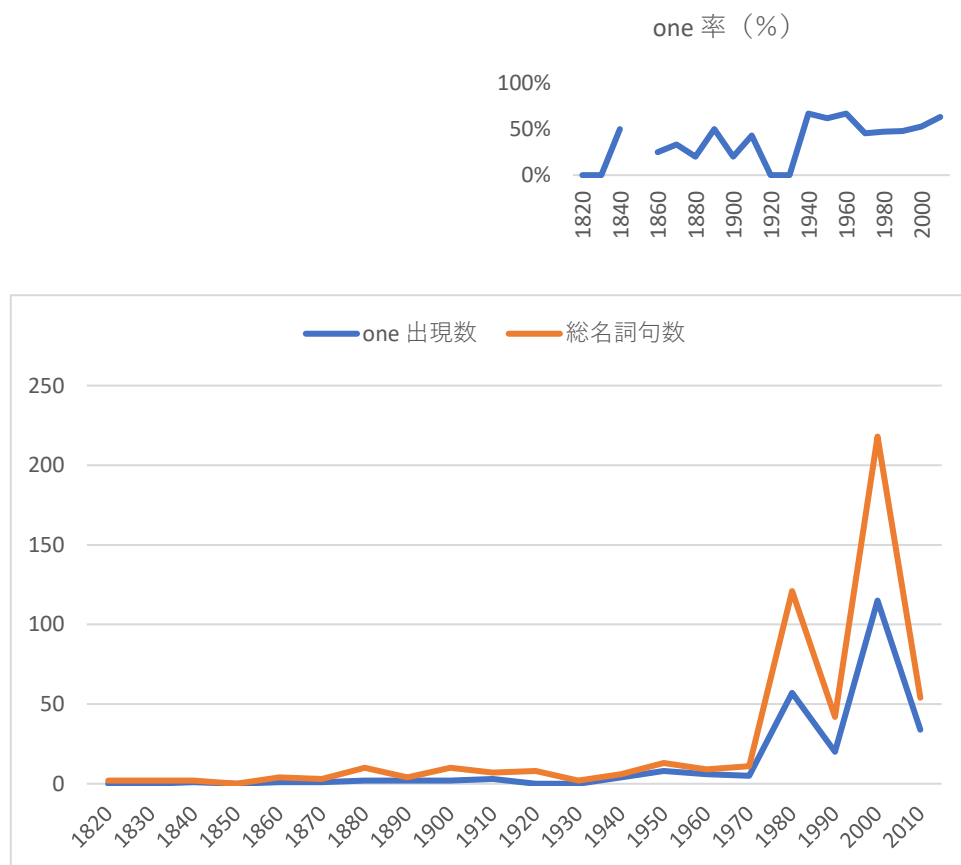


図 3 albeit NP における one の出現率と推移 (COHA, 1820–2019)

通期で **one** を主要部とする用例が 52.1% (149/286) を占め, 1980 年代以降に上昇する。**one** は照応的・抽象度の高い名詞句を形成し, 句型の伸長を牽引する。
 (右上小図: 各年代区分の **one** 出現率 = 【**one** 例数 / albeit NP 全例】×100)

結果④: albeit AdjP の内挿

albeit に続く形容詞句は, 名詞句内に挿入される用法が多い (例: *a quite general, albeit hazy, notion* (1931 MAG)。COHA では初出が 1870 年代で, 全 397 例中 169 例 (42.6%) が名詞句内挿入である。

注: 挿入句は対照的機能 (例: *a very strong, albeit unobtrusive, nobility of character* (1902 MAG)) と補足的機能 (例: *a handsome, albeit mysterious, figure* (1986 FIC)) が見られる。

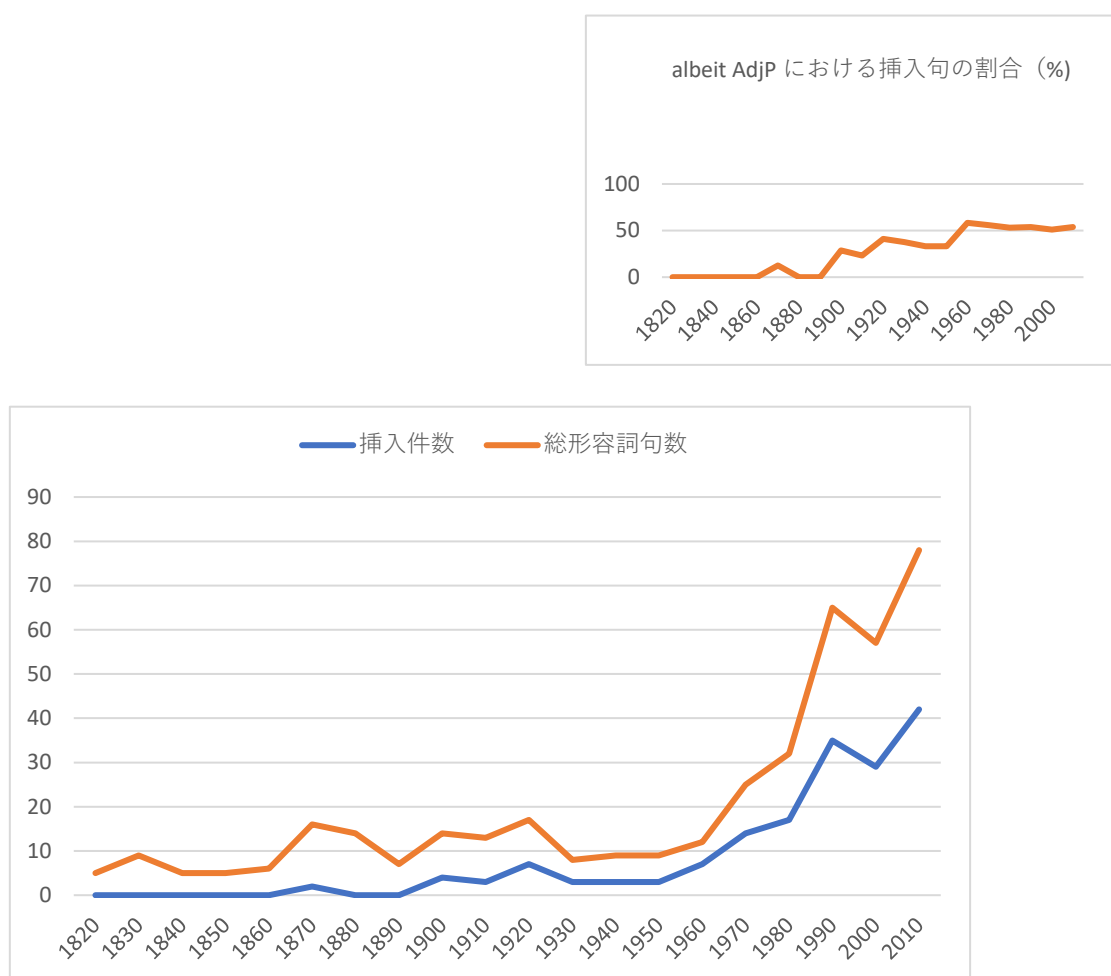


図 4 albeit AdjP における挿入句の件数と割合 (1820–2019, COHA ; 右上小図 = 割合 [%])

結果⑤: AdvP / PP 合同グラフ

副詞: 225 例確認。1970 年代以降に急速に拡大。上位は *slowly* (21), *reluctantly* (18), *briefly*・*unwittingly* (各 7) ほか。

前置詞: 429 例確認。上位は *with* (119), *in* (111) を筆頭に *on*, *of*, *without* など。

with は 1980 年代以降に増加し 2010 年代には約 2 倍。in も 1990 年代以降に拡大。

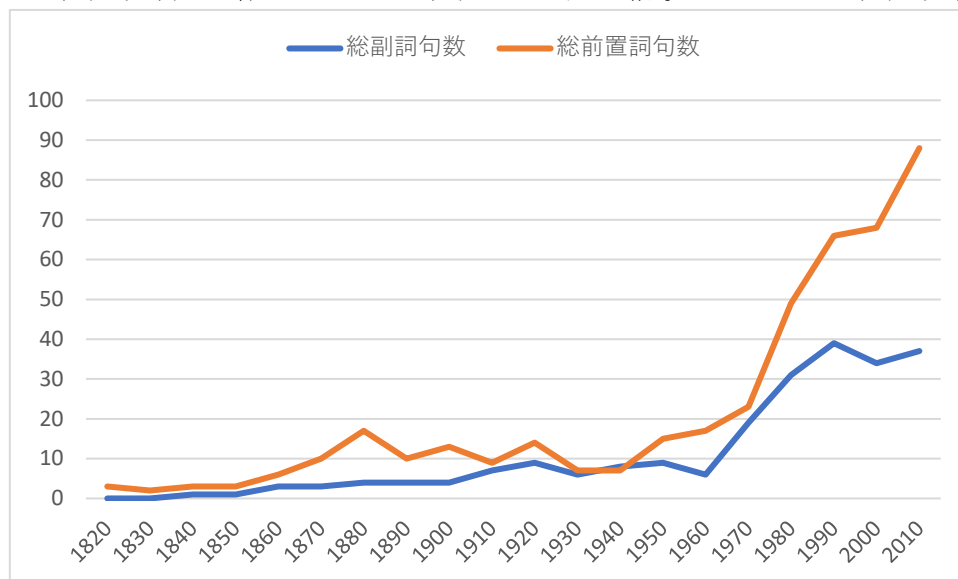


図 5 albeit AdvP と albeit PP の年代別出現数 (1820–2019, COHA)

4. 考察

albeit は al be it (that) に遡る節起源をもち、近代に接続詞化したのち、現代では *albeit* + *PP* / *AdjP* / *AdvP* / *NP* が主流である。Molencki (1997) は句後続でも〈al + be + it〉の省略という節性の持続を論じ、Sorva (2007) は節・句の併存と分布変化を記述した。現代英語については、滝沢 (2019) が COCA 等によりジャンル別分布 (academic に偏るが spoken にも一定数)、文頭使用の低さ、右隣語の傾向を示している。本研究は、COHA 全例の精査により句補部化の量的拡大を実証し、Biber & Gray (2016) の *compression* / *packaging* と整合的に位置づける。*albeit* は *though* / *although* が導く節と共存しつつ、名詞句内部の修飾 (例: *a quite general, albeit hazy, notion*) など句レベルで意味を圧縮する点に独自性がある。

5. おわりに

本研究は、COHA のアメリカ英語の資料に限定される。*though* / *although* / *if* との比較は十分ではなく、今後の課題とする。さらに、ME-EModE 期における「節→句」への変化の起点については、COHA だけでは検証できないため、EEBO など他のコーパスによる精査が必要である。

参考文献

- Biber, D. and B. Gray. 2016. *Grammatical Complexity in Academic English: Linguistic Change in Writing*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Molencki, R. 1997. "Albeit a Conjunction, Yet it is a Clause: A Counterexample to Unidirectionality Hypothesis?" *Studia Anglica Posnaniensia* 31, 163-178.
- Sorva, E. 2007. "Grammaticalization and Syntactic Polyfunctionality: The Case of *Albeit*." In U. Lenker and A. Meurman-Solin eds., *Connectives in the History of English*, 115-143. Amsterdam: John Benjamins.
- 滝沢直宏. 2019. 「現代英語における *albeit* の振る舞い」 現代英語談話会 (編) 『英語のエッセンス』 39-49. 大阪: 大阪教育図書.
- Corpus of Historical American English (COHA). <https://www.english-corpora.org>

田岡育恵（大阪工業大学）

ikue.taoka@oit.ac.jp

1. はじめに

田岡（2025）で、英語原文に **but** 等の逆接表現がないのに、その和訳で「しかし」、「でも」、「が」等の逆接表現が用いられていることが多いと述べた（例(1)）。

- (1) ‘Because you, too, wish to get away from here?’ ‘Yes.’ ‘**And** the big, handsome policeman will not let you go?’（村上啓夫訳）「それで、あなたも、ここから逃げ出したいって、いうわけね？」「そうです」「でも、あの大きなハンサムな警官が、あなたを行かせないんでしょう？」（A. Christie, *Hercule Poirot's Christmas*, 以下、HPC、村上啓夫訳『ポワロのクリスマス』）。

しかし、尾野(2018)では、これとは逆の、「場面内視点」の日本語では、英語の“S1, but S2”が「S1 と、S2」と体験的に訳出されること（例(2)）、「S1 と、S2」に対応する英訳が、“When S1, S2”ではなく、“S1, but S2”になることが示されている（例(3)）。

- (2) Mama sat down on the edge of the bed, **but** Geraldine slid off the other side and walked out the door. ママがベッドにすわると、ジェラルディンはぴょんととびおりて、へやからでていってしまいました。
- (3) みほちゃんがげんかんへかけだしていく と、ままは、もうかぎをはずして、にこにこがおでたっていました。Meg ran to get the door, **but** Mommy had already opened it with her key, and was standing there with a big smile. ((2)、(3)は（尾野 2018））

改めて、**but** が逆接表現で和訳されない例を『ポワロのクリスマス』で見ると、村上啓夫訳で 9 例、川副智子訳で 3 例あった。和文英訳の例として、川端康成『雪国』の英訳 *Snow Country*（以下、SC）で見れば、『雪国』原文の逆接表現（「が」、「けれども」、「しかし」など）が英訳では省かれている、あるいは、**and** のような別の表現が用いられている場合も 72 例あったが、日本語原文に逆接表現がないのに英訳で **but** が補われている箇所が 79 例あった。本発表では、英語では **but** が使われているが、日本語では逆接表現ではない場合について考察する。「対比」、「含意の否認」、「不同意」が文脈で認められれば、文脈に逆接関係があるものとする。下線、太字は発表者による。

2. **but** が和訳されない場合（HPC で村上訳、川副訳ともに逆接表現を用いていないのは 3 例）

- (4) The chief constable uttered an exclamation. ‘By Jove, I get you. Those faint scratches on the end of the barrel. You see ‘em, Poirot?’ ‘**But** yes, I see (…)’ (HPC) 警察本部長は感嘆の声をあげた。「おお、これは！バレルの先に引っかき傷のような跡がある。見えるだろう、ポアロ？」「ええ、見えます。（略）」（川副訳）／「ええ、見えます。（略）」（村上訳）

(4)は、警察本部長がポワロに「見えるだろう？」と聞いたのに対し、「見えません」ではなく、「見えます」と答えているわけで、逆接関係はない。「(?しかし/?でも)、ええ、見えます」と訳すことはできないと思われる。(4)は、捜査で重要な発見があったという状況での発話である。

3. 日本語に逆接表現がないのに、英訳で but が用いられる場合 (SC から)

3.1. 逆接関係はある場合 (対比や含意の否認のシグナルとしての but)

(5) 真赤になって島村を睨みつけながら詰問するうちに、駒子の肩は激しい怒りに顫えて来て、すうっと青ざめると、涙をぼろぼろ落とした。She glared at him, scarlet with anger. Her shoulders were shaking. But the flush receded as quickly as it had come, and tears were falling over her blanched face.

(6) 「毎晩、こんな天の河かい。」「天の河？きれいな、毎晩じゃないでしょう。よく晴れているわ。」“Is the Milky Way like this every night?” “The Milky Way? Beautiful, isn’t it? But it’s not like this every night. It’s not usually so clear.”

(5)では、「真っ赤になった」と「青ざめた」で前後の対比がある。(6)では、天の河はいつもこうきれいなのではないということで、but は、前件の含意「天の河はいつもこんなにきれいかもしれない」を否認するシグナルと考えられる。

(7) 「だから呼んでくれよ。」「今？」「うん。」「驚きますわ。こんな真昼間になんにもおっしゃれないでしょう？」「“You’ll call someone, then?” “Now?” “Now.” “But what can you say to a woman in broad daylight?”

3.1 節の例は、逆接関係があるので but が用いられたという場合である。

3.2 逆接より事態の継起に焦点を当てる日本語 vs. 逆接を表わす英語 (尾野 (2018) に合う例)

(8) 全く徒労であると、島村はなぜかもう一度声を強めようとした途端に、雪の鳴るような静けさが身にしみて、それは女に惹きつけられたのであった。A complete waste of effort. For some reason Shimamura wanted to stress the point. But, drawn to her at the moment, he felt a quiet like the voice of the rain flow over him.

(9) そう言って、気のゆるみか、少し濡れた目で彼を見上げた葉子に、島村は奇怪な魅力を感じると、どうしてか反って、駒子に対する愛情が荒々しく燃えてくるようであった。She looked up at him with moist eyes—a sign perhaps that her defenses were breaking down—and he found in them an uncanny sort of beauty. But at that moment his affection for Komako welled up violently.

事態の継起を but で訳した箇所は 7 例あった (事態の継起を and yet で表わしている箇所も 2 例)。しかし、これらは事態の継起のつながりの箇所ではあるが、(8)では、「相手に意見しようとする」と「相手に惹きつけられ (思い留まる)」、(9)では、「葉子に魅力を感じる」と「駒子への愛情が高ぶる」というように、前後で逆接関係が認められ、それで but が用いられたと考えられる。

3.3 明白な逆接関係がないところに but

(10) でも直ぐに泣き止むと、自分をあてがうように柔らかくして、ひとなつつこくこまごまと身の上などを話し出した。酔いの苦しさは忘れたように抜けたらしかった。今のことにはひとことも触れなかった。「あら、お話を夢中になって、ちっとも知らなかったわ。」と、今度はぼうっと微笑んだ。But a moment later she was calm again. Soft and yielding as if she were offering herself up, she was suddenly very intimate, and she began telling him all about herself. She seemed quite to have forgotten the headache. She said not a word about what had just happened. “But I’ve been so busy talking I haven’t noticed how late it is.” She smiled a little bashfully.

(10)は、時間の経過に気づいた驚きの「あら」に but が対応している。逆接関係はなく、「？しかし

/?でも)、お話に夢中になって、ちっとも知らなかったわ」というような逆接表現の挿入はおかしい。

(11) その横から千代紙張りの小箱を出すと、いろんな煙草がいっぱいつまっていた。「お客さんのくれるのを袂へ入れたり帯に挟んだりして帰るから、こんなに皺になってるけれど、汚くはないの。そのかわりたいいのものは揃っているわ。」と、島村に手を突いて箱のなかを掻き回して見せた。

「あら、^{マッチ}燐寸がないわ。(略)」She took up a small figured-paper box filled to the top with assorted cigarettes. “I push them up my sleeve or inside my *obi* when a guest gives them to me, and some of them are a little smashed. They’re clean, though. I make up for wrinkles by having every variety to offer.” She stirred up the contents to demonstrate that he could have his choice. “But I don’t have a match. (…)”

(11)も「あら」に対応している個所なので、(10)と同類と考えたが、(11)は、相手に煙草を勧めている状況なので、「煙草を勧めているのにマッチがない」ということで、「でも、マッチがないわ。」と、but は逆接関係を表わすために用いられたとも考えられる。

辞書には、「驚き」を表わす but の用法が挙げられている。

(12) used to **introduce a statement that shows that you are surprised or annoyed, or that you disagree: But that’s not possible!** (OALD⁹)

(13) (驚きや非難などの感情を表わす but) “Mary passed her exams.” “*But that’s great!*” 「メアリーは試験に受かったんだ」「それにしてもすごいね」(内田 2009)

(12)の *But that’s not possible!* は、「しかし、そんなことはあり得ない！」と訳すことは可能で、その「しかし」は逆接関係を示すものである。(13)の *But that’s great!* も、「(しかし／でも)、すごいね。」と訳すことは可能と思われる。しかし、この「しかし」や「でも」は、逆接関係というよりも、話者の驚きを表わすものと思われる。一方、(10)、(11)は、このような強い感情を伴っていないと思われる。

(14)、(15)も、逆接関係がない例である。前の話題とは違うことを急に言い出すときに but が用いられている。

(14) 「(略) 去年は大雪だったよ。よく雪崩れてね、汽車が立往生するんで、村も焚出しがいそがしかったよ。」「駅長さん随分厚着に見えますわ。(略)」“(…)*Last year we had so much that the trains were always being stopped by avalanches, and the whole town was kept busy cooking for them.*” “But look at the warm clothes, would you.(…)”

(15) 「君の旦那さんは飲むんだね。」「飲んで困ります。」「誰だか下手な三味線だね。」「“Your husband drinks, does he?” “Much too much.” “But whoever it is, she’s not much of a musician.”

(14)では、「去年の大雪」から「目の前の相手の服装」に話が飛ぶ。(15)では、「相手の夫の飲酒」から「聞こえてくる三味線」に話が飛ぶ。日本語にも、(16)のような、逆接関係を表わすというのではなく、新しいことを言い始める時の「しかし」の用法がある。

(16) (その日、友人とはじめて顔を合わせたときの第一声) しかし、暑いね、今日も。(加藤 2001:74)

(14)、(15)でも、「しかし、駅長さん随分厚着だね。」「しかし、誰だか下手な三味線だね。」というように、「しかし」の挿入はあり得るとと思われる。

辞書には、but の「話題転換」の用法が挙げられている。

(17) used for **changing the subject** *mainly spoken* used when you are saying that you should not talk about a subject you just mentioned: *It was a very complicated operation. But I don’t want to bore you with all the details.* (MED⁹)

(17)は、複雑な操作の話を続けるのかと思えば、そうはしない。「でも、細かいことまで言って、君を煩わせたくはない。」と、逆接表現を用いて訳してもよいと思われる。

(18) *spoken used to change the subject of a conversation: But now to the main question.* (LDCE⁸)

(18)は、「しかし」等を訳に用いない方が自然と思われるが、前の議論の流れを続けるのではなく、主要問題に話を移すということで、逆接関係は認められるように思う。(17)、(18)は、話題転換の例ではあるが、前との逆接的つながりも考えられ、(14)、(15)の、前とは関係のない話題がいきなり出てくる場合とは異なるものと思われる。

5. おわりに

原文に逆接表現がなくても文脈に逆接関係が認められるのなら、訳で逆接表現が用いられるということは容易に理解できる。今回、逆接関係がないと思われるところに **but** が用いられる例に特に注目したが、他方、日本語でも、逆接関係がないところに逆接表現が用いられている、(19)のような例は少なくはない。英語と日本語で、どちらが逆接表現をよく用いるのか、また、逆接関係が考えられる場合に、日本語と英語のどちらが、その逆接関係を逆接表現で明示しようとする傾向があるのかについては、まだはっきりとしたことは言えない。

(19) そう言って、丘の上の宿の窓から、女が夜明け前に見下ろしていた坂道を、島村は今下りていくのであったけれども、道端に高く干した襦袢の下に、国境の山々が見えて、その雪の輝きものどかであった。The snow would by then be ten feet deep—the woman had looked down on the steep road from the window of the inn, high on a hill, before daybreak this morning, **and now** Shimamura was walking down the same road. Diapers hung high beside the road to dry. Under them stretched the vista of the Border Range, the snow on its peaks glowing softly. (『雪国』、SC)

but を使用	例	日本語の逆接表現（逆接を表わすものではない）
事態に気づいた瞬間の戸惑い	(4) (10)	×
想定外的话题を出すシグナル	(14) (15)	○「しかし」
想定外の事態に対する驚き	(13)	○「しかし」、「でも」

表 1. 明白な逆接関係がないと思われる箇所での **but** の使用と日本語逆接表現の対応

引用文献

Agatha Christie. 1938. *Hercule Poirot's Christmas*. London: Harper Collins Publishers (アガサ・クリスティー『ポワロのクリスマス』村上啓夫(訳). 2003. 川副智子(訳). 2023. ともにハヤカワ文庫. / *Longman Dictionary of Contemporary English*⁸(LDCE⁸) / *Macmillan English Dictionary for Advanced Learners*²(MED²) / *Oxford Advanced Learner's Dictionary*⁹(OALD⁹) / 内田聖二(編). 2009. 『英語談話表現辞典』東京：三省堂. / 尾野治彦. 2018. 『「視点」の違いから見る日英語の表現と文化の比較』東京：開拓社. / 加藤重広. 2001. 「照応現象としてみた逆接—「しかし」の用法を中心に—」『人文学部紀要』第 34 巻, 47-78. / 川端康成. 1948. 『雪国』新潮文庫. (Snow Country. 1996. trans. by Edward. G. Seidensticker, New York: Vintage International. / 田岡育恵. 2025. 「英文和訳における逆接表現の出現—『ポワロのクリスマス』を事例として—」『大阪工業大学紀要』第 69 巻 2 号, 11-18.

研究発表 13:00 - 14:45

第1室 (1号館4階141教室)

司会 西山淳子 (和歌山大学)

1. 「Will you 構文と Can you 構文の表す依頼内容の差異について—please と共起した例に注目して—」
..... 宇都陽鳳 (大阪大学大学院)
(13:00 - 13:35)
2. 「関係詞節における認識的 will について」 岡麟太郎 (日本大学)
(13:35 - 14:10)
3. 「Used to の「推意キャンセル」と進行形可否に見られる整合性」 島本慎一郎 (日本大学)
(14:10 - 14:45)

第2室 (1号館5階151教室)

司会 徳永和博 (東京農業大学)

1. 「動能構文における動作主の意図性」 加藤翔太 (筑波大学大学院)
(13:00 - 13:35)
2. 「談話標識の新奇表現 in long の語法」 木村快 (慶應義塾大学大学院)
(13:35 - 14:10)
3. 「不定詞を補文にとる使役表現とその補文内部における完了形・進行形の出現について」
..... 村岡宗一郎 (日本大学)
(14:10 - 14:45)

宇都陽鳳（大阪大学大学院）

u583763h@ecs.osaka-u.ac.jp

1. はじめに

英語の依頼表現として、(1) のような Will you 構文と Can you 構文がよく知られている。

- (1) a. Will you sign here? (Huddleston and Pullum 2002: 939)
b. Can you open the door? (Huddleston and Pullum 2002: 939)

両構文を取り上げている文法書 (Quirk et al. 1985; Huddleston and Pullum 2002 など) は数多く存在するが、その機能の違いを明確に比較した研究は少ない。久野・高見 (2022: 52) では、(2) で示されるように、表される依頼内容によって両構文の自然性が揺らぐと指摘されている。

- (2) {Will / #Can} you marry me? (久野・高見 2022: 52)

本研究では、両構文に偏って用いられる動詞の用法の観察を通して、Will you 構文と Can you 構文間で表される依頼内容の特徴に差異が見られるのかを検証する。そして、分析された依頼内容の特徴から、Will you 構文は表面的に依頼をしているように見えるが、実質的には命令をしていると考えられる命令的依頼の用法が拡張されている一方で、Can you 構文では形式的にも実質的にも依頼を表す非命令的依頼の用法が拡張されていることを示す。

2. 先行研究とその課題点

2.1 先行研究の概観

文法書をはじめとした記述的研究では、Can you 構文が Will you 構文よりも丁寧な構文であると分析されている。例えば、安井・安井 (2022: 248) は、Will you 構文を「丁寧な言い方ではあるが、その本質は命令文である」として、当該構文を「丁寧な命令 (polite imperative)」としている。一方、Can you 構文は Will you 構文よりも丁寧な依頼表現として位置付けられている。

コーパス調査から Will you 構文と Can you 構文を分析した論考に、高橋 (2017, 2021) がある。高橋は大規模コーパス *the Corpus of Contemporary American English* (以下、COCA) の粗頻度による調査から、両構文に用いられやすい動詞を調査した。各構文の調査結果を、それぞれ表 1・表 2¹ の形で以下に提示する。高橋 (2017: Chap. 4) は、表 1 から、Can you 構文には、*explain / talk / describe* などの伝達動詞が用いられやすいと指摘する。また、高橋 (2021) は、表 2 を挙げ、Will you 構文に最も用いられる動詞 *do* の生起頻度が全体の 6.3 % であることから、Will you 構文に偏って用いられている動詞が存在しないと主張している。

2.2 先行研究の課題点

まず、記述的研究についてであるが、Will you 構文が Can you 構文と比べて丁寧さが欠けているという記述だけでは、(2) {Will / #Can} you marry me? のように、依頼内容によって各構文の自然性が変動することの説明ができない。もし Can you 構文が Will you 構文よりも丁寧な表現であるとするならば、(2) のようなプロポーズの場面では、丁寧さに欠ける Will you 構文ではなく、より丁寧な Can you 構文を用いて結婚することを依頼しても良いはずである。しかし、実際には Can you 構文ではなく Will you 構文を用いた方が自然に響く。つまり、丁寧さという尺度だけでは両構文の特性を完全に捉えることができない。

¹ 表 2 に示された動詞のうち、*go* と *have* の前の「?」は、依頼ではない、意志の質問の用法が含まれていることを示す。(高橋 2021: 132)

Can you 構文 (用例総数: 4,521)	動詞	頻度
	tell	645
	give	246
	do	194
	explain	152
	help	152
	get	134
	say	109
	talk	79
	come	66
	make	63
	describe	62

表 1: Can you 構文における動詞頻度

Will you 構文 (用例総数: 1307)	動詞	頻度
	do	82
	come	80
	help	55
	marry	46
	tell	43
	take	41
	?go	35
	give	33
	?have	30
	join	25

表 2: Will you 構文における動詞頻度 (高橋 2021:132)

(高橋 (2017:72) の表 3 を一部抜粋)

また、高橋 (2017, 2021) により Will you 構文と Can you 構文の動詞分布には違いが見られるということは示されたが、その動詞分布が各構文のどのような特性を反映しているのかまでは明確にされていない。また、粗頻度の高い動詞のみを調査していることから、粗頻度が低い一方で、Will you 構文と Can you 構文の片方に偏って生起している動詞を考察しておらず、各構文の特性がその動詞分布にどのように反映されているかが不明である。

本研究では、このような課題を解決するために、COCA を用いて Will you 構文と Can you 構文のどちらかに偏って用いられている動詞を特定し、それらの動詞が生起する用例に見られる依頼内容の特徴に基づいて両構文を比較する。

3. 方法論

本研究では Will you 構文と Can you 構文に生起する動詞に着目し、COCA を用いて用例収集を行った。用例収集は以下の点に留意して実施した。

第一に、COCA から抽出される用例を依頼のみに限定するために、Will you と Can you に *please* が後続する場合 (i.e. *Will you / Can you please*) に限定して調査を行なった。*Will you / can you* という形式には、「依頼」の解釈だけではなく、「意志 / 能力の質問」という字義通りの解釈も存在する。COCA のコーパス検索で [will you VERB] あるいは [can you VERB] と検索すると、この 2 つの解釈の違いが区別されずに用例が検索されてしまう。そのため、今回は依頼の用例に分析対象を絞るために *please* が *will you* と *can you* の形式に後続するものを抽出した。² その結果、Will you 構文が 1,151 例、Can you 構文が 1,332 例得られた。

第二に、各構文の依頼内容の特徴を正確に捉えるために、動詞の多義や句動詞の用法を区別した。例えば、(3) のように、Will you 構文において動詞 *get* はさまざまな意味合いで用いられる。

- (3) a. Will you please get me water?
b. Will you please get back here?
c. It's afternoon, Landon, and will you please get up and go home?

(COCA)

(3a) の *get* は「持ってくる」という意味を表している一方で、(3b) は「移動する」という意味を表し、(3c) では *get up* という慣用表現で「起床する」という意味になっている。このように、Will you 構文に動詞 *get* をどの意味で用いるかで、話し手が聞き手に伝える依頼内容は大きく変動する。したがって、どのような依頼で各構文が用いられているのかを正確に把握するために、各動詞の多義や句動詞を区別して分析する必要がある。本研究では、FrameNet とオックスフォード現代英英辞典 (第 9 版) を参照して、COCA から抽出された各構文の全ての用例における動詞の用法を、手作業で分類した。

² *please* や *kindly* を Will you 構文や Can you 構文に用いることで、以下のように複数ある解釈を依頼の解釈のみに限定することができる。(Huang 2014; Levinson 1983; Stefanowisch 2003)

Can you please/kindly open the door?
⇒ Open the door! / *Are you capable of opening the door?

(Stefanowitsch 2003: 110)

第三に、各構文に生起する動詞の粗頻度が低くても、その動詞が特定の構文に偏って用いられているかを検討するために、Gries and Stefanowitsch (2004) によって提案された Distinctive Collexeme Analysis という統計分析を用いて分析を行った。この統計分析は、機能が類似した複数の構文のスロットに生起する特定の要素が、どの構文に、どれほど偏って生起するかを検証する手法である。この分析の利点は、低頻度の動詞であってもその構文にどれだけ強く引き寄せられているかを明らかにし、そこから各構文の特性を分析できる点にある。この Distinctive Collexeme Analysis の統計処理には、R Core Team (2025) と Flach S (2021) によって開発されたパッケージ Collostructions を使用した。

また、Will you 構文には (4) のように談話を開始・終了するきっかけを作るために話し手が用いていると考えられる事例が見られた。

(4) [Mr. Crompton と Ms. Miller が一緒に食事をしている場面]

“Mr. Crompton, I need to get to know you a little if I’m to paint you.” “Yes, I suppose that’s true.” He was silent for a time, then he folded his napkin. red rose. “Ms. Miller, will you please excuse me?” He held up one large hand to keep me in my seal. “Please, stay.” He moved awkwardly away from the table and walked out of the dining room with an obvious self-consciousness, utterly aware of my eyes on him.

(COCA, emphasis mine)

このような Will you 構文の用例は聞き手に依頼をしているものとは考えられなかったため、分析対象から除外した。その結果、動詞 *excuse* が用いられた全ての用例と動詞 *listen* が用いられた 1 例が分析対象から除外された。

4. 分析

まず、以下に分析結果を提示する。表 3 は Will you 構文に、表 4 は Can you 構文に偏って用いられる動詞を示している。最も右の列の Collostruction Strength は、その値を示す動詞が、その生起する構文にどれほど強く引き寄せられているかを表す。この値が高ければ高いほど、その動詞が構文の特徴づけに重要であると解釈される。なお、今回は高橋 (2021) が Will you 構文で粗頻度が高い動詞のうち上位 10 語を検証していたことに倣い、Collostruction Strength が高く示された動詞のうち上位 10 語を検証する。

VERB	粗頻度 (Can you 構文)	期待値 (Can you 構文)	粗頻度 (Will you 構文)	期待値 (Will you 構文)	COLL.STR.LOGL
SHUT UP (静止)	3	15.5	26	13.5	24.48799
MARRY	0	6.9	13	6.1	19.96048
STOP (停止)	70	93	104	81	13.14433
EXCUSE	1	6.9	12	6.1	12.61193
LISTEN	1	6.9	12	6.1	12.61193
GET (移動)	14	24.6	32	21.4	10.12963
TAKE (A) SEAT(S)	0	3.2	6	2.8	9.1929
WELCOME	0	3.2	6	2.8	9.1929
LET KNOW	0	2.7	5	2.3	7.65842
SEE	0	2.7	5	2.3	7.65842

表 3: Will you 構文に引き寄せられている動詞 (Will you 構文全体の粗頻度: 1,151)

VERB	粗頻度 (Can you 構文)	期待値 (Can you 構文)	粗頻度 (Will you 構文)	期待値 (Will you 構文)	COLL.STR.LOGL
EXPLAIN (言及)	54	34.7	11	30.3	25.98426
HELP	78	57.2	29	49.8	17.76641
ELABORATE	11	5.9	0	5.1	13.82332
CHECK (確認)	10	5.3	0	4.7	12.56311
PROVIDE	17	10.7	3	9.3	9.04211
WAIT	7	3.7	0	3.3	8.78674
POINT OUT	6	3.2	0	2.8	7.52937
SUGGEST	6	3.2	0	2.8	7.52937
TURN (変化誘引)	10	5.9	1	5.1	7.38285
SEND	30	21.9	11	19.1	6.82686

表 4: Can you 構文に引き寄せられている動詞 (Can you 構文全体の粗頻度: 1,332)

次に、各構文間で表される依頼内容の特徴の違いを、各構文に引き寄せられている動詞の用例に注目する形で分析する。なお、COCA には映画やテレビ番組を中心に話し言葉の会話も収録されているが、どの発話が誰によってなされたのかという情報が表示されないことから話し手の特定が困難な場合がある。この問題に対処するため、映画やテレビ番組のような話し言葉の事例は、Yarn (<https://yarn.co/>) という映像を発話単位で表示できる Web サービスを利用して実際の映像を分析した。したがって、Yarn に登録されていない等の事由で発話し手を特定できなかった COCA の用例は分析の対象から外した。その結果、Will you 構文は 63 例、Can you 構文は 147 例を分析対象とした。

4.1 Will you 構文

◆話し手が不満から聞き手に行為の遂行を求める Will you 構文

表 3 から、Will you 構文に最も引き寄せられていると示されている動詞は *shut up* であることがわかる。この動詞は、(5) のように、聞き手の行為に対して話し手が不満を表すために用いられていた。ここでは、依頼者である A に何度も依頼されていることが、被依頼者である B によって遂行されずに、A が腹を立てており、再度その行為を遂行するよう求めるために Will you 構文が産出されている。

- (5) [B は呪文を唱えており、それが A の眠りを妨げている場面]

A: Shut up.

[B は呪文を唱え続ける]

A: Shut up. [1 回目よりも語気が強い]

[B は呪文を唱え続ける]

A: Oh, will you please shut up?

B: I'm doing this for your benefit, Rygel.

A: Oh, thank you! Now benefit me elsewhere! I'm trying to sleep!

(COCA, emphasis mine)

分析された *shut up* の用例 7 例は、全てこの用法で用いられていた。このような話し手の不満を表す用法は、*shut up* 以外の動詞でも観察され、分析された全用例 63 例中 39 例がこの用法で用いられていた。表 5 は、表 3 で示された動詞の中で、この用法で用いられる動詞を示しており、その頻度と各動詞の全用例のうちこの用法で用いられる割合を示している。

動詞	頻度	割合
SHUT UP (静止)	7	100% (= 7/7)
STOP (行為停止)	23	85.2% (= 23/27)
LISTEN	4	80% (= 4/5)
GET (移動)	5	71.4% (= 5/7)
合計	39	62.0% (= 39/63)

表 5: 話し手が不満から聞き手に行為の遂行を求める Will you 構文で用いられる動詞

◆話し手が権力に基づいて聞き手に行為の遂行を求める Will you 構文

stop や *get* は、(5) の用法以外に、(6) のように、話し手が権力に基づいて聞き手にある行為の遂行を求める用法でも用いられる。この用法で話し手が持つ権力は、上下関係や公的な場での取り決めに基づいている。例えば、(6) では、話し手と聞き手が親子関係にあることに基づいた行為の指示と考えられる。

- (6) [父親の Mr. Studevant にじゃれつく娘の Jessie に母親の Mrs. Studevant が話しかける場面]

Jessie, will you please get down. You're creasing your father's shirt.

(COCA, emphasis mine)

また、(7) の *welcome* は、番組や式典のプログラムのような公的な取り決めを踏まえて、話し手が聞き手に歌手を歓迎することを求めている。

- (7) [ある音楽番組で次に歌う歌手が紹介された直後の場面]

From Espers, will you please welcome, the beautiful voice of Meg Baird. Meg Baird. (APPLAUSE)

(COCA, emphasis mine)

表 6 は、表 3 の中でこの用法で用いられる動詞を示しており、その頻度と各動詞の全用例に対してこの用法で用いられる割合を示している。

動詞	頻度	割合
STOP (行為停止)	4	14.8% (= 4/27)
GET (移動)	2	28.6% (= 2/7)
TAKE (A) SEAT(S)	1	100% (= 1/1)
WELCOME	3	100% (= 3/3)
LET KNOW	1	50% (= 1/2)
SEE	1	50% (= 1/2)
合計	12	19.0% (= 12/63)

表 6: 話し手が権力に基づいて聞き手に行為の遂行を求める Will you 構文で用いられる動詞

ここまで確認してきた (6) や (7) のような話し手が権力に基づいて、聞き手に行為の遂行を求める Will you 構文は、安井・安井 (2022: 248) で主張される「丁寧な命令」として機能していると考えられる。一方で、話し手が不満から聞き手に行為の遂行を求める Will you 構文は、必ずしも丁寧であると言い切れない。^{3,4} 言い換えれば、Will you 構文は、命令文や遂行文 (e.g. *I order you to VP*) のように直接的に命令を表す形式ではなかったり、*please* のような丁寧であることを示す言葉が伴っていたりするため、一見すると丁寧に見えるが、実際には丁寧さが伴っていない場合があるということである。以上より、Will you 構文には、安井らの指摘する丁寧さとは関係なく、「形式上は丁寧な依頼をしているように見えるが、実質的には命令として機能している用法」が存在していることがわかる。この用法を「**命令的依頼**」と本研究では呼称する。Will you 構文のうち、命令的依頼のものは 63 例中 51 例 (81.0%) であった。このことから Will you 構文は命令的依頼の用法が主要な用法であると言える。

◆聞き手の意志を確認する Will you 構文

ここまで表 3 に示されている一方で、その用法を全く確認していない動詞に *marry* がある。Will you 構文において *marry* が用いられた用例で特徴的に見られるのは、(8) で観察されるように、聞き手が Will you 構文に対して Yes / No で返答するという点である。つまり、聞き手は話し手の発話を依頼だけではなく、依頼されたことを引き受ける意志があるかという意志の質問としても捉えている。この点、動詞 *marry* が用いられた Will you 構文は、字義通りの意志の質問の側面があると言える。このような Will you 構文は、*marry* 以外の動詞が用いられている場合も僅かながらに観察される。

(8) [A が B にプロポーズする場面]

A: *Will you please marry me and share the rest of my life?*

B: Yes. Oh, my God.

(COCA, emphasis mine)

表 3 の動詞の中で、聞き手の意志を確認する用法で用いられる動詞の分布を表 7 に示す。

動詞	頻度	割合
MARRY	3	100% (= 3/3)
LET KNOW	1	50% (= 1/2)
SEE	1	50% (= 1/2)
合計	5	7.9% (= 5/63)

表 7: 聞き手の意志を確認する Will you 構文で用いられる動詞

(8) のように意志を確認する側面が見られる用法は、命令的依頼とは異なり、「命令ほどの指令力を伴っておらず、形式的にも実質的にも依頼として機能している」と考えられる用例であった。例えば、(8) の事例は、「結婚しろ」という命令よりも「結婚してください」という指令力の弱い依頼であると解釈の方が自然である。この用法を「**非命令的依頼**」と本研究では呼称する。Will you 構文のうち、非命令的依頼のものは 63 例中 5 例 (7.9%) であった。

◆ Will you 構文の用法のまとめ

本研究の調査で確認された Will you 構文の用法をまとめる。まず、Will you 構文には大まかに 2 つの用法が見られる。1 つ目が「形式上は丁寧な依頼をしているように見えるが、実質的には命令として機能している」命令的依頼である。この命令的依頼の用法は、さらに権力に基づいて産出される場合と話し手の聞き手に対する不満に対して産出される場合に分けることができる。2 つ目が「命令ほどの指令力を伴っておらず、形式的にも実質的にも依頼として機能している」非命令的依頼である。この非命令的依頼の用法は、聞き手の意志を確認する側面が見られる。

4.2 Can you 構文

◆自分の問題対処のために聞き手に協力を求める Can you 構文

³ ウィズダム英和辞典 (第 3 版) には、Will you 構文に *please* を用いても丁寧に響きにくいという指摘がある。

⁴ 本研究の分析対象からは除外したが、COCA の用例の中には “Oh, will you please shut the hell up?!” (COCA) のように罵倒表現が伴う用例が見られ、丁寧な言い回しであると断定しにくい Will you 構文が観察される。

表 4 で示される通り、Can you 構文に最も引き寄せられている動詞は *explain* であり、その次に引き寄せられている動詞は *help* である。これらの動詞は、(9) のように、話し手が現在直面している問題に対処するために聞き手に協力を求める形で用いられる。

(9) [ある受付でのやり取り。A が受付を尋ねる人物で、B は受付担当をしている。]

B: You should go on the website.

A: I have been on the website. I've been all over the website. That's why I came here to talk to someone in person. Can you please help me? Please?

B: Give me the info.

A: It's Karev.

(COCA, emphasis mine)

表 8 は、表 4 の動詞の中で、この用法で用いられる動詞を示しており、その頻度と当該動詞の全用例に対してこの用法で用いられる割合を示している。

動詞	頻度	割合
EXPLAIN (言及)	15	38.5% (= 15/39)
HELP	43	97.7% (= 43/44)
ELABORATE	4	50% (= 4/8)
CHECK (確認)	1	33.3% (= 1/3)
PROVIDE	5	35.7% (= 5/14)
WAIT	1	50% (= 1/2)
SUGGEST	6	100% (= 6/6)
TURN (変化誘引)	3	100% (= 3/3)
SEND	13	56.5% (= 13/23)
合計	91	61.9% (= 91/147)

表 8: 自分の問題対処のために聞き手に協力を求める Can you 構文で用いられる動詞

◆聞き手の主張の整合性を確認する Can you 構文

Explain は、自分の問題対処のために聞き手に協力を求める Can you 構文で用いられることを確認したが、表 8 はその全ての用例が当該用法であるわけではないことを示している。また、*explain* 以外の伝達動詞にも同様のことが言え、表 4 で示される伝達動詞 *point out* は表 8 に含まれていない。高橋 (2017) で Can you 構文でよく用いられるとされる伝達動詞は、(10) で示されるように聞き手の自身の主張の説明を求めて、その整合性を確認するためにも用いられる。

(10)[あるブログのコメントに寄せられた別のコメント]

If you agree with the SCOTUS Citizens United ruling can you please explain where the Constitution so much as hints/implies let alone strictly states that artificial persons other than the government have an entitlement to any of the rights an actual person has? Anyway, your argument is specious. That fact that the specific words -- separation of church and state -- are not there in the text is irrelevant to the fact that it is easy for anyone capable of independent rational thought to find that meaning in the Establishment Clause. [...]

(COCA, emphasis mine)

表 9 は、表 4 で示された動詞の中で、この用法で用いられる動詞を示しており、その頻度と各動詞の全用例のうちこの用法で用いられる割合を示している。

動詞	頻度	割合
EXPLAIN (言及)	24	61.5% (= 24/39)
ELABORATE	4	50% (= 4/8)
PROVIDE	9	64.3% (= 9/14)
POINT OUT	5	100% (= 5/5)
SEND	1	4.3% (= 1/23)
合計	43	29.3% (= 43/147)

表 9: 聞き手の主張の整合性を確認する Can you 構文で用いられる動詞

◆話し手が切迫した状況で相手に援助を請願する Can you 構文

表 4 で示された動詞のうち *send* をはじめとする一部の動詞は、(11) のように、命の危険のような話し手が切迫している状況で援助を請願する場合に、Can you 構文で用いられる。

- (11)[A はオペレーター。 B (男性) と C (女性) が通報者と一緒に通報している。]
 A: We'll get somebody out there right away. You are at Sparks Middle School?
 B: Yes. They shot again.
 C: A student from Sparks's middle school. Can you please send police out here? There's a kid with a gun.
 A: OK. (COCA, emphasis mine)

表 10 は、表 4 で示された動詞の中で、この用法で用いられる動詞を示しており、その頻度と各動詞の全用例のうちこの用法で用いられる割合を示している。

動詞	頻度	割合
HELP	1	2.3% (= 1/44)
CHECK	2	66.7% (= 2/3)
WAIT	1	50% (= 1/2)
SEND	6	26.1% (= 6/23)
合計	10	6.8% (= 10/147)

表 10: 話し手が切迫した状況で相手に援助を請願する Can you 構文で用いられる動詞

◆ Can you 構文の用法のまとめ

本研究の調査で確認された Can you 構文の用法をまとめる。Will you 構文は命令的依頼の用法が多く観察されたが、Can you 構文には命令的依頼の用法は見られなかった。つまり、Can you 構文の用法は非命令的依頼が主要であると言える。この非命令的依頼の用法は、聞き手に問題対処のために協力を求める場合と切迫した状況で聞き手に援助を請願する場合がある。また、聞き手の主張の整合性を確認する用法のように、聞き手の能力を確認する側面が見られる用法も見られる。

5. まとめ・本研究の課題

本研究では、Will you 構文と Can you 構文に偏って用いられる動詞の用法に着目する形で、両構文の機能に違いが見られるのかを検証した。分析の結果、Will you 構文は命令的依頼の用法を中心に拡張が進んでいる一方で、Can you 構文は非命令的依頼の用法を中心に拡張が進んでいることが観察された。命令的依頼は、形式上丁寧な依頼表現であるように見えるが、実質的には命令として機能していると考えられるが、非命令的依頼表現は形式的にも実質的にも丁寧な依頼表現として機能している点で違いがある。

本研究は Will you 構文と Can you 構文の特性を Will you / Can you という形式に please が後続する形で検証したため、Will you 構文と Can you 構文を網羅的に調査したわけではない。Please 以外の表現と共起した場合に各構文で表される依頼内容の特徴はどのようなものであるのかは、今後の課題とした。

参考文献

- Flach S. (2021). collocations: An R Implementation for the Family of Collocational Methods. R package version 0.2.0. / Gries, Stefan Th. and Stefanowitsch, Anatol. (2004). "Extending collocational analysis: A corpus-based perspective on 'alternations'", *International Journal of Corpus Linguistics*, 9, 1, 97-129. / Huang, Yan. (2014). *Pragmatics, second ed.* (2), Oxford University Press. / Huddleston, R. D. and Pullum, G. K. (2002). *The Cambridge Grammar of English*. Cambridge University Press. / 久野暉, 高見健一. (2022). 『謎解き英文法 助動詞』, くろしお出版: 東京. / Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik. (1985). *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Pearson Longman, London. / R Core Team. (2025). R: A Language and Environment for Statistical Computing. R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria. <<https://www.R-project.org/>>. / Stefanowitsch, Anatol (2003) "A construction-based approach to indirect speech acts," *Metonymy and pragmatic inferencing*, ed. by Klaus-Uwe Panther and Linda L. Thornburg, 105-126, John Benjamins, Amsterdam. / 高橋英光. (2017). 『英語の命令文 神話と現実』くろしお出版: 東京. / 高橋英光. (2021). 「動詞と談話文脈から見た Will you 依頼文 発話行為と認知言語学」, 児玉一宏・小山哲春 (編), 『認知言語学の最前線 山梨正明教授古希記念論文集』, ひつじ書房, 125-157. / 安井稔, 安井泉. (2022). 『英文法総覧』, 開拓社: 東京.

コーパス・データベース

- Davies, Mark. (2008-) The Corpus of Contemporary American English (COCA). Available online at <https://www.english-corpora.org/coca/>. / Bakeley FrameNet Project: <https://framenet.icsi.berkeley.edu/>.

辞書

- Oxford Advanced Learner's Dictionary, 9th edition. Oxford University Press, 2015. / 『ウィズダム英和辞典』第3版, 三省堂, 2013.

関係詞節における認識的 will について

岡麟太郎 (日本大学)
basket7ren@gmail.com

1. はじめに

未来に言及する関係詞節では、現在時制（非モーダル文）と認識的 will（推量の will）のいずれも用いられるとされるが、その意味解釈の違いについて論じられることは少ない（以下、下線等の強調は筆者による）。

- (1) a. I'll try to get the autograph of the man who {*speaks/will speak*} at assembly tomorrow. (Allen (1966: 178))
b. The man who {*solves/will solve*} this problem will receive a reward. (Declerck (2006: 545))
⇒ (1a) と (1b) では、現在時制と認識的 will がともに用いられているが、その解釈には質的な違いがある（詳細は §3 で後述する）。

さらには、関係詞節のなかには、(2) のように現在時制しか認められない場合もある。

- (2) I'll kill anybody who {*touches/*will touch*} my things. (Swan (2016⁴: §31.4))

(3) 問題の所在

- ①: (1a) と (1b) で現在時制と認識的 will における意味的差異（が生じる原因）はどのようなものか。
②: (2) で認識的 will が容認されない理由はなにか。

本稿の目的は、関係詞節内の認識的 will について、現在時制との比較・対照を交えながら、その意味解釈について論じることである。

2. 「条件」を表わす関係詞節

- (4) 問題提起: (1a) と (1b) の現在時制と認識的 will の解釈が異なるのはなぜか。

- (5) a. I'll try to get the autograph of the man who {*speaks/will speak*} at assembly tomorrow. [= (1a)]
b. The man who {*solves/will solve*} this problem will receive a reward. [= (1b)]
⇒ a)とは異なり、b)は *who* solves this problem を *if* he solves this problem と書き換えても、その本質的な意味に差が生じない。

N.B. 1 条件の if 節に相当する関係詞節

- (I) Students *who* work hard pass their exam. = *If* students work hard, they pass their exam. (Quirk et al. (1985: 1241))
(II) Anyone *who* thinks they can take advantage of us will be disappointed.
= *If* anyone thinks they can take advantage of us, they will be disappointed. (Huddleston and Pullum (2002: 759))

- (6) a. It {**rains/will rain*} tomorrow. [単文レベル] (Wekker (1976: 85))
b. If it {*rains/*will rain*}, the match will be cancelled. [復文レベル: 未来予測型条件文] (Palmer (1990²: 171))

⇒ (1b) の関係詞節は主節命題の成立条件（実質的な条件節に相当）として機能するため、その関係詞節における現在時制と認識的 will の解釈は、非条件的な関係詞節 (= (1a)) 内のものとは異なる。

3. 関係詞節における現在時制と認識的 will

3.1. 関係詞節と予測（不）可能性（±Predictable）

- (7) 問題提起：関係詞節が条件節に相当するものとして解釈されるのはどのような場合か。
 ⇒ (i) 関係詞節の示す事柄が主節命題に（時間的、あるいは論理的に）先行し、かつ、
 (ii) その事柄が、発話時点では出来事生起を確定しえない「予測不可能な（[-Predictable]）出来事」である場合。

N.B. 2 「予測不可能な（[-Predictable]）出来事」と現在時制（非モーダル文）

- (i) Australia {*meets*/**beats*} Sweden in Davis Cup final in December. (Huddleston and Pullum (2002: 132))
 (オーストラリアは、12月開催のデビスカップ決勝戦でスウェーデン {と対戦する/*を破る})
 ⇒ 決定済みの対戦カードを事実として断定することはできるが、オーストラリアが勝利する保証はどこにもない (Cf. Lakoff (1970: 339))。ゆえに、試合前に勝ち負けがすでに仕組まれているような八百長試合などの場合でない限り、「確信」を表わす非モーダル文 (*beats*) は容認されない。
 (ii) It **rains* tomorrow. (Wekker (1976: 85))
 ⇒ 降雨のような可変性 (Changeability) の高い自然現象に、「確信」を表わす非モーダル文を用いることはできない。ただし、月面ドームでの人工的に雨を降らせられるような場合は容認される (Cf. Goodman (1973: 31) ; 吉良 (2018: 140))。

3.2. 関係詞節における条件的推量の思考過程

予測不可能な（[-Predictable]）出来事生起については、話し手は「確信」を持ち得ない。それでもなお、先行詞を限定する関係詞節内で「確信」を表わす非モーダル文を用いるなら、実際にその出来事が生起するかどうかはさておき、「そうなるもの」という前提条件を断定的に提示しようとする話し手の意図を表わすことになる。

N.B. 3 グライスの協調の原理：質の公理 (Maxim of Quality)

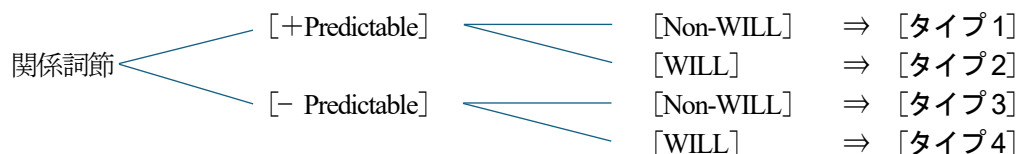
- Quality: Try to make your contribution one that is true. (誠実たれ)
 - Do not say what you believe to be false. (嘘をつくな)
 - Do not say that for which you lack adequate evidence. (証拠を欠く発言をするな)

他方で、関係詞節が「予測可能な（[+Predictable]）出来事」を表わす場合、その生起可能性に対する話し手の確信度そのものが情報価値を持つため、条件的解釈（推量）は生じにくい。

3.3. 現在時制と認識的 will - 4つのタイプ

以上を踏まえると、未来に言及する関係詞節の意味解釈は「出来事の予測（不）可能性（±Predictable）」と「Modal (WILL) の有無」という2つの軸から、次の4つのタイプに分類できる。

- (8) 「出来事の予測（不）可能性（±Predictable）」と「Modal (WILL) の有無」によるタイプ分け



- (9) 非条件的関係詞節（[+Predictable]） [= (1a)]

- a. [タイプ 1] : I'll try to get the autograph of the man who *speaks* at assembly tomorrow.
 b. [タイプ 2] : I'll try to get the autograph of the man who *will speak* at assembly tomorrow.

- (10) 条件的関係詞節（if 節に相当）（[-Predictable]） [= (1b)]

- a. [タイプ 3] : The man who *solves* this problem will receive a reward.
 b. [タイプ 4] : The man who *will solve* this problem will receive a reward.

3.3.1. 非条件的関係詞節における現在時制と認識的 will (タイプ 1 とタイプ 2)

⇒ 「現在時制は話し手の「確信」を表わし、認識的 will は「確信のなさ」を表わす (Cf. Lyons (1977: 809))」

(11) I'll try to get the autograph of the man who {speaks/will speak} at assembly tomorrow.

([拙訳] 明日、集会で演説する人物からサインをもらうつもりです)

⇒ speaks (タイプ 1) が用いられた場合、「話し手は事前に集会のプログラム等を確認して、演説者が誰かをすでに知っている状況」であり、will speak (タイプ 2) が用いられた場合は、「集会に参加して初めて演説者の情報を知り、その人からサインをもらうような状況」が考えられる。

3.3.2. 条件的関係詞節における現在時制と認識的 will (タイプ 3 とタイプ 4)

⇒ 条件的関係詞節内の現在時制と認識的 will については、条件の if 節における両者の意味解釈を援用する。

(12) タイプ 3 (条件的 who + 現在時制)

The man *who solves* this problem will receive a reward.

([拙訳] この問題を解決する者が、報酬を得るだろう)

⇒ これから出題される問題を誰が解決するは予測不可能な ([-Predictable]) ため、この関係詞節は条件の if 節に相当する。

⇒ solves (タイプ 3) が用いられる場合、話し手は「誰かが問題を解決する」という出来事を事実 (Fact) になるものとして断定的に条件化し、先行詞を限定している状況である。

(13) タイプ 4 (条件的 who + will)

The man *who will solve* this problem will receive a reward.

([拙訳] この問題を解決する [者が現れるのなら、その] 者は、報酬を得るだろう)

⇒ タイプ 4 の will は、if 節内の will と同様に、発話以前に第三者 (ときに、話し手自身) によって構築されていた推量を前提として用いられる (いわゆる、'Echo' will である)。たとえば、「Someone will solve this problem. (この問題を解決する者はきっと現れるだろう)」という推量を、話し手が「オウム返し」に関係詞節内で繰り返している状況が考えられる。そのため、solves (タイプ 3) の場合とは異なり、will solve (タイプ 4) による条件的推量は客観的要素を含んだ解釈となる。

N.B. 4 if 節内の認識的 will ('Echo' will)

(i) A: Who will be given the job?

B: I think it will be George.

A: George? But ... Tell me, if it will be George, how come I have not seen his application?

(Declerck (1984: 228))

(ii) a. If we will have an unusually wet winter (as the meteorological office predicts), the threat of a serious water shortage will recede, for the time being at least. (Huddleston and Pullum (2002: 744))

b. If you will be alone this New Year, just let us know about it.

[= If you can predict now that you will be alone at the New Year, ...]

(Leech (2004³: 64))

⇒ 条件節に表出した認識的法助動詞はいずれも、発話より前に構築されていた主観的モダリティが「オウム返し」に組み込まれたもの (= 「客観的モダリティ」) である。(Cf. 吉良 (2018: 81))。

(14) かくして、関係詞節における現在時制と認識的 will の意味解釈は以下のようにまとめられる。

関係詞節			意味解釈	例文
非条件的関係詞節	現在時制	タイプ 1	話し手の「確信」	(11)
	will	タイプ 2	話し手の「確信のなさ」	
条件的関係詞節 (実質的な if 節に相当)	現在時制	タイプ 3	事実になるものとしての条件的断定 (if 節内の現在時制に相当)	(12)
	'Echo' will	タイプ 4	発話より前に構築されていた推量 (if 節内の will に相当)	(13)

4. 関係詞節における認識的 will の非容認性

興味深いことに、関係詞節のなかには、認識的 will は用いられず現在時制の使用が義務的となる場合がある (Cf. Swan (2016⁴: §31.4))。その一例が、any を伴う名詞を先行詞とする関係詞節である。

- (15) I'll kill anybody who {*touches*/**will touch*} my things. [= (2)]
〔拙訳〕 誰であれ、私のものに触れる者は殺す)

(16) 問題提起：(15) で認識的 will が容認されないのはなぜか。

- (17) a. **Every** friend of his was a friend of mine. [実際にある対象が存在する場合]
b. **Any** friend of his was a friend of mine. [仮にある対象が存在するとした場合]
(a-b: Downing and Locke (1992:177) ; Cf. 小西 (2006: 81f.))
⇒ 肯定文の any は「どんな〜でも」という総称の意味を含みとする一方で、現実世界における参照対象の存在を前提としない (Cf. 小西 (2006: 81f.))。

N.B. 5 any + 限定詞

Any gentleman wouldn't use such language.

= *Anybody who is gentleman* wouldn't use such language.

(Bolinger (1977: 23f.))

⇒ any を伴う名詞を先行詞とする関係詞節では、先行詞は「どんな〜でも」という意味になり、他のものを排除する。つまり、そこには推量の余地はなく、したがって will (推量) は用いられない。

(18) 手元の実例

- a. **Anyone** who *keeps* the ability to see beauty never grows old. (カップに印字された名言)
〔拙訳〕 美を見る力を保ち続ける者は、決して老いることはない)
b. According to Nevelskoy's testimony, the Gilyaks consider working the soil a great sin; **anybody** who *begins* to dig the earth or who *plants* anything will infallibly die. (Haruki Murakami, *IQ84*)
(ネヴェリスコイの証言によると、ギリヤーク人は農業を大変な罪悪と見なしており、地面を掘り始めた
り、何か植えたりしようものなら、その人間は必ず死ぬと信じている) (村上春樹訳)
c. Lost — ..., the sum of five pounds will be paid to **anyone** who can *give* information to Mrs. Smith, at Smith's Wharf, or at 221B, Baker Street, as to the whereabouts of the said Mordecai Smith and the launch Aurora.
(Arthur Conan Doyle, *The Sign of Four*)

(行方不明 … モーディカイ・スミス の 消息につ き、情 報をスミス夫人、またはベイカー街二二一番地 B までお寄せいただいたかたに、金五ポンドの謝礼を呈す) (深町眞理子訳)

⇒ 言語事実：anyone who 節内では認識的 will は用いられにくい。BNC 調査 (8/2210 例) ; COCA 調査 (323 /28751 例) ; Harry Potter 全 7 作品 (0/37 例) にて、認識的 will の使用は 1 割以下であった。

N.B. 6 「疑問詞 + ever」 と 「any + 関係詞節」 の並行性

上の傾向を踏まえると、whoever のような「疑問詞 + ever」は、[any + 関係詞] でパラフレーズされることから、「疑問詞 + ever」が導く節内でも、認識的 will は容認されにくい傾向があると考えられる。

You may invite **whoever** (= anyone who) wants to come and **who(m)ever** (= anyone whom) you like.

(安井・安井 (2022: 372))

⇒ (15) や (18) で認識的 will が用いられないのは、命題内容が事実 (Fact) になるともならないとも断定しないような不確定な条件に基づく主節での主張には、語用論的な情報伝達価値がないためである。すなわち、if 節内で認識的 will が容認されにくいという言語事実と並行的な言語現象といえる。

⇒ この点を別の角度から眺めれば、先行詞に any を伴う名詞が現れる環境下でさえ 'Echo' will (タイプ 4) の場合は容認される余地があることが考えられる。

5. さらなる問題

前節では、any を伴う名詞を先行詞とする関係詞節においては、認識的 will が容認されないということを確認した。しかし、手元の資料やコーパス調査によれば、極めて少数（1 割以下）ではあるものの、同一の言語環境下で認識的 will が用いられていると解釈できる例は存在する。

(19) 問題提起：any を伴う名詞を先行詞とする関係詞節内で認識的 will が容認されるのはどのような場合か。

⇒ 認識的 will が‘Echo’ will (タイプ4) として用いられる場合である。

(20) Anyone who + will の実例

⇒ この例（コナン・ドイル『シャーロック・ホームズの復活』第5章から）は、ホールダネス公爵（the Duke of Holdernessee）が失踪した息子の捜索に提示した報奨金の条件を、ホームズが本人に確認している場面である。

Homes : “I should like to have this confirmed from your own lips.”

The Duke : “Certainly, Mr. Holmes.”

Homes : “It amounted, if I am correctly informed, to five thousand pounds to *anyone* who *will tell* you where your son is?”

The Duke : “Exactly.”

Homes : “And another thousand to *the man* who *will* name the person or persons who keep him in custody?”

The Duke : “Exactly.”

(Arthur Conan Doyle. *The Return of Sherlock Holmes*)

（ホームズ：「それ〔この事件で報奨金が出る旨〕が事実であるかどうかを、閣下ご自身の口からお答え願いたいのです」

公爵：「たしかにそのとおりだ、ホームズ君」

ホームズ：「もしもぼくの聞きまちがいでなければ、その額は、ご子息の所在をお知らせしたものにたいして五千ポンド、ということでしたが？」

公爵：「いかにも」

ホームズ：「さらに、ご子息を監禁している単数もしくは複数の人物がだれであるか、それを名指したものにたいしても、べつに一千ポンドを出されるとも？」

公爵：「それもまちがいない」

（深町眞理子訳）

⇒ (20) に見られる anyone who will tell における will は、話し手（ホームズ）の「確信のなさ」を表わす非モーダル文（タイプ2）としては解釈できない。もしタイプ2であるならば、anyone who will tell は「情報を提供する可能性のある人物」を指すことになり、極言すれば、実際には情報を提供していない人物までもが報奨金を受け取るという誤解を招きかねない。これは依頼者（ホールダネス公爵）の意図と明らかに反する。

⇒ また、この文脈で tells (タイプ3) を用いた場合、話し手自身が「ご子息の所在を知らせた状況」を条件化したニュアンスが強まる。しかし、文脈や下線文 (if I am correctly informed) から明らかなように、ホームズは自ら条件を設定しているのではなく、ホールダネス公爵が事前に提示していた報奨金の条件を確認しているのである。

⇒ したがって、この will はホームズ自身による認識的判断ではなく、既にホールダネス公爵が発言した条件をオウム返しに再現するものと考えられる。ゆえに、(20) における認識的 will は ‘Echo’ will (タイプ4) と解釈される。

6. まとめ

- ・ 関係詞節における認識的 will の意味解釈は、2通りの解釈がある。1つは、話し手の「確信のなさ」を表わすモーダル will (タイプ2)、そして、発話よりも前に構築されていた推量を‘オウム返し’に繰り返す ‘Echo’ will (タイプ4) である。
- ・ この 2通りの意味解釈が生じる理由は、関係詞節が主節命題の成立条件 (実質的な条件節) として機能するためである。本稿における、その要件は、(i) 関係詞節の示す事柄が主節命題に (時間的、あるいは論理的に) 先行し、かつ (ii) その事柄が発話時点では生起可能性を確定しえない「予測不可能 ([-Predictable]) な出来事」である。
- ・ 条件的関係詞節に現れる認識的 will の解釈はいずれも、‘Echo’ will (タイプ4) である。これは条件を表わす if 節内での認識的 will が‘Echo’ will として現れるという言語事実と並行する。
- ・ 以上の考察から、関係詞節における認識的 will の意味解釈を「出来事の予測 (不) 可能性 (±Predictable)」の観点から統一的に説明できることを示した。

参考文献

- Allen, Robert L (1966) *The Verb System of Present-Day American English*. London: Longman.
- Bolinger, Dwight (1977) *Meaning and Form*. London: Longman.
- Close, Reginald Arthur (1977) “Some Observation on the Meaning and Function of Verb Phrases Having Future Reference”, *Studies in English Usage, The Resources of a Present-Day English Corpus for Linguistic Analysis*, ed. by Wolf-Dietrich Bald and Robert Ilson, 125-156. Frankfurt: Lang.
- Declerck, Renaat (1984) “‘Pure Future’ Will in If-clauses”, *Lingua* 63, 279-312.
- Declerck, Renaat (1988) “Restrictive When-clauses”, *Linguistics and Philosophy* 11, 131-168.
- Declerck, Renaat (2006) *The Grammar of the English Verb Phrase: The Grammar of the English Tense System*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Downing, Angela. and Phillip. Locke (1992) *A university Course in English Grammar*, New York: Prentice Hall.
- 江川泰一郎 (1991³) 『英文法解説 (改訂三版)』 東京: 金子書房.
- 太田朗 (1995) 『意味論序説 否定の意味』 東京: 大修館書店.
- Goodman, Fred (1973) “On the Semantics of Futurate Sentence”, *Working Papers in Linguistics* 16: 76-89, Columbus OH: Ohio State University.
- Grice, Herbert Paul (1975) “Logic and Conversation”, *Syntax and Semantics* 3: *Speech Acts*, ed. By Peter Cole and Jerry L. Morgan, 41-58, New York: Academic Press.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 吉良文孝 (2018) 『ことばを彩る 1 テンス・アスペクト』 東京: 研究社.
- 小西友七 (編) (2006) 『現代英語語法辞典』 東京: 三省堂.
- Lakoff, Robin (1969) “Some Reasons Why There Can’t Be Any *some-any* Rule,” *Language* 45, No.3, 608-615.
- Lakoff, Robin (1970) “Tense and its Participants”, *Language* 46, 838-849.
- Leech, Geoffrey (2004³) *Meaning and the English Verb*, New York: Routledge.
- Lyons, John (1977) *Semantics* II, Cambridge: Cambridge University Press.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Palmer, Frank Robert (1990²) *Modality and the English Modals*, London: Longman.
- Swan, Michael (2016⁴) *Practical English Usage*. Oxford: Oxford University Press.
- 田中秀毅 (2009) 「関係詞節と主節の論理関係について」, 『英語英米文学研究』 第 17 号, 23-45.

Wekker, Herman Chr (1976) *The Expression of Future Time in Contemporary British English*, Amsterdam: North-Holland.
安井稔・安井泉 (2022) 『英文法総覧-大改訂新版-』 東京：開拓社.
Ziv, Yeal (1976) “On the Communicative Effect of Relative Clause Extraposition in English”, Ph. D. dissertation, University of Illinois at Urbana-Champaign.

コーパス・辞書

British National Corpus (BNC). < <https://www.english-corpora.org/bnc/> >
The Corpus of Contemporary American English (COCA) <<https://www.english-corpora.org/coca/>>
Longman Dictionary of Contemporary English, 6th edition (2014) Pearson Education: Harlow.

Used to の「推意キャンセル」と進行形可否に見られる整合性

島本 慎一朗（日本大学）

ss81@hawaii.edu

1. 発表の目的

used to は、過去の状況（「習慣」や「状態」）を現在の状況と対比して、「現在はそうではない」ことを文中または言外に含む表現である。

(1) a. I **used to** walk to my office, but now I take the bus.

b. She **used to** like Fred, but now he means nothing to her.

(a-b: 江川 1991³: 309)

しかしながら、当該の状況が現在も継続していることや、継続しているかどうかは不明であることを表す留保文が後続しても、used to の使用が容認される。

(2) a. Susan **used to** swim every day, and she still does.

(Binnick 2006: 35)

b. Bill **used to** be a member of a subversive organization, {and he still is / but I don't know whether or not he is now}.

(Comrie 1976: 29)

これまで、used to の使用可否と used to が現在も続く状況を表す（以下、「推意キャンセル（文）」）可能性は同義的に扱われてきた。そのため、推意キャンセル文における「現在との対比」の有無や、推意キャンセルの可否基準は検討されず、used to の使用環境は判然としないままである。

本発表では、意味の観点から、used to の推意キャンセルの仕組みを明らかにすることで、①used to が推意キャンセルされる場合の「現在との対比」の有無、②used to の推意キャンセルの可否基準を提示する。

2. 先行研究と問題提起

used to に関する先行研究には、used to の表す「現在はそうではない」という含みをキャンセル不可能な「含意」と捉える立場と、キャンセル可能な「推意」と捉える立場に大別される。

2.1 「含意」説

used to が「現在との対比」を表し、「現在はそうではない」(but now...) という含みを「含意」とするというものである (Cf. 江川 (1991³: 309f.)、Leech (2004³: 53f.)、Swan

(2016⁴: § 87)、安井・安井 (2022: 258f.) など)。

(3) a. (When I was a child,) I **used to** get up early.

b. When I was a child, I **would** get up early. (a-b: 江川 1991³: 311)

▶used to は「現在はそうではない」ことを表す一方で、would は単に回想を表すため、現在の状況については不明。

(4) Bill **used to** smoke a pipe. In fact, he still does. (Declerck 1991: 417)

▶柏野 (1991: 31) によれば、インフォーマント 10 名中 7 名がキャンセルを認めなかったという。

実際、(5) に見るように、used to は「現在もそうである」ことが明示されない限り、「現在との対比」の含みによって、「現在はそうではない」ことが表される (Cf. Comrie (1976: 28f.)、Declerck (1991: 417)、吉良 (2018: 111))。

(5) I **used to** own a similar outfit. Wait, what do you mean, **used to**? I donated it to the thrift store at the Women's Mission Center. (COCA TV 2016)

2.2 「推意」説

それでは、(2) のように used to が用いられた文においても推意キャンセルが容認される言語事実についてはどのように説明すべきであろうか。2 つ目の言説は、used to の「現在はそうではない」という含みを「推意」と捉え、used to の有標な例に対する説明を試みたものである (Cf. Comrie (1976: 29)、Declerck (1991: 417)、Binnick (2006: 35)、吉良 (2018: 111ff.) など)。used to が推意キャンセルを受ける場合には、当該状況が現在でも継続していることが強調される (Cf. 吉良 2018: 118)。したがって、(2b) のように第三者が関与する発話では、「Bill が今でも破壊組織のメンバーである」ことに対する驚きや意外性が表される。

しかしながら、事情は複雑である。(6) に見るように、used to の使用そのものは容認されるにもかかわらず、推意キャンセルが困難である例が存在するからである。

(6) He **used to** be a teenager, {so he understands what you're going through / ?and he still is}.

先行研究では、used to が推意キャンセルを受ける可能性についてしばしば言及されるものの、インフォーマントによって容認度に揺れがあること (Cf. (4)) や、(2) と (6) のあいだに見られるような推意キャンセルの容認度の差については十分な考察がなされてこなかった。また、used to が推意キャンセルを受ける場合に、「現在との対比」の効果をどのように考えれば良いのかについても明確な説明がないままである。

3. 考察と主張

前節で見た先行研究を踏まえて、次の（７）に見る疑問点について考察していく。

（７） a. 推意キャンセル文に「現在との対比」はあるか。

b. *used to* の使用可否と推意キャンセルの可否は同義であるか。また、推意キャンセルの可否を決める要素はなにか。

3.1 推意キャンセル文における「現在との対比」

はじめに、*used to* の使用可否の基準を確認する。（８）に見るように、不変の生得的特性（＝（８a））や繰り返すことのできない状況（＝（８b））、そして、故人が話題となる状況（＝（８c））では、*used to* の使用が容認されない。

（８） a. *It *used to* be a mammal, {but now it isn't / and it still is}.

b. ?*I *used to* live in York for ten years. (Tagliamonte and Lawrence 2000: 340)

c. {Bill Clinton/*Abe Lincoln} *used to* be president. (Binnick 2005: 350)

（９） a. I *used to* know Mary. (Mittwoch 2008:182)

b. In 1914, I *used to* live in York. (Binnick 2006: 37)

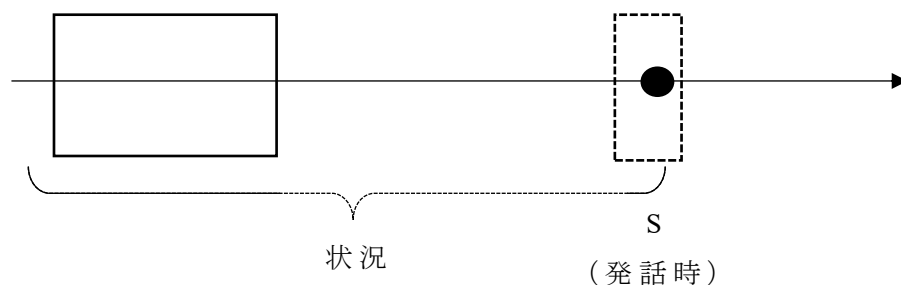
c. He *used to* go home for several weeks during the summer. (Leech 2004³: 54)

d. When I was young, my grandfather *used to* tell me frightful stories of the war.
(Leech 2004³: 53)

上の例からは、「現在との対比」の有無（すなわち「対比」ができるかどうか）が *used to* の使用可否基準となっていることがわかる。Tagliamonte and Lawrence (2000: 336f.) が指摘する「*used to* は否定辞や 1 人称以外の主語とは用いられにくい」という傾向は、「現在との対比」の読み込みやすさが *used to* 使用の可否に関わることの証左である。

さらに、Binnick (2005: 351) は *used to* の意味特徴について、「現在完了が過去の出来事や状態を現在とつなげる役割を果たす一方で、*used to* は過去の習慣や状態を現在と切り離す役割を果たす対の関係にある」(“The *used to* construction functions as a kind of present perfect, but instead of linking a past event with the present state of affairs by dint of placing it in the present era (i.e., in an “extended ‘now’”), the *used to* construction does just the reverse, divorcing the past situation from the present era, which results precisely from an alteration of the previous state of affairs.”) と述べている。*used to* は過去と現在の状況の差異を述べる表現であるため、過去と現在のあいだに「可変性」が読み取れない状況は *used to* とは馴染まないものである。以下に、*used to* の表す意味を図示してみる。

(10) *used to* の表す意味イメージ



しかしながら、江川（1991³: 312）によれば、*used to* が「現在との対比」を意識せずに単純過去形に近い意味を表すことがあるという。

- (11) a. In those days {we ***used to*** live / we lived} in the country.
 b. {We ***used to*** get up / We got up} at 5 a.m. every morning all through the summer.
 (a-b: 江川 1991³: 312)

used to は、現在完了のように、過去の状況に言及しながら現在の状況（*but now...*）を述べるのが無標であるが（Cf. Binnick 2006: 41）、(11) は過去時を指す副詞語句によって、過去の状況に力点が置かれている。ただし、現在の状況は意識されていない（背景化された）だけで、対比の構造そのものが変化したわけではない。

また、*used to* は、発話時の状況と過去の状況を対比するのが無標であるが、時間副詞によって現在時以外に基準時が設定されると、基準時の状況とそれよりも過去の状況を対比するのに使用される。

- (12) As a young man, John ***used to*** be a good chess player. When he first met Anne, he still often played chess.
 (Bittner 2008: 378)

すると、一見、「現在との対比」が感じられないように見える推意キャンセル文はどうであろうか。次の(13)に見るように、推意キャンセル文においては、「状況」以外の（下線部の示す）部分に「現在との対比」が読み込まれている。

- (13) a. I wondered if she'd often stolen. "I ***used to***," she said. "I mean I had to. If I wanted anything. But I still do it every now and then, sort of to keep my hand in."
 [頻度] (T. Capote, *Breakfast at Tiffany's*)
 b. I ***used to*** lose a clump of hair in the shower each day, and now only lose a few strands....
 [質量・程度] (COCA BLOG 2012)
 c. They bring back memories of muffins and cookies, foods which I ***used to*** love and still crave.
 [環境] (COCA FIC 2018)

d. We **used to** have all the money and land, and we still do, but it's not as fun now.

[心情] (B. Burnham, *Straight White Male*)

▶Leech (2004³: §85) は、「used to は単純現在時制の動詞で表される習慣や状態を現在と対比する」(“it (*used to*) typically implies a contrast with a present state or habit, which can be expressed by a verb in the Simple Present.”) と指摘をしているが、目的語や副詞を含む動詞句、または主語を取り巻く環境や心情もまた対比対象となり得る。

▶Binnick (2006: 42) では推意キャンセル文について、「述べられている状況自体ではなく、ほかのものが対比されている」(“the era is not defined by the stated situation itself but by something else.”) と述べられているものの、具体的に何が対比されるのかについては明言されていない。

3.2 推意キャンセルの可否

それでは、used to の推意キャンセルはどのような基準でその可否が決まるのだろうか。(14) はいずれも used to の使用には問題はないものの、推意キャンセル文を後続するのが困難な例である。

(14) a. When he started using a stick in his mid-eighties, he shrugged, saying “I **used to** have two legs. {I now benefit from three. [/?and he still does]}”.

(Adapted from NOW)

b. {I **used to** torture cats / ?I **used to** treat cats well}. Now I'm a vegetarian.

(Binnick 2006: 43)

c. There **used to** be a school on the island [/?and there still is].

(Adapted from Westney 1995: 22)

used to の使用可否は、(8) で見たように、状況の「可変性」の有無(「現在との対比」の有無)によって決まるが、推意キャンセルの可否は、状況の「可変性」の高低に応じて、漸次的にその容認度が変わる。したがって、推意キャンセルの可否は明確な線引きをできないものの、「状況の種類」(Situation Types) (Cf. Quirk 1985: 201) に応じて、推意キャンセルされにくい状況が存在する。

「可変性」は、①状況の切替が繰り返し可能であるかと②状況が均質的/異質的であるかの組み合わせによって、状況に変化の余地を読み取れるかどうかで決まる。特に、当該状況が均質的である場合に推意キャンセルが困難となる。状況が均質的な場合には、対比の対象が強制的に状況の継続の有無に限定されるためである。(15) に見るように、「可変性」の高い状況(= (15a) や (15b)) は対比対象が文中に示されるか文脈状明らかである限りにおいては容易に推意キャンセルが可能である一方で、「可変性」の低い状況(= (15c)) では、比喩表現(精神的にそうであること)で

用いるか、特別な文脈が追加されない限り、推意キャンセルは不自然に響く。

(15) a. He ***used to*** act like a teenager, and he still does.

b. He ***used to*** be a troubled teenager, and he still is.

c. ?He ***used to*** be a teenager, and he still is. (= (6))

(a-c: ネイティブスピーカー提供)

「可変性」の高低は、換言すれば、当該状況に「一時性」を読み込めるかどうかにより読み替えられる。したがって、(15)に見るように、***used to*** の推意キャンセルの可否は、当該の状況が進行形を用いて「一時的な状況」を表せるかどうかと軌を一にする。

(16) a. He's ***acting*** like a teenager.

b. He's ***being*** a troubled teenager.

c. ?He ***is being*** a teenager.

(a-c: ネイティブスピーカー提供)

(16a) や (16b) では一時的にそう振る舞っていることが表される。一方 (16c) では、「ティーンエイジャーでいること」には、「一時性」を読み込むことが困難であるために、(15) で見た推意キャンセルの例と同様に、比喩的表現や特別な文脈の手助けによって状況の「可変性」が高められない限り、進行形を用いることはできない。

以上のことから、***used to*** の推意キャンセル可否は、進行形使用可否と同様に、状況の「可変性」の高低に左右される点に整合性が見られると言える。ここまでの考察を踏まえると、(17) のような 4 つのパターンに状況を整理できる。

(17)

	内部可変性 (-)	内部可変性 (+)
遷移可変性 (-)	A (=8a) (-) <i>used to</i> 使用 (-) 推意キャンセル/進行形	B (=2b,13c) (+) <i>used to</i> 使用 (+) 推意キャンセル/進行形*
遷移可変性 (+)	C (=15c) (+) <i>used to</i> 使用 (-) 推意キャンセル/進行形	D (=2a) (+) <i>used to</i> 使用 (+) 推意キャンセル/進行形

▶***used to*** はふつう動詞句によって表される状況の存否（遷移可変性）を対比するが、状況のありさま（内部可変性）を対比するのにも用いられる。

▶(4) の容認度の揺れは、***smoke a pipe*** が潜在的には可変性を持つものの、対比対象が読み取りにくいことが原因。

▶吉良（2018: 118）が指摘する「継続性の強調」は、「可変性の高い状況が

(予想に反して)変わっていない」ことから出てくる語用論的な効果である。
自制可能かつ「可変性」が高い状況では、その効果が大きくなる。

4. まとめ

- (18) a. *used to* が推意キャンセルを受ける場合、「現在との対比」の効果は動詞によって表される「状況」の継続有無ではなく、「頻度」「質量・程度」「環境」「心情」が過去から現在にかけて変化したことが表される。
- b. *used to* の使用可否は「状況」の可変性の有無によって決まるが、推意キャンセルは「状況」の可変性の高低によって漸次的に可否が定まる。特に二者択一の存否（タイプ A やタイプ C）のような変化する余地のない均質的な状況（内部可変性[-]）は推意キャンセルができない。推意キャンセルの可否は、状況が「一時性」を表し進行形と用いられるかどうかと整合性がある。

参考文献

- Binnick, R (2005) “The Markers of Habitual Aspect in English,” *Journal of Linguistics* 33, 339-369.
- Binnick, R (2006) “*Used to* and Habitual Aspect in English,” *Style* 40, 33-45.
- Bittner, M (2008) ‘Aspectual universals of temporal anaphora,’ In *Theoretical and Crosslinguistic Approaches to the semantics of Aspect*, S. Rothstein (eds.) ,349-385. John Benjamins, Amsterdam.
- Comrie, B (1976) *Aspect*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Declerck, R (1991) *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*, Kaitakusha, Tokyo.
- 江川泰一郎 (1991³) 『英文法解説 (改訂三版)』金子書房, 東京.
- 吉良文孝 (2018) 『ことばを彩る 1 テンス・アスペクト』研究社, 東京.
- Leech, G (2004³) *Meaning and the English Verb*, Third Edition. Longman, London.
- Levinson, S (2000) *Presumptive Meanings: The Theory of Generalized Conversational Implicature*. MIT Press, Cambridge, MA.
- Mittwoch, A (2008) ‘Tenses for the living and the dead: Lifetime inferences reconsidered’ In *Theoretical and Crosslinguistic Approaches to the semantics of Aspect*, S. Rothstein (eds.) ,167-190. John Benjamins, Amsterdam.
- Swan, M (2016⁴) *Practical English Usage*, Fourth Edition, Oxford University Press, Oxford.
- Tagliamonte, S and H. Lawrence (2000) “‘I Used to Dance, but I don’t Dance Now’: The Habitual Past in English,” *Journal of English Linguistics* 28, 324-353.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman, London.
- 安井稔・安井泉 (2022) 『英文法総覧 (大改訂新版)』開拓社, 東京.
- Westney, P (1995) *Modals and Periphrastics in English*. Max Niemeyer Verlag, Tübingen.

動能構文における動作主の意図性

加藤翔太（筑波大学大学院）
s2520043@u.tsukuba.ac.jp

1. はじめに

本研究発表では、動能構文（conative construction）における動作主の意図性について考察する。動能構文とは、本来他動詞として用いられる動詞が、直後に *at* や *on* といった前置詞を伴って用いられる構文を指す。

(1) a. She cut the bread {in/*for} an hour.

b. She cut at the bread {for/*in} an hour.

(Cf. Tenny, 1994: 45)

一般に、動能構文は当該行為の完了を必ずしも意味しない点が特徴的である。例えば (1a) は、動作主がパンを切るという行為を完了したことを示す。一方 (1b) では、動作主がパンを切ろうとしたことだけを示し、完全にパンを切ることができたかどうかは明らかでない。また、(1a, b)において *in/for* 句が共起した際の文法性の違いより、Vendler (1967) の動詞の4分類に基づく、(1a) のような他動詞構文は到達 (accomplishment)、(1b) のような動能構文は活動 (activity) のアスペクトに属すると分析される。それゆえに、継続を表す副詞 *away* と共起する例も頻繁に観察される (中右, 2003)。

(2) a. Nina was cutting away at the bread.

b. He was pounding away at the punching bag.

c. The baby sucked away contentedly at his mother's breast.

(中右, 2003: 152)

2. 先行研究

動能構文に関するこれまでの主要な研究は、例えば Levin (1993) や Pinker (1989) などによって、他動詞用法と比較した時の意味やアスペクトの違いに加え、当該構文で用いられる動詞にはどのような特徴や制限があるのか、といった観点から行われていた。具体的には、Guerssel et al. (1985) や Pinker (1989) などでは、[+motion] と [+contact] という意味素性を備えた他動詞のみが、動能構文に適合すると論じられてきた。しかし、Levin (1993: 41) では、切断を意味する動詞を例に挙げ、それらの素性を有しているにも関わらず、動能構文で用いることができないものも存在することを明らかにしている。この問題点に対する提案として、影山・高橋 (2011) は、その動詞が結果状態を含意するか否かに

よる説明を試みているが、依然として統一された説明はなされていないように思われる。

また、動能構文が表す意味について、Pinker (1989) は「主語が斜格目的語 (oblique object) に対して影響を与えようとしているが、それに成功しているかどうかは明らかでない」と述べている。これは (3b) で示すように、失敗や成功を意味する要素が後続する文がともに文法的であることから、妥当であると考えられる。

(3) a. *John shot the elephant, but he missed it.

b. John shot the elephant, and he hit it/but he missed it.

(影山・高橋 2011: 130)

Goldberg (1995) はこの点をさらに掘り下げ、「動能構文における動詞は、意図される結果 (intended result) を表し、この構文の意味はおよそ ‘X DIRECTS ACTION AT Y’ (X が Y に行為を向ける) と表示される」と述べている。この枠組みにおいて、動能構文は以下のように図示される。

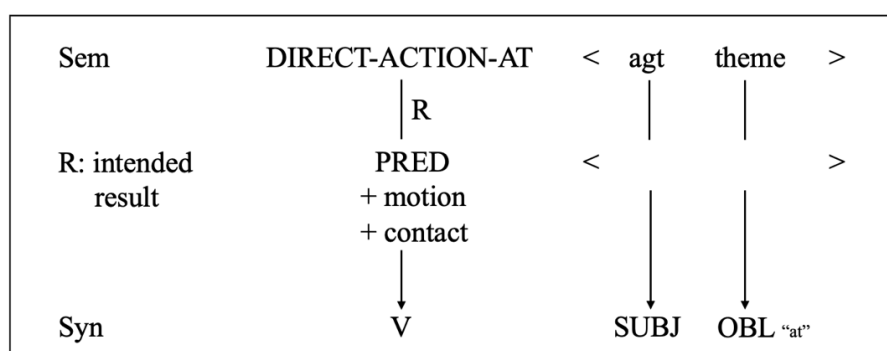


図 1: 動能構文 (Goldberg (1995: 64))

以上のことから、動能構文は「ある動作や対象への試みを表し、その結果として対象に何らかの状態変化がもたらされたかどうかや、動作が完結しているかどうかは含意しない」ということがわかる。これは (4b) で示すように、結果述語と共起することができないことから裏付けられる。

(4) a. John kicked the ball into a goal.

b. *John kicked at the ball into a goal.

(中右, 2003: 153)

これまで述べたことから、動能構文が、動作主がある行為を完遂しようとする試みを表すという点は、妥当であると解釈できる。しかしながら、その際に動作主の意図性が動能構文自体にどの程度関与するかについては、これまで直接的に論じられてこなかった。そこで本研究では、このギャップを埋めるために、動能構文の副詞との共起可能性に着目する。そして、以下のリサーチクエスチョンを

設定し、コーパス調査とインフォーマント調査を通じて検証することを目的とする。

RQ1: 動能構文は、非意図性を表す副詞と共起することが可能か。

RQ2: 動能構文における意図性は、消極的な意図を伴う行為も含めて許容されるのか。

3. コーパス調査

以上を踏まえ、本研究ではまず動能構文において、動作主の意図性が言語形式にどのように反映されているのかを探るため、コーパス調査を行った。本調査では COCAとiWebコーパスを使用した。調査対象は Levin (1993) などの先行研究に基づき、典型的に動能構文で用いられるとされる kick, cut, shoot の3つの動詞に限定した。分析は、本研究の目的に合わせ、行為の様子や動作主の心的態度を表す様態副詞に焦点を当てた。また、受身文（例: “Selena was fatally shot at Corpus Christi hotel Friday.”）や、動作の対象ではないと考えられる副詞句（例: “Many hunters routinely shoot at least a box of shells to bag a limit.”）など、動能構文に分類されないような例は、分析から除外した。これらの点を踏まえ、以下に分析結果を表示する。

様態副詞	kick at	cut at	shoot at	合計
simply	-	9	24	33
randomly	-	-	11	11
repeatedly	3	-	8	11
automatically	-	-	7	7
constantly	-	-	6	6
accidentally	-	-	6	6
privily	-	-	5	5
actively	-	-	4	4
mistakenly	-	-	4	4
savagely	3	-	-	3
violently	3	-	-	3
suddenly	-	-	3	3
effectively	-	-	3	3
involuntarily	2	-	-	2
angrily	2	-	-	2
playfully	2	-	-	2
wildly	2	-	-	2
fatally	-	-	2	2
easily	-	-	2	2
routinely	-	-	2	2

表1: コーパス調査の結果

表1を分析すると、**simply** が合計33回と最も頻度が高く、動詞ごとに共起しやすい副詞の傾向が見られた。特に本研究のRQ1に関連して注目すべきは、**accidentally** が合計6例確認された点である。この発見は、動能構文が純粋な意図的行為のみを表すわけではない可能性を強く示唆している。文脈を確認すると、例えば子供や酔った人物が銃を撃ってしまう例のように、発砲という行為自体が意図せず生じたものや、兵士が対象を誤認して発砲する例のように、発砲行為は意図的だが、その対象の選択が間違っていたものがあつた。この発見から、特定の文脈下では動能構文も非意図的な行為を表せる可能性が示唆された。

しかし、これらの副詞を伴う用例は限定的であり、コーパス上での出現頻度の少なさゆえに、十分な検証が困難であると考えた。そこで本研究では、この結果をより統制的な条件下で再検証するため、インフォーマント調査を実施した。

4. インフォーマント調査

コーパス調査で示唆された意味的制約をさらに検証するため、9名の英語母語話者を対象に、容認性判断調査を実施した。コーパス調査と同様に **kick, cut, shoot** の3動詞と、意味特性を考慮して **accidentally** や **hesitantly**、**unwillingly** を共起させた他動詞構文と動能構文のペアからなる18個の文を作成し、分析対象とした。また、補足データとして、**angrily** や **carefully**、**deliberately** といった副詞を共起させた14個の文も提示した。加えて10個の文法的な文をフィラーとし、合計42個の文をランダムに提示した。これらの文を5段階で評価してもらい、任意でコメントも収集した。なお、様態副詞は文末に置くことも可能だが、その際に生じうる解釈の曖昧さを排除するため、本調査では、フィラーを除いた全ての標的文で、副詞を動詞の直前に配置した。以下に調査の結果を表示する。

	様態副詞	構文の種類	kick	cut	shoot
分析対象	accidentally	他動詞構文	3.56	3.78	4.89
		動能構文	2.11	2.00	3.44
	unwillingly	他動詞構文	4.78	4.67	4.44
		動能構文	3.78	2.89	4.11
	hesitantly	他動詞構文	4.67	4.89	4.67
		動能構文	3.56	3.11	4.11
補足データ	angrily	他動詞構文	3.78	3.67	-
		動能構文	3.33	2.22	-
	carefully	他動詞構文	3.89	4.89	-
		動能構文	3.56	3.11	-
	deliberately	他動詞構文	-	4.22	3.67
		動能構文	-	2.44	3.78
	intentionally	他動詞構文	4.00	-	-
		動能構文	2.33	-	-

表 2: インフォーマント調査の結果

表 2 はインフォーマント調査の結果を示しており、数字はインフォーマントによる 5 段階評価の平均値を表している。高い数値ほど容認度が高く、低い数値ほど容認度は下がる。ここで得られた結果から、いくつかの傾向が確認された。

第一に、全体的な傾向として、ほとんどの組み合わせで動能構文の容認度は他動詞構文の容認度を下回っており、動能構文がより強い意味的な制約を持つ構文であることが確認された。

第二に、動詞ごとの違いも顕著であった。特に *cut* においては、他動詞構文と動能構文の差の平均が 1.67 と、どの副詞と共に起した場合でも動能構文になると容認度が著しく低下した。これは、*cut* が他の 2 つの動詞に比べて、結果状態により強く焦点が当たり、そのため試み自体に焦点を当てる動能構文とは意味的に相性が悪いことが明らかになった。対照的に、*shoot* は動能構文になっても容認度の差が比較的小さく、特に *deliberately* との組み合わせでは、他動詞構文よりも動能構文のスコアが上回るという、興味深い結果が得られた。これは *cut* の場合とは異なり、「対象を撃ち仕留める」という結果を含意する他動詞構文よりも、試み自体に焦点の当たる動能構文の方が、*deliberately* のような意図を表す副詞と意味的に整合性が高いことを示している。

これらの結果は、本研究で立てたリサーチクエスションに対し、以下のような示唆を与える。

まず RQ1 について、*accidentally* を伴う動能構文の容認度は、*kick* と *cut* において、著しく低いスコアを示した。*Shoot* の場合はやや高いものの、他動詞構文と比べるとスコアは低下していた。この結果は、母語話者の内省レベルでは、動能構文と純粋な偶発性が意味的に対立することを反映している。

次に RQ2 については、*unwillingly* や *hesitantly* を伴う動能構文が、3 動詞の多くで 3 点台半ば以上の、比較的高い容認度を示した。これは、動作主がその行為に乗り気でないような場合でも、行為をコントロールし、対象に向けているという点において「意図性」が維持されており、動能構文がそのような状況を問題なく許容することを示している。

5. 結論

本研究は、コーパス調査とインフォーマント調査を通じて、動能構文における動作主の意図性の関与を明らかにすることを目的とした。分析の結果、動能構文は構文レベルで意図性を含意しており、それは必ずしも積極的な意図ではないが、*accidentally* のような純粋な偶発性を表す副詞とは意味的に対立し、その共起は著しく制限されることが示された。一方で、*unwillingly* のような消極的な意図を示す表現は問題なく許容されることが、母語話者による容認度判断の結果から確認された。これらの知見は、動能構文が意図性を構文的に含意するという Goldberg (1995) の主張を支持するものである。さらに、意図性の制約の現れ方は、*cut* や *shoot* のように動詞がもつ意味特性によって異なることも明らかになった。

参考文献

Goldberg, A.E. (1995). *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University of Chicago Press.

- Guerssel, M., Hale, K., Laughren, M., Levin, B., & White Eagle, J. (1985). A cross-linguistic study of transitivity alternations. *Proceedings of the Nineteenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, pp.48–63. Berkeley, CA: Berkeley Linguistics Society.
- Levin, B. (1993). *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*. Chicago / London: The University of Chicago Press.
- Pinker, S. (1989). *Learnability and Cognition: The Acquisition of Argument Structure*. Cambridge, MA: MIT Press/Bradford Books.
- Tenny, C. (1994). *Aspectual Roles and the Syntax-Semantics Interface*. Kluwer Academic Publications: Netherlands. pp. 45–47.
- Vendler, Z. (1967). *Linguistics in Philosophy*. Ithaca, NY: Cornell University Press.
- 影山太郎・高橋勝忠 (2011). 「直接目的語と前置詞付き目的語」. 影山太郎 (編) 『日英対照名詞の意味と構文』. pp.119–147. 大修館書店.
- 中右実 (2003). 「英語の『動能』構文」. 『市河賞 36 年の軌跡』. 開拓社. pp.150–165.

CORPORA

- Davies, M. (2018-). The 14 Billion Word iWeb Corpus. Available online at <https://www.english-corpora.org/iWeb/>.
- Davies, M. (2008-). *The Corpus of Contemporary American English (COCA)*, Available online at <https://www.english-corpora.org/coca/>.

木村快 (慶應義塾大学大学院)
kimurakaimail@gmail.com

1 はじめに

(1) in short と in long の “常識”

- ① 英語の in short はディスコース上でそれまで述べられてきた<先行内容の要約>の機能を果たす談話標識である；
- ② 一方，short の対義語である long を使った in long という表現¹は，OED から学習者用辞典，談話標識辞典を見渡しても “ない”。

(2) 頻度が高いわけではないものの，in short と相関して用いられている談話標識的な in long が様々なところで観察される。

(3) in long の事例：

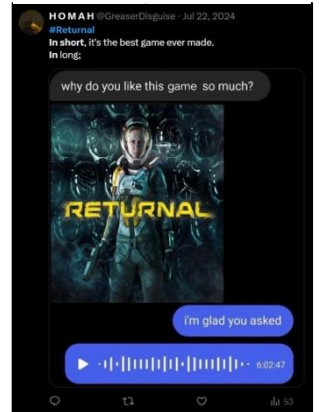
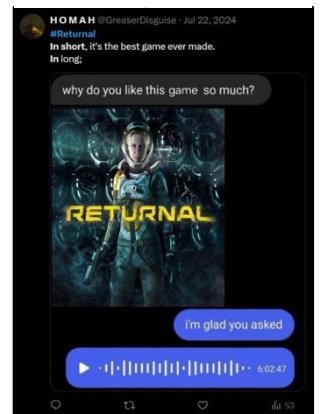
- a. Part of the reason I couldn't wait for my Netflix DVD to come in the mail is because of my love of the heroine, Katniss. **In short**², as all of you know who have read the books, SHE IS AMAZING. **In long**, well, I believe there are parts of Katniss that's in all of us. She encompasses pieces of all of our souls that can be caring, heart wrenching, beautiful, sad, frustrating, and in the end, loving. [GloWbE]
- b. So what do I mean by Old English? **In short**, I mean the language of the people that we call Anglo-Saxons and the language that Beowulf was written in, and **in the long**, I mean the six or seven hundred years span of English that stretched from the 400s A.D. to, very roughly, the Battle of Hastings and the aftermath of the Battle of Hastings. [YouTube]³
- c. #Returnal
In short, it's the best game ever made.
In long;
⁴ [X⁵]

図 1



(4) 本発表では(3)のような談話標識的に使用される in long の語法について調査・分析・考察を行う。

2 談話標識 in short の機能

(5) in short は<先行内容の要約>の談話標識で，「先行部分で既に詳しいことが述べられており，その要約や結論，最も重要なことを少ない語数で簡潔に述べる」（松尾・廣瀬・西川 2015：154）。

* 本研究は KEIO-SPRING (JST 博士後期課程学生支援プロジェクト) の研究助成を受けています。また，日々の研究活動に際し，井上逸兵教授と井上研究会の参加者のみなさまに感謝申し上げます。

¹ 本研究が対象とするのは基本的には in long だが，(2)のように in the long と the がつく場合もある。匿名の査読者からもこの the についての指摘をいただいた。現時点での調査では in the long と the がつくものはより少ない。なぜ the がつくのかに関しては，in the long run のような in the long X というよくある言い回しの影響ではないかと推察している。

² 本発表で引用する事例における太字は全て引用者による。

³ <https://youtu.be/WNQo54Ddte8?si=HdcAgVCOvVDDv4eG> (02:34 から)。

⁴  は添付画像のこと。

⁵ <https://x.com/GreaserDisguise/status/1815136790224765385>

- (6) <要約>(通例文頭・文中で)「要約すると、要するに、つまりは」：さまざまな情報を詳しく述べた後、その内容を一言でまとめたり、要約したりするために用いる；単に「手っ取り早く言えば」の意ではない。

The train was late, the car was broken and it began to rain. **In short** we had a difficult trip.

列車は遅れ、車は故障し、雨まで降り始めた。要するに、苦勞の多い旅だった。

[ジーニアス⁶]

- (7) “You use **in short** when you have been giving a lot of details and you want to give a conclusion or summary.”
Try tennis, badminton or windsurfing. In short, anything challenging. [COBUILD⁹]

- (8) <先行内容の要約>の in short の事例：

As said, personally I’m only using it for collectibles (i.e. stuff that I won’t sell or use), plus Soul Gems I don’t want to fill by mistake etc. I agree that it would be silly to use Realistic Fatigue (which I use) and then put everything in the Bag of Holding. I think my point is that you basically have to set your own rules for what you consider cheating and then stick to them. For me, that goes for quite a few things available in the vanilla game as well. **In short**, it depends on *how* you use it IMO. [iWeb⁷]

- (9) (6), (7)のように、辞書・辞典では<先行内容の要約>として記述されていることが多いが、一部の辞書では明示的に<先行内容の要約>とはせず、<簡略提示>的に表示しているものもある。ただし、その場合でも<先行内容の要約>を想定していることが伺える記述がある。

- (10) “briefly, concisely”

From the 18th cent. onwards only used as a parenthetical phrase, introducing or accompanying a summarizing statement: ‘to sum up, in summary’. [OED]

- (11) “in a few words”

His novels belong to a great but vanished age. They are, **in short**, old-fashioned.⁸ [OALD¹⁰]

- (12) しかし、in short が<先行内容の要約>ではなく単なる<簡略提示>⁹の機能を果たしている事例は少なくない。

- (13) <簡略提示>の in short の事例：

Mac or PC?

If you’ve never used a computer made by Apple—called a Mac (short for Macintosh)—here’s your time to explore. **In short**, a Mac is more expensive, but it offers easier usability, a simpler operating system and isn’t as prone to viruses as a PC. There are PC users who would NEVER buy a Mac and Mac users who would never buy a PC. Again, it doesn’t hurt to explore both sides of the computer aisle. [iWeb]¹⁰

⁶ 辞書・辞典の記述は本発表に合わせて表記を改めている。

⁷ とあるゲームの意見交換サイトでの事例。

⁸ この例文は<先行内容の要約>になっている。

⁹ あるいは<結論の先取り>と言っても良いかもしれない。

¹⁰ “Mac or PC?” はブログ内の小見出し。(5)の引用箇所には先行する内容では Mac の話題は出てきておらず、引用箇所から Mac の話題が導入されて展開されているため、in short は<先行内容の要約>ではありえない。そして、内容からもここでの in short は<簡略提示>だと判断できる。

- (14) 事例を観察してみると、＜簡略提示＞の **in short** には好まれるパターンがあることがうかがえる。先取りになるが、**in short**—**in long** のペアにおける **in short** も＜簡略提示＞の機能だと考えられるので、それを踏まえると、(3)と(13)には共通した“流れ”を見てとれる：1文目で談話のトピックを提示し、その後に **in short** で＜結論の先取り＞的にトピックについての主張の＜簡略提示＞を行う。ちなみに、(3c)では「#Returnal」がトピックの提示になっていると考えられる。
- (15) ＜先行内容の要約＞は＜簡略提示＞とは{截然に区別できる／明確に異なる}機能というわけではない。＜先行内容の要約＞は＜簡略提示＞の下位範疇に該当するので、意味が漂白したとも考えられる。
- (16) 関連して、X 上では＜簡略提示＞の標識である **to put it simply** と **in short** を混交させたと思われる **to put it in short** という表現も見られた((17), 図 2)。この事例は **in long** とペアで使用されている事例でもある。**simply** が生起するべき位置に **in short** が代わりに置かれているので、**in short** が **simply** のように＜簡略提示＞として使用されていることが伺える。

(17) **To put it in short:**

Weebs discover that Japan has a huge problems in terms of p*rn and children

in long:

Eichiro Oda is friends with Watasuki who was charged for having CP at home

So weebs now hate oda and says he is a p*do too

[X¹¹]

図 2



3 事例の収集法

(18) 収集の媒体：

in long は非標準的表現なので、その事例を見つけるのは容易ではない。例えば、COCA で “**in long**” と検索すると、3,429 件がヒットするが、その直後に生起する語を見てみると、**in long** の約 3 割が Long Beach や Long Island といった固有名詞である。そのほかには、**in long lines** や **in long hours**, **in long term** X をはじめとして **long** が名詞句を形成している場合が多い。**in long** の直後がカンマ[,] がくる事例は 250 件もあるが、どれもカンマが **long** とその他の形容詞を並列しているもので、**in long** で 1 つのフレーズになっているものは見つからない。この傾向は BNC でも同様であった。

- Her breath comes in **long, rolling waves**. [COCA]
- Showered and dressed in **long, loose-fitting cotton T-shirts**, Elaine and Christina walked out onto the shaded terrace where Celia had laid a breakfast of freshly squeezed mango juice, cereals, sweet, doughy local bread rolls, banana bread, and coconut chopped into big, thick slices. [BNC]

¹¹ <https://x.com/Sn0wF0x1337/status/1941140098231550094>

そこで、より大規模な iWeb, GloWbE, enTenTen21¹²を利用した。さらには、X (旧 Twitter) でも事例を収集している。

(19) 検索の方法：

対象としている in long は、in short と同じく、談話標識的に使用されているものなので、文における位置をある程度絞り込むことができる¹³。一般的に談話標識は (もちろん文中、文末もあるが) 文頭に生起することが多いこと (松尾・廣瀬・西川 2015), さらに in short—in long で相関的に使用されることを踏まえて、文頭に生起する in long に絞ることにする¹⁴。ただし、in short が in long の前に生起するかどうかは指定していない。

(20) 検索式 1：iWeb と GloWbE¹⁵

検索式は [ピリオド+in long+カンマ] で指定した¹⁶。その後、事例を目視で確認し、手作業で in long で 1 つのフレーズとなっているものを抽出した。

(21) 検索式 12：enTenTen21

検索式は [文末タグ+in long+カンマ] で指定した。さらに、カンマの直後に形容詞・副詞が来ないように指定した¹⁷。その後、事例を目視で確認し、手作業で in long で 1 つのフレーズとなっているものを抽出した。

(22) 検索の方法 3：X

X では網羅的な検索は行えないため、例外的に in long 単体ではなく in short と in long が同時に使われている事例を検索した。その際、term, run, supply, story を含まないように指定した。¹⁸

4 結果 (事例の件数)

表 1. In long の検索・収集結果¹⁹

データ元	件数	in short が先行している件数 (丸括弧内の数は確認不可能のもの)	備考
iWeb	9	7 (2)	
GloWbE	2	1 (1)	
enTenTen21	47	41 (6)	
X	15		網羅的ではない。
YouTube	1	1	= (2b)。ただし、in <i>the</i> long の形。

5 in short—in long の語法

5.1 in short—in long の使用上の特徴

(23) ((3))に加えて＜詳細提示＞の in long の事例：

¹² enTenTen21 は Sketch Engine (<https://www.sketchengine.eu/>)というインターフェイスで利用できる。

¹³ 匿名の査読者より、事例の収集に関して次のようなご意見を賜った：in long が規範的に定着していないからこそ、さまざまな生起位置を想定し、特に生起環境を指定せずに検索を行って、目視で確認を行なってみると良い。これについては今後の課題とさせていたきたい。

¹⁴ (2b)のように、節+and in long+節というパターンも考えられるが、iWeb と GloWbE では該当事例がなかったため今回は除外する。

¹⁵ iWeb と GloWbE は English-corpora.org (<https://www.english-corpora.org/>)で利用できる。

¹⁶ 実際の検索式：. in long ,

¹⁷ 実際の検索式：[tag = "SENT"] [lemma = "in"] [word = "long"] [word = ","] [tag != "J.*" & tag != "RB.?"]

¹⁸ 実際の検索式：“in short” “in long” -term -supply -run -story

¹⁹ 最終検索：2025 年 09 月 24 日

- a. Does this latest Souls-like do enough to separate itself from the crowd and warrant a purchase? **In short**, no. **In long**, literally spend your money on anything else you can find. [enTenTen21]
- b. Is the novel worthy of these accolades? **In short**, yes. **In long**, read on for the review. [enTenTen21]

(24) 基本的な特徴・傾向

- ① in long は単独で使用されず、in short が先行して in short—in long のペアで使用される。
- ② in short が＜簡略提示＞となっていて、in long がそれと対応する＜詳細提示＞の標識として使われている。
- ③ in short—in long は談話のトピックを提示する文あるいは疑問文に後続しやすい。(3b)のように自問自答的疑問文 (self-addressed questions) の場合もある。これは(12)で述べた in short の＜簡略提示＞の語用論的特徴と一致する。

(25) X での特徴

- ① 別のポストに対するリプライ／リポストとしての事例が見つかった。このことから、in short—in long のペアで使用されている in short は＜先行内容の要約＞ではありえず、明らかに＜簡略提示＞である。
- ② 特に文字数制限のある X で顕著だが、in long の後続部がテキストではなく、画像(2c)、動画(図 3)、URL(図 4)であったりする。

図 4



図 3



(26) 小まとめ

in long というフレーズは単独では使用されにくく、in short—in long というペアで使用される。in short は＜簡略提示＞の機能を果たし、それに相関する形で in long が＜詳細提示＞の機能を果たす。また、より大きな視点で談話の流れをみると、「トピック→in short で簡略的に回答・主張→in long で詳細に回答・主張」という流れになっている。

5.2 “言葉遊び” 的使用

- (27) in long が＜詳細提示＞ではなく＜前言の強調＞になっている事例もある。すなわち、in long の後続部が in short に後続節と同じ（もしくはそれに含まれる）表現を再利用して、強調しているタイプである。＜前言の強調＞の in long は、in short の機能と対比されているというよりは、short—long の対義関係を利用したミーム的な“言葉遊び” のようである。

(28) ＜前言の強調＞の方略としては、

- ① 前言の文字数を増やすタイプと、
 - ② 前言に強調語を加えるタイプ
- の 2 つが見られる。

(29) <前言の強調>・①タイプの in long の事例：

- a. **In short**, yes.
In long, yeeeeeeeeeeeeeeeeeeee [X²⁰]
- b. **In short**, no
In long, nooo [X²¹]

(30) <前言の強調>・②タイプの in long の事例：

- a. Are we going to start hiring sociopaths to be airline pilots? **In short**, Yes. **In long**, Yes absolutely. [enTenTen21]
- b. Spoilers for spoilers for Avengers: Endgame
In short, it's good.
In long, it's rather good. [enTenTen21]

(31) <詳細提示>と同様に、<前言の強調>の in long の場合も、その創発の動機づけとなっているのは <簡略提示>の in short であると考えられる。

5.3 in short—in long は省略か？

(32) In short—in long は別の表現の省略なのか、と思わせるような事例も散見される。

(33) in short—in long のペアに似ている表現事例：

- a. **In short words**, confusion and possible indoctrination
In long words, the “pride and lgbt+” things are adult things because involves sexuality and orientation, going further the basic sexual education taken in schools, and kids aren't fully developed yet to understand to them [X²²]
- b. Are all of the attractions covered with the Go Chicago Pass worth a visit
In short, yes. **In a longer answer**, it depends what you're looking to get out of your day. If you're more of a cultural enthusiast, you'll be delighted with the many different cultural attractions available, throughout the entire city. If you're more into science, you'll find options such as the famous Field Museum and the Adler Planetarium to be more up your alley. [iWeb²³]

(34) 文法的に正しい表現から in long に省略されたわけではないと思っている。これは推測に過ぎないが、(30a)の In short words—in long words は、in short—in long が脳裏によぎったけれどもそんな表現は存在しないはずだ、という内省が働いて修正が起きたと思っている。つまり、in short—in long からの修正で in short words—in long words である。それを裏付けるものとして、(30b)の In a longer answer は iWeb 上では in long となっていることから、最初は in long と表記していたが、後から見返して in a longer answer に修正されたと考えられる (註 23 を参照)。

5.4 in long の創発の動機と過程

(35) in long はなぜ創発されるのか。鍵になるのは談話標識の in short の<簡略提示>用法である。

- ① <簡略提示>とはまさに「短く言う」行為そのものなので、short 自体が前景化されやすくなる。

²⁰ <https://x.com/MilesTa97174704/status/1942704803995615452>

²¹ <https://x.com/firminosdentist/status/1945262465601663294>

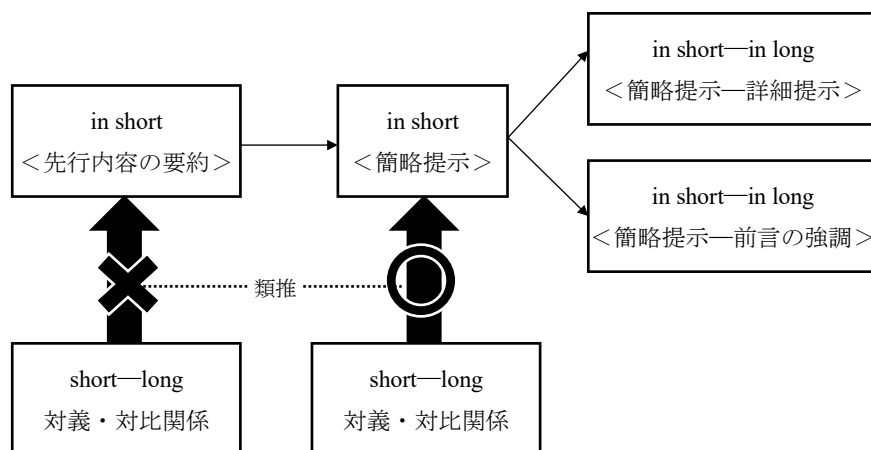
²² <https://x.com/JovenconDdeDan/status/1940116117953159501>

²³ (30b)は iWeb 上の表示では In short, yes. In long, it depends what you're looking to get out of your day.となっているが、引用元を確認すると In long の箇所が in a longer answer になっている (<https://www.priceoftravel.com/is-go-city-chicago-pass-worth-it-review-and-prices>)。

- ② さらに、＜先行内容の要約＞ではその対義を想定しにくい、＜簡略提示＞では＜詳細提示＞という対義が類推しやすい。そして「簡略—詳細」と並行する short—long の対義関係が利用されやすくなる。
- ③ ＜先行内容の要約＞の in short は、＜要約＞であるから談話上の終盤に生起しやすく、その後にペアとなる情報を追加する必要がない。それに対して、＜簡略提示＞の in short は(12)に述べたようにトピックを提示した直後の位置に生起しやすいので、さらにその後に情報の追加を行いやすい。
- ④ in detail という、意味的にも(＜詳細提示＞)統語的にも(in X)類似する表現の存在からの類推。以上のような想定される要因により、＜簡略提示＞の in short が生起すると in long が創発されやすい環境になる。

(36) また、5.2 節で述べたように、in long が＜詳細提示＞ではなく＜前言の強調＞になっている場合もあり、これは SNS をはじめとしたウェブならではの“言葉遊び”的側面が垣間見える。＜詳細提示＞も＜前言の強調＞も short—long の対義・対比関係を利用した類推による産物と考えられるが、＜前言の強調＞は in short 自体の談話標識機能が薄れ、short と long のそれぞれの字義通りの意味が前景化された、In short, X. In long Y. という 1 つの (構文文法的な) ミーム的な構文と考えることができる。

図 5



参考文献

松尾文子・廣瀬浩三・西川眞由美 (2015) 『英語談話標識用法辞典—43 の基本ディスコース・マーカー』 研究社.

辞書

ジーニアス⁶ 『ジーニアス英和辞典 第6版』 大修館書店.

COBUILD⁹ *Collins COBUILD Advanced Learner's Dictionary*, 9th edition. HarperCollins Publishers.

OALD¹⁰ *Oxford Advanced Learner's Dictionary*, 10th edition. Oxford University Press.

OED *Oxford English Dictionary*. Oxford University Press. available online: <https://www.oed.com>

コーパス

BNC *British National Corpus*. available online: <https://www.english-corpora.org/bnc/>

COCA *Corpus of Contemporary American English*. available online: <https://www.english-corpora.org/coca/>

iWeb *iWeb: The 14 Billion Word Corpus*. available online: <https://www.english-corpora.org/iweb/>

GloWbE *Corpus of Global Web-Based English*. available online: <https://www.english-corpora.org/glowbe/>

enTenTen21 *English Web Corpus 2021*. available online via Sketch Engine: <https://www.sketchengine.eu/>

不定詞を補文にとる使役表現とその補文内部における完了形・進行形の出現について

村岡宗一郎（日本大学）

muraoka.soichiro@nihon-u.ac.jp

1. はじめに

(1) 現代英語における不定詞補文を伴う使役表現

- a. I *made* Mary (*to) *fail*. (Tubino-Blanco 2011: 164)
- b. I *caused* Mary *to fail*. (ibid.)

(2) 原形不定詞と to 不定詞補文における完了形と進行形の使用 (2a-d) とその反例 (2e-g) ¹

- a. *They *made* the children *have finished* their homework. (Zagona 1988: 50)
- b. *The movie *made* her *be crying*. (Takahashi 2012: 132)
- c. *I *caused* the computer *to have been* down. (Goodman 1973: 84)
- d. *I *forced* him *to be sleeping*. (Ross 1969: 81)
- e. The writer *had* the protagonist *have been married* three times. (Bjorkman and Cowper 2013: 5)
- f. Mary {*had* / *made*} the princess *be kissing* the frog. (Lapointe 1980: 772) (Takezawa 1984: 678)
- g. Mary *ordered* the princess {*to have kissed* / *to be kissing*} the frog. (Lapointe 1980: 772)

2. 原形不定詞と to 不定詞補文に見られる意味的特徴

2. 1. 原形不定詞補文の意味的特徴

(3) 原形不定詞補文の意味：主節動詞との同時性

- a. *Last night she {*made* / *let*} him *go tomorrow*. (Mittwoch 1990: 118)
- b. *Yesterday the teacher *had* students *play* on the ground *today*. (早瀬 2002: 208)

(4) 原形不定詞補文の同時性と命令文に見られる類似点 (cf. (2a-b))

- a. *John *had* Mary *have washed* the dishes by the time... (Johnson 2014: 44)
- b. *I *had* John *be preparing* for the party. (Gee 1975: 375)
- c. **Have taken*. (Palmer 1987: 34)
- d. **Be standing* now! (鈴木・安井 1994: 251)

(5) 進行形に見られる前段階性

- a. The plane *was landing* when it exploded in midair (so it didn't land). (Rothstein 2004: 39)
- b. When the electricity went off they *were watching* TV. (Hirtle 2007: 20)

⇒進行形は一般的に基準時の前後に時間枠を形成すると分析されるが、佐藤（2014: 101）は（5）において、爆発後に着陸できず停電後にテレビを見ることはできないことから、基準時以前の時間枠の形成は義務的である一方で、基準時以降については文脈によるという。

⇒進行形が表す状況には必ず基準時以前の状況が存在することから、発話時以前に遡って当該の行為をはじめろという自制不可能な命令を聞き手に課することになるため、（4d）は容認されない。そ

¹ Johnson（2014: 44-45）によれば、類似する表現がケンタッキー州東部のアパラチア英語に確認される。

- (i) a. John *had for* Mary *to have washed* the dishes by the time... (Johnson 2014: 44)
- b. John *had for* Mary *to be washing* dishes. (Johnson 2014: 45)

のような命令は完了形の命令文と同様に命令文で表される内容は聞き手にとって自己制御可能な事柄でなければならないという一般原則に抵触する (cf. 佐藤 (2014: 111)) 。

⇒なお、この前段階性は進行形 (be + -ing) に課される意味的制約であり、He *had* us *laughing* all through the meal. (Swan 2016: §109)等に見られる現在分詞補文には課されないと仮定する。

2. 2. to 不定詞補文の意味的特徴

(6) to 不定詞補文の意味：非同時性① (cf. Givón (2001: 45) 、Anderson (2005: 35))

a. On Wednesday John *got* Mary *to do* the work on Friday. (Okuyama 1994: 51)

b. John *forced* Mary *to do* the dishes, but it took hours before she did so. (岡田 2018: 162-163)

(7) to 不定詞補文の意味：非同時性② (cf. 小西 (1980: 116, 1037) 、Goodman (1973: 84))

a. *I *forced* him *to have slept*. (Ross 1969: 81)

b. *The witness said she had *allowed* him *to have gone* into the vault. (Johnson 1991: 56)

c. *I *forced* him *to be sleeping*. (Ross 1969: 81)

d. *I *helped* John (to) *be sleeping*. (Teunissen 2001: 52)

⇒類例として、Swan (2016) は使役動詞 have の現在分詞補文の解説として (8a) を提示する。Swan (1995: §242) では (8b) のように進行形を用いない形が使用されているが、Swan (2005: 209) は (8a) と同様に表記する。(8a) の容認可否性について、Swan 本人にこれまで説明した言語事実を提示して確認したところ、(8c) の返答があった。

(8) to 不定詞補文における進行形の使用 (cf. Swan (2005: 209)) と Swan (私信) による説明

a. The structure with an -ing form can mean ‘*cause* somebody *to be doing* something’ ... (Swan 2016: §109)

b. Another meaning is ‘*cause* somebody / something *to do* something’. (Swan 1995: §242)

c. The use of English progressives is something of a jungle, and I've given it a lot of thought over the years, but I really can't construct a plausible-sounding example of the structure 'cause somebody to be doing something' using any of the verbs that are generally described as 'causative'. It's not difficult to express the same idea in other ways, but causatives seem to be out. (Swan 私信)

3. 使役動詞の不定詞補文における完了形と進行形の使用が容認される条件

3. 1. 主節動詞が否定文で使用される場合

(9) 否定を伴う主節動詞と過去を表す完了不定詞の使用

Deontic modality generally applies to future situations: I can oblige or permit you to do something in the future, but I can't oblige or permit you *to have done* something in the past. (Huddleston and Pullum 2002: 184)

3. 2. 未来を表す副詞句と共起する場合

(10) 未来を表す完了形と進行形の不定詞 (cf. (4c, d))

a. I aim *to have finished* it by tomorrow. (Palmer 1987: 192)

b. Start the book and *have finished* before you go to bed. (Quirk et al. 1985: 827)

c. *Be preparing* the dinner when he comes in. (Quirk et al. 1972: 402)

(11) to 不定詞補文における完了形と進行形の使用

a. I hereby *order* you *to have left* the room by the time I get back! (Akmajian et al. 1979: 38)

b. I *got* John and Mary *to be talking* when Fred entered. (Dixon 2005: 199)

⇒大規模コーパスでは、(11)のように多くは検出されなかった。その要因として、あえて完了形や進行形を用いず、単純な to 不定詞補文で代用されるためであると考えられる²。

(12) コーパスにおける (11) の類例

- a. If the deposits are in the kidney, they will **cause** the kidney **to have decreased** function in getting rid of waste products and eventually the kidneys will fail to meet the body's needs. (COCA. 2012. WEB)
- b. But that is just the flaw which Dr. Dawkins employs. He **permits** himself **to have seen** and **known** the answer before he has started to answer the question. (COCA. 2000. MAG)
- c. But he **ordered** meetings **to be taking** place next week with our minister of foreign affairs and acting secretary McAleenan, which I met four times already. (COCA. 2019. SPOK)
- d. In my mind, if a client is having 20 cheat meals a week, my goal is to **get** them **to be having** 19 per week instead. This is what making progress is all about. (COCA. 2012. BLOG)

(13) 原形不定詞補文における完了形の使用① (cf. Akmajian et al. (1979: 41) 、 Gazdar et al. (1982: 633) 、 Iveland (1993: 7) 、 Johnson (2014: 44))

*John {**made** / **had**} Bill **have finished** his assignment by 5:00. (Ritter and Rosen 1993: 537)
⇒ (3) の同時性に違反するため、非文となる。

(14) 原形不定詞補文における完了形の使用②³

We'll try to make him **have finished** his homework by the time the show starts. (Gazdar et al. 1982: 633)

⇒進行形では (15) のように容認性判断に揺れがあるが、(16) については適格文とみなされている。

(16) は (14) と同様に、未来を表す副詞句に加えて主節動詞もまた未来を表している用例である。

(14) と (16) では主節動詞と原形不定詞補文の内容が未来時において同時に生じることを表すため、時間的逆行が生じることがなく、容認される。

⇒Dixon (私信) によれば (11c) は適格文であるが、(15b) は MARGINAL であるという。

(15) 原形不定詞補文における進行形の使用① (cf. Iveland (1993: 7) 、 Sheehan and Cyrino (2024: 777))

- a. *John **made** Bill **be standing** on the platform when the train came in. (Inoue 1992: 135)
- b. I **made** John and Mary **be talking** when Fred entered. (Dixon 2005: 199)

(16) 原形不定詞補文における進行形の使用② (cf. Zagana (1988: 49))

- a. We'll try to make him **be singing** "Coming through the Rye" when Mary walks in the room. (Akmajian et al. 1979: 40)
- b. John **makes** Bill **be shelving** books whenever the boss walks in. (Ritter and Rosen 1993: 536)

3. 3. 主節主語が「完全な操作性 (Total manipulation)」の特性を持つ場合

(17) 完全な操作性と時間差 (16a-b)、非対格動詞の使用 (16c-d)、虚辞の使用 (16e-f) (cf. 村岡 (2023))

- a. *Last night she {**made** / **let**} him **go tomorrow**. (= (3)) (Mittwoch 1990: 118)
- b. Yesterday the witch **made** John **build** a tower last night and **destroy** it this morning. (Rothstein 2004: 159)
- c. *Ralph **had** {Sheila / his goldfish} **die**. (Ritter and Rosen 1993: 526)
- d. Ralph **had** Sheila **die** in his movie. (早瀬 2002: 198)

² その他完了不定詞と to 不定詞に意味の差がないとされる例については江川 (1991: 328) を参照されたい。

³ しかし、Tubino-Blanco (2011: 137) と Sheehan and Cyrino (2024: 777) は類似する例を非文とする。

- e. John {made / *had} there be computers available for all the students. (Ritter and Rosen 1993: 541)
 f. God had there be birds in every continent. (金子・遠藤 2001: 148)

(18) 完全な操作性と原形不定詞補文における完了形の使用 (18a-c) と実例 (18d-f)

- a. Please, God, make him *have arrived*, by the time I get there. (Kayne 1984: 43)
 b. If I could rewrite Russian history, I would *let* the revolution *have* already *taken* place by the time Lenin was born. (Williams 1984: 141)
 c. The writer had the protagonist *have been married* three times. (Bjorkman and Cowper 2013: 5)
 d. Please God, make her *have died* by the morning. (C. Morgan, *A Book for All and None*)
 e. Oh, God, please *let* me *have passed* the test! (COCA. 2002. FIC)
 f. The very fact that you are writing fiction means you are creating people who did not really exist. I think it is perfectly all right to *let* them *have affected* the course of events, or *been* the cause of some real happening. (COCA. 2008. ACAD)

⇒作家が完全な操作性という意味素性をもつ可能性について、Wada (2019: 317) によれば、作家はフィクションにおいて全知全能であり、自由に場面を設定することができるという。

⇒神に対する祈願であることを明示しない例も (19) のように散見される。この用例が存在し得るのは、「あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない (cf. 『出エジプト記』 20 章 3 節)」という信条をもとに生きている人にとって、God という単語を使用せずとも、(19)の例は神への祈願を表すことができるためであると考えられる (cf. Nomina sacra)。

(19) 祈願の例

- a. Please let him *have arrived*, by the time I get there. (Kayne 1984: 43)
 b. Please make there *have been* a mistake. (ibid.)

(20) 完全な操作性と原形不定詞補文における進行形の使用 (20a-d) と実例 (20e-h)

- a. Dear God, {make / have} it be raining when I get back. (Gee 1975: 350)
 b. The director has the chorus *be singing* when the show starts. (Bjorkman and Cowper 2013: 2)
 c. Let's *let* Othello *be thinking of his next move at this point in the play*. (Gee 1977: 480)
 d. During the play, Mary *had* the frogs *be entertaining* the dwarfs. (Johnson 2014: 23)
 e. Please God, make her *be getting* married for all the right reasons. (M. Johnson, *The Four Seasons Collection*)
 f. Lord Jesus, please *let* him *be breathing*. (COCA. 2010. MOV)
 g. Oh, Lord, *let* me *be dreaming*... (BNC. W_fict_prose)
 h. I thought of my story about this man and the girl who looked at themselves in mirrors, who moved the opposite ways from what they intended. I might *make* the man *be living* like myself alone up four flights of stairs: the girl coming to make love mornings and evenings. (COCA. 2007. ACAD)

(21) Lapointe (1980) の用例 (= (1f)) に関する Johnson (2014) のインフォーマント調査

- a. Mary *had* the princess *be kissing* the frog. (= (1f)) (Lapointe 1980: 772)
 b. ?Mary *had* the frogs *be entertaining* the dwarfs. (Johnson 2014: 22)
 c. During the play, Mary *had* the frogs *be entertaining* the dwarfs. (Johnson 2014: 23)

⇒Johnson (2014: 22-23) は (21a-b) の用例は (21c) のように副詞句を伴う場合、適格文となるという。これは (21c) の副詞句を用いた舞台指示の解釈であれば、容認されることになるが、この解釈はこれまで見てきた完全な操作性を表す環境と同じであり、このような特殊な環境下であれば、原形不定詞補文内部における完了形や進行形は容認されるといえよう。

3. 4. 残された問題と仮定法の伝播

- (22) a. Mary **ordered** the princess {*to have kissed* / *to be kissing*} the frog. (Lapointe 1980: 772)
 b. This is what **caused** him *to have been killed*. (Google) (Tubino-Blanco 2011: 164)
 c. *This is what **made** him *have been killed*. (ibid.)

⇒Tubino-Blanco (私信) は (22b) は一般的ではないが、Google 検索で (23) が見つかり、英語母語話も適格文と判断するという。また cause は使役動詞ではなく、使役軽動詞 (Light causative verb) であるため、force などの動詞ほどその使用範囲は制限されない可能性があるという (cf. (7))。

⇒ (22b) = After a movie star is killed at a celebrity rehab center, the CSI's investigate the secrets that the star was about to reveal and if this is what **caused** him *to have been killed*. (CSI: Miami, Season 5 Episode 20)

- (23) Tubino-Blanco (私信) による Google からの用例 (≒ (18b))

- a. An offender sentenced to life may not apply until he has served 15 years from the date of sentence, unless he has sufficient evidence which would have caused him to have been found not guilty.
 b. but for her father's love—would have caused her to have been drowned as an infant
 c. when her continuing to hold it would have caused her to have been run down.
 d. and knowing this party was happening would have caused her to have finished the cheese and moved onto the coffee and cigars,
 e. but crossing the finish line would have caused him to have finished on the lead lap.
 f. however, it was very rare that a girl's pregnancy would not be discovered and **caused** her *to have been banished* earlier than this stage.

⇒千葉 (2013: 9-10) によれば、仮定法の伝播とは「仮定法の力が仮定法動詞の内部にとどまらず、それらの動詞と統語的・意味的に密接な関係を持つ従属節の中に伝播（あるいは転移）していく結果生ずるもの」とした上で「問題の従属節のさらに内部に存在する従属節（すなわち、さらに深くはめ込まれた従属節）にも及んでいく」ことをいう（下線部の if 節に相当する語句 (cf. 江川 (1991: 262-263)) との共起により、適格文と見なされている可能性あり）。

4. コーパスにおける用例

表 1. BNC と COCA における to 不定詞補文と完了形と進行形の出現

BNC / COCA		否定	副詞	操作性	仮定法	その他	合計
allow NP + (not) to	have -en	0 / 3	0	0	1 / 4	0 / 6	1 / 13
	be -ing	0 / 4	0	0	0	0 / 6	0 / 10
cause NP + (not) to	have -en	0	0	0	0 / 2	0 / 2	0 / 4
	be -ing	0	0	0	0	0	0
force NP + (not) to	have -en	0	0	0	0	0 / 1	0 / 1
	be -ing	0	0	0	0	0	0
get NP + (not) to	have -en	0	0	0	0	0 / 1	0 / 1
	be -ing	0	0 / 1	0	0	0 / 1	0 / 2
permit NP + (not) to	have -en	0	0 / 1	0	0 / 1	0	0 / 2
	be -ing	0	0 / 1	0	0	0	0 / 1
oblige NP + (not) to	have -en	0	0	0	0	0	0
	be -ing	0	0	0	0	0	0
order NP + (not) to	have -en	0	0	0	0	0	0
	be -ing	0	0 / 1	0	0	0	0 / 1

- (24) 否定
- a. He never could have *allowed* his innocent son *to have died*. (COCA. 1997. SPOK)
- b. Of course. I mean, we can't *allow* you *to be leaving* town. (COCA. 2003. MOV)
- (25) 未来を表す副詞と共起 (= (12))
- But that is just the flaw which Dr. Dawkins employs. He *permits* himself *to have seen* and *known* the answer before he has started to answer the question. (COCA. 2000. MAG)
- (26) 仮定法の伝播
- a. Would it have *caused* you *to have changed* your opinion? (COCA. 1995. SPOK)
- b. Assuming that the collision hape pened as we believe, the cloud of debris would have quickly concentrated into a ring over the equator, *allowing* the Moon *to have formed* close to Earth in an equatorial orbit. (COCA. 2012. MAG)
- (27) その他
- a. ... the Earth could be old enough to *allow* evolution *to have taken* place. (COCA. 2014. MOV)
- b. it sort of *forced* some guys *to be spending* more time with their kids, (COCA. 1997. SPOK)

表 2. BNC と COCA における原形不定詞補文と完了形と進行形の出現

BNC / COCA		否定	副詞	操作性	祈願	仮定法	その他	合計
make NP + (not)	have -en	0	0	0 / 1	0	0 / 3	0 / 1	0 / 5
	be -ing	0	0	0	0	0	0 / 2	0 / 2
let NP + (not)	have -en	0 / 3	0	0 / 8	1 / 8	0	1 / 4	2 / 23
	be -ing	0 / 6	0	2 / 5	1 / 5	0	0 / 5	3 / 21
have NP + (not)	have -en	0	0	0	0	0	0 / 1	0 / 1
	be -ing	0	0	0	0	0	0 / 1	0 / 1

- (28) 否定
- a. I can not *let* his death *have been* in vain. (COCA. 2018. SPOK)
- b. YOU CAN'T JUST *LET* YOUR POP *BE PUSHING* YOU AROUND ALL THE TIME. (COCA. 1993. TV)
- (29) 完全な操作性 (= (18e-f)、(20f-h))
- a. Oh, God, please *let* me *have passed* the test! (COCA. 2002. FIC)
- b. Lord Jesus, please *let* him *be breathing*. (COCA. 2010. MOV)
- (30) 祈願
- a. And please *let* them *be hanging* on to their gossip and porter. (BNC. W_fict_prose)
- b. Please, please, please *let* me *have saved* this. (COCA. 1993. MOV)
- (31) 仮定法の伝播
- a. Let me have been nice to him I pray as if the prayer could *make* me *have been* so. (COCA. 1997. FIC)
- b. As if that wiped it out, *made* it not *have happened*. (COCA. 2014. FIC)
- (32) その他
- a. Thank you for *letting* me *have brought* out here " but since I am probably interrogated. (COCA. 1995. MOV)
- b. If you don't know the answer, *let* the question *be blowing* in the wind, (COCA. 2019. FIC)

5. まとめ

参考文献 Akmajian, A., S. Steele and T. Wasow. 1979. "The Category AUX in Universal Grammar." *Linguistic Inquiry* 10.1, 1-64. / Anderson, J. M. 2005. "Let and the Bare Infinitive: An Exploratory Exercise in Traditional (National) Grammar." *Studia Anglica Posnaniae* 41, 29-52. / Bjorkman, B. and E. Cowper. 2013. "Inflectional Shells and the Syntax of Causative HAVE." *Proceedings of the 2013 Annual Conference of the Canadian Linguistic Association*, 1-11. / 千葉修司. 2013. 『英語の仮定法 仮定法現在を中心に』東京: 開拓社. / Dixon, R. M. W. 2005. *A Semantic Approach to English Grammar, Second Edition*. Oxford: OUP. 江川泰一郎. 1991. 『英文法解説 改訂三版』東京: 金子書房. / Gazdar, G., G. Pullum and I. Sag. 1982. "Auxiliaries and Related Phenomena in a Restrictive Theory of Grammar." *Language* 58, 591-638. / Gee, J. P. 1975. *Perception, Intentionality, and Naked Infinitives: A Study in Linguistics and Philosophy*. Doctoral dissertation. MIT. / Gee, J. P. 1977. "Comments on the Paper by Akmajian." In P. Culicover, A. Akmajian and T. Wasow. (Eds.), *Formal Syntax*, 461-481. New York: Academic Press. / Givón, T. 2001. *Syntax, Volume 2*. Amsterdam: John Benjamins. / Goodman, F. 1973. "On the Semantics of Futurate Sentences." *Working Papers in Linguistics* 16, 76-89. / 早瀬尚子. 2002. 『英語構文のカテゴリ形成 認知言語学の視点から』東京: 勁草書房. / Hirtle, W. 2007. *Lessons on the English Verb*. Montreal and Kingston: McGill-Queen's University Press. / Huddleston, R. and G. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: CUP. / Inoue, K. 1992. "CAUSE and MAKE in Semantic Representation." *English Linguistics* 9, pp. 132-151. / Iveland, P. 1993. "VP Small Clauses." *University of California, Santa Cruz Linguistics Research Center Report*, No. 93-03. / Johnson, E. 1991. *The Handbook of Good English*. New York: Atria Books. / Johnson, G. 2014. *Restructuring and Infinitives: The View from Appalachia*. Doctoral Dissertation. Michigan State University. / 金子義明・遠藤善雄. 2001. 『機能範疇』東京: 研究社. / Kayne, R. 1984. *Connectedness and Binary Branching*. Dordrecht: Foris. / 小西友七. 1980. 『英語基本動詞辞典』東京: 研究社. / Lapointe, S. 1980. "A Note on Akmajian, Steel and Wasow's Treatment of Certain Verb Complement Types." *Linguistic Inquiry* 11, 770-787. / Mittwoch, A. 1990. "On the Distribution of Bare Infinitive Complements in English." *Journal of Linguistics* 26.1, 103-131. / 村岡宗一郎. 2023. 「使役動詞補文に出現する原形不定詞の非同時性について」『JELS』40, 43-49. / 岡田禎之. 2018. 「英語の補文形式と事態の統合について」池内正幸・窪菌晴夫・小菅和也.(編)『英語学を英語授業に活かす-市河賞の精神を受け継いで』158-216. 東京: 開拓社. / Okuyama, M. 1994. "On the Conceptual Structure of Get-causative." *Tsukuba English Studies* 13, 43-66. / Palmer, F. R. 1987. *The English Verb, Second Edition*. London: Longman. / Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1972. *A Grammar of Contemporary English*. London: Longman. / Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman. / Ritter, E. and S. T. Rosen. 1993. "Deriving Causation." *Natural Language and Linguistic Theory* 11, 519-555. / Ross, J. R. 1969. "Auxiliaries as Main Verbs." In W. Todd. (Ed.), *Studies in Philosophical Linguistics*, 77-102. Evanston, IL: Great Expectations. / Rothstein, S. 2004. *Structuring Events: A Study in the Semantics of Lexical Aspect*. Oxford: Blackwell. / 佐藤健児. 2014. 「進行形の「前段階」性について」『英文学論叢』62, 99-119. / Sheehan, M. and S. Cyrino. 2024. "Restrictions on Long Passives in English and Brazilian Portuguese: A Phase-Based Account." *Linguistic Inquiry* 55, 769-803. / 鈴木英一・安井泉. 1994. 『動詞』東京: 研究社. / Swan, M. 1995. *Practical English Usage, Second Edition*. London: OUP. / Swan, M. 2005. *Practical English Usage, Third Edition*. London: OUP. / Swan, M. 1995. *Practical English Usage, Second Edition*. London: OUP. / Swan, M. 2016. *Practical English Usage, Fourth Edition*. London: OUP. / Takahashi, H. 2012. *A Cognitive Linguistic Analysis of the English Imperative: With Special Reference to Japanese Imperatives*. Amsterdam: John Benjamins. / Takezawa, K. 1984. "Perfective Have and the Bar Notation." *Linguistic Inquiry* 15, 675-687. / Teunissen, L. M. 2001. *Semantic Syntax: Evaluation by Implementation*. Dissertation, Radboud University. / Tubino-Blanco, M. 2011. *Causatives in Minimalism*. Amsterdam: John Benjamins. / Wada, N. 2019. *The Grammar of Future Expressions in English*. Tokyo: Kaitakusha. / Williams, E. 1984. "There-insertion." *Linguistic Inquiry* 15, 131-153. / Zagana, K. 1988. *Verb Phrase Syntax: A Parametric Study of English and Spanish*. Dordrecht: Kluwer.

シンポジウム 15:35 – 17:45

テーマ「英語へのコンストラクション（構文）的アプローチ」

司会 前川貴史（龍谷大学）

1. 「不定冠詞と複数形名詞が出会うとき」 前川貴史（龍谷大学）
2. 「ネットワークを用いた構文分析—BE V-en INF 構文を例に—」 町田章（日本大学）
3. 「“So, look, I mean, you know, the fact is, is that ...” —語用論標識の連鎖と語法について—」
..... 柴崎礼士郎（明治大学）
4. 「談話構文としての数・量推移構文」 村尾治彦（熊本県立大学）

不定冠詞と複数形名詞が会うとき*

前川貴史（龍谷大学）

maekawa@soc.ryukoku.ac.jp

1. はじめに

- 英語の不定冠詞は単数形可算名詞と共に文中に現れる。

- (1) a. a book
b. *a books
c. (*a) book

- しかし，AANN 構造¹では不定冠詞が複数形名詞と共に起る。

- (2) a. We spent *a good eight hours* in the studio that first night, (...).
(私たちはその最初の夜たっぷり 8 時間をスタジオで過ごした)²
(G. Emerick, *Here, There and Everywhere*, 136)
- b. We still have *an estimated 100 million fans* worldwide.
(我々にはまだ世界中で推計 1 億人のファンがいる) (D. Felder, *Heaven and Hell*, 323)
- c. “Kokomo” became the most successful song in the history of the Beach Boys, selling *a remarkable 7 million records* (...).
(“ココモ” はビーチボーイズの歴史で最も成功した曲になり，驚くべき 700 万枚のレコードが売れた) (M. Love, *Good Vibrations*, 332)

- この不定冠詞は，AANN 構造において完全に必須の要素である。

- (3) a. *(a) good eight hours
b. *(an) estimated 100 million fans
c. *(a) remarkable 7 million records

- 形容詞と数詞との間に語順的決まりが存在する。

* 本発表は前川 (2025) に基づき，その内容に加筆・修正したものである。

¹ Article + Adjective + Numeral + Noun を意味し，Keenan (2013), Dalrymple and King (2019), Hristov (2021) の用語である。

² 以下，例文の日本語訳は発表者によるものである。

- (4) a. *a(n) eight good hours
 b. *a 100 million estimated fans
 c. *a 7 million remarkable records

- 形容詞と数詞が共起しなければならない。

- (5) a. i. a *(good) eight hours ii. a good *(eight) hours
 b. i. a(n) *(estimated) 100 million fans ii. an estimated *(100) million fans
 c. i. a *(remarkable) 7 million records ii. a remarkable *(7 million) records

- 本発表の目的
 AANN 構造の特殊性, 特に不定冠詞の生起をどのように説明するべきか

- 構成
 2 節: AANN 構造に対する「複数の統合化」による説明を振り返る。
 3 節: それには従わない AANN 構造が存在することを観察する。
 4 節: AANN 構造の不定冠詞は歴史的経緯によって説明できることを示す。
 5 節: まとめ

2. 複数の統合化による説明

- 「複数の統合化 (unification of plurals)」は, 複数のものを一つのグループとして捉えて単数で表現することである (Jespersen 1954: 110ff) (Poutsma (1914: 304), 安藤 (2005: 888), 樋口 (2009a: 119), 樋口 (2009b: 148), Hristov (2021: 51-2), 谷 (2020) も参照)。

- (6) a. He played *five boring songs*, but in between he played one really good one.
 (彼は 5 曲の退屈な曲を演奏したが, その間に 1 曲本当にいい曲を演奏した)
 b. ??He played *a boring five songs*, but in the middle he played a really good one. (Solt 2007: 4)

- (6)a は, 演奏された 5 曲がそれぞれ退屈であったことを述べている。後半部の “but in between he played one really good one” は, その 5 曲が連続して演奏されたものではないことを表している。
- (6)b は, 5 曲が連続して演奏されたことを表しており, これらの曲を単一のひとまとめとして認識した表現である。それによって後半部の “but in the middle he played a really good one” が矛盾を引き起こす (Solt 2007: 4; Bylinina et al. 2016: 11; Ionin and Mutashansky 2018: 275ff)。

3. 統合化を示さない AANN 構造

3.1. 量的解釈と質的解釈

- (7) a staggering one hundred and ninety-two hikers は、冒頭の “At various points during the day” が示すように、別々に行動する hikers を指示している。統合化効果はない。
- (7) At various points during the day, a staggering one hundred and ninety-two hikers showed up wanting to be fed. (一日のいろいろな時点に、仰天の 192 人のハイカーが食料を求めてやって来た)
(Ionin and Mutashansky 2018: 276)
- (6)b と (7) の対立は、「量的解釈 (quantity reading)」と「質的解釈 (quality reading)」に関連する (Honda 1984, Bylinina et al. 2016: 2-3; Dalrymple and Holloway King 2019: 491, 495; Hristov 2021: 48-9; Ionin and Matushansky 2018: 274ff; Keenan 2013: 89; Solt 2007: 4-7)。
- 質的解釈では、形容詞は名詞の指示対象の性質を記述する。次の例の形容詞 lucky は、students の性質を特徴づけている。
- (8) A lucky three students got fellowships. (Solt 2007: 2)
(幸運な 3 名の学生が奨学金を手に入れた)
- 量的解釈においては、形容詞は名詞の指示対象の数量について表現する。次の例では、形容詞 remarkable で表現されているのは、90 という応募者数についてである。
- (9) We received a remarkable ninety applications for the position. (Solt 2007: 2)
(その職に対して驚くべき 90 の応募があった)
- (6)b の a boring five songs は、5 曲をひとまとめにしてその性質を形容詞 boring で表現しており、質的解釈を持つ。
- 一方、(7) の a staggering one hundred and ninety-two hikers は、192 人というハイカーの数を staggering が特徴づけており、量的解釈をもつ。
- 上で述べたように、統合化効果を持つのは (6)b の a boring five songs であり、(7) の a staggering one hundred and ninety-two hikers はその効果を示さない。つまり、統合化効果が見られるのは、質的解釈の場合にのみであり、量的解釈ではその効果は生じないと言える。
- 次の実例についても同様の説明ができそうである。
- (10) a. (...) he discovered that he had slept through a very hectic six hours in the history of Port Roris, (...).

(彼はポート・ロリスの歴史上非常にあわただしい 6 時間を眠り続けていたことに気づいた)

(A. C. Clarke. *A Fall of Moondust*, 130)

- b. (...) and eventually sold *a staggering six million copies* world-wide.

(そして最終的に世界中で仰天の 600 万枚を売った)

(G. Emerick, *Here, There and Everywhere*, 363)

- 量的解釈の場合、不定冠詞の生起を統合化効果によって説明することはできない。
- よって、統合化効果は AANN 構造全体を特徴づけるものではない。

3.2. 主語としての AANN 構造と動詞の一致

- AANN 構造が必ずしも統合化効果を持たないことのさらなる証拠として、同構造が主語として生じた場合の動詞との一致現象が挙げられる。
- 主語と動詞との一致現象には、主語の意味が関わる。
- 単数の解釈をもつ主語は、動詞と単数で一致する。

- (11) a. *It takes* up a lot of energy. (それにはたくさんのエネルギーがかかる)

- b. **It take* up a lot of energy. (Carter and McCarthy 2006: 496)

- 複数としての解釈を持つ主語は、動詞とは複数で一致する。

- (12) a. *We love* Dublin.

- b. **We loves* Dublin. (Carter and McCarthy 2006: 496)

- 集合名詞は、集合をひとつのものとして見る単数解釈と、集合の個々のメンバーを指す複数解釈がある。単数解釈の場合は動詞とは単数で一致する。
- 複数解釈の場合は、動詞とは複数で一致する。

- (13) a. *The committee has* not yet come to a decision.

(その委員会はまだ結論には至っていない)

- b. *The committee have* not yet come to a decision.

(その委員会のメンバーはまだ結論には至っていない) (Huddleston and Pullum 2002: 501)

- 尺度名詞ではない名詞を主要部に持つ AANN 構造が主語となるとき、動詞とは複数で一致する。³

³ (i)a が示すように、尺度名詞が主要部である AANN 構造が主語になった場合、動詞とは単数で一致し、複数形の一致は不可である。(ii)b のようにこれは他の一般の尺度名詞句主語と同様である。

(i) a. A mere fifty cents for a cup of coffee sounds/*sound reasonable to me!

(14) *A lucky three students were/*was awarded prizes.*

(幸運な 3 人の学生が賞を授与された)

(Dalrymple and Holloway King 2019: 498)

- よって、(14) の *a lucky three students* のような、動詞との複数一致を示す AANN 構造主語は、複数としての解釈を持っており、統合化は生じていないと言える。
- このように、AANN 構造には統合化効果を示さない例もあるため、同効果によって不定冠詞 *a* の使用が動機づけられていると考えることはできない。

3.3. 複数形の限定詞の使用

- 実際、不定冠詞ではなく、複数形限定詞が用いられることもある。

(15) a. This article considers how *these fundamental three concepts* can be used to increase children's success in the classroom.

(この論文は、これらの基本的な 3 つの概念をどのように使って子供たちの教室での成功体験を増やすかを考察する)

(COCA: 2010 ACAD)

b. In my view, our performances on *those interminable three nights* weren't great, (...).

(私が思うに、あのだらだらと続いた三晩の公演は良い出来ではなかった)

(D. Felder, *Heaven and Hell*, 308)

- (15)b では動詞と複数で一致しているので、確かに複数解釈である。
- このように、AANN 構造に複数形の限定詞が用いられる場合があると言う事実もやはり、統合化が全ての AANN 構造を特徴づけるものではないことを示している。

3.4. まとめ

- AANN 構造には統合化効果を示さない場合がある。もし統合化によって不定冠詞 *a* の生起が動機づけられるのなら、*a* を持つすべての AANN 構造に統合化効果が見られるはずである。
- 統合化が AANN 構造全体の性質ではない。よって、AANN 構造に冠詞 *a* が生じるのは、統合化以外の要因によるということになる。

(コーヒー 1 杯がたったの 50 セントというのは手ごろだと思います。)

(Keenan 2013: 88)

b. *Five pounds* is/*are a lot of money. (5 ポンドは大金だ。)

(Hudson 1999: 174)

4. その他の AANN 構造の説明

- その他に提案されている説明には以下のようなものがある。
- Jackendoff (1977: 128ff), Ohna (2003), Ionin and Matushansky (2004: 111-2) は、数詞は単数形名詞であると仮定することで不定冠詞の生起を説明する。しかし、なぜ形容詞がある場合だけ不定冠詞が現れるのかという点について疑問が残る。
- Kayne (2005: 190), Solt (2007), Keenan (2013: 94), Dalrymple and King (2019: 496-7) は、AANN 構造が [a beautiful [two weeks]] のような二層構造を持つと仮定し、下の層 ([two weeks] の層) は複数としての解釈を持つが、上の層は単数であるとすることによって、不定冠詞 a の生起を説明する。しかし、AANN 構造には複数形限定詞の使用も可能 (3.3 節) であるという点が捉えられない。
- Bylinina et al. (2016: 5), Ionin and Matushansky (2018: 279ff), Maekawa (2013: 414ff) は、これらとは別の観点から、数詞の前に形容詞が来る際の不定冠詞の挿入のメカニズムについて理論的に考察している (Klockmann (2020: 20) も参照)。

5. AANN 構造の歴史的発達

- AANN 構造における不定冠詞 a にはどのような要因が考えられるであろうか。現時点でもっとも見込みがあると考えられるのは、歴史的観点からの説明である。
 - 16 世紀に a が many の前の位置に入った。(*OED*: many B. 1. Cf. Schmidt 1913: 165-168; Rissanen 1972: 347-348)。
- (16) a. Though a many friends Are made a way. (1590 Marlowe *Edw. II*, IV. ii)
b. A great many people have seen him besides. (1776 *Trial of Nundocomar* 23/2)
c. It is a good many years since I have seen him. (1813 *Sk. Character* (ed. 2) I. 205) (*OED*: many B. 1.)
- これは a few など他の構造からの影響によると考えられる。

- (17) a. ‘On the analogy of *a few* (...), *a* has from the 16th c. been prefixed to *many* when followed by a pl. n. (...)’ (*OED*: many B. 1.)
b. ‘(...) this quasi-substantival use of many must be explained as a construction analogous to plural combinations of earlier origin, such as *a few*, *a hundred*, *a thousand*, *a certain* + plural noun.’ (Schmidt 1913: 167)
c. ‘The rise of this construction can be (...) regarded as a late parallel the development of *a certain/a little/a hundred* + plural noun.’ (Rissanen 1972: 347)

- (18) の *ane* は、古英語の数詞／不定冠詞 *an* の複数形である。この *ane* は「おおよそ、だいたい」と

c. *(a) remarkable 7 million records [= (3)]

- 形容詞と数詞の位置を入れ替えることができない。

(21) a. *a(n) eight good hours

b. *a 100 million estimated fans

c. *a 7 million remarkable records [= (4)]

- 形容詞と数詞が共起しなければならない。

(22) a. i. a *(good) eight hours

ii. a good *(eight) hours

b. i. a(n) *(estimated) 100 million fans

ii. an estimated *(100) million fans

b. i. a *(remarkable) 7 million records

ii. a remarkable *(7 million) records [= (5)]

6. おわりに

- 本発表は AANN 構造に焦点を当て、特に複数形名詞と不定冠詞の共起に対する説明を模索するものである。
- 複数のものを一つのグループとして捉えて単数で表現する「複数の統合化」による説明に対し、統合化と AANN 構造の不定冠詞とは切り離して考えるべきであると主張した。
- AANN 構造の不定冠詞は、歴史的経緯による説明が有効である。
- AANN 構造の史的発達は「構文化 (constructionalization)」(Traugott and Trousdale (2013), 前田 (2025) など) の観点からも興味深い。
- 本発表は、英文法を学習する際に抱く疑問を解くカギのうちのひとつとして、歴史的視点を導入することの有効性を示唆するものである。歴史的な説明によって、学生の知的好奇心を刺激し、英語、もしくは言語一般に対する新たな学習意欲を引き出すことにもつながると期待できる。⁴

参考文献

安藤貞雄 (2005) 『現代英文法講義』, 開拓社, 東京.

Bylinina, Lisa, Dotlačil, Jakub and Klockmann, Heidi (2016) “Adjectival Modification of Numerals,” handout, Logic in Language and in Conversation, Utrecht University, 19 September 2016.
https://heidiklockmann.files.wordpress.com/2015/09/lisaheidijakub_handout_6sep2016_v3_formatting.pdf

Carter, Ronald and Michael McCarthy (2006) *Cambridge Grammar of English*, Cambridge University Press,

⁴ 学習参考書では『クラウン総合英語』(霜崎(編) 2016: 401) が a great many years の構造に言及し、ここに現れる冠詞が古英語 an の複数形 ane に由来すると述べている。

Cambridge.

Honda, Masaru (1984) “On the Syntax and Semantics of Numerals in English,” *Journal of Osaka Jogakuin 2-Year College* 14, 97–115.

樋口昌幸 (2009a) 『英語の冠詞—その使い方の原理を探る』, 開拓社, 東京.

樋口昌幸 (2009b) 『英語の冠詞—歴史から探る本質』, 広島大学出版会, 東広島.

Hristov, Bozhil (2021) “An LFG Analysis of AANN Constructions: ‘A Staggering Ten Doctoral Dissertations’” *Modular Design of Grammar: Linguistics on the Edge*, ed. by I Wayan Arka, Ash Asudeh and Tracy Holloway King, 45–64, Oxford University Press, Oxford.

Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge University Press, Cambridge.

Hudson, Richard (1999) “Subject-verb Agreement in English,” *English Language and Linguistics*. 3, 173–207.

Ionin, Tania and Matushansky, Ora (2004) “A Singular Plural,” *WCCFL 23: Proceedings of the 23rd West Coast Conference on Formal Linguistics*, ed. by Benjamin Schmeiser, Vineeta Chand, Ann Kelleher and Angelo Rodriguez, 101–114, Cascadia Press, Somerville, MA.

Ionin, Tania and Matushansky, Ora (2018) *Cardinals: The Syntax and Semantics of Cardinal-Containing Expressions*, The MIT Press, Cambridge, MA.

石田秀雄 (2002) 『わかりやすい英語冠詞講義』, 大修館書店, 東京.

Jackendoff, Ray (1977) *X' Syntax: A Study of Phrase Structure*, The MIT Press, Cambridge, MA.

Jespersen, Otto (1954) *A Modern English Grammar on Historical Principles*, Allen and Unwin, London.

Kayne, Richard (2005) “A Note on the Syntax of Quantity in English,” *Movement and Silence*, 176–214, Oxford University Press, Oxford.

Keenan, Caitlin (2013) “‘A Pleasant Three Days in Philadelphia’: Arguments for a Pseudopartitive Analysis,” *University of Pennsylvania Working Papers in Linguistics* 19(1), 87–96.

Klockmann, Heidi (2020) “The Article a(n) in English Quantifying Expressions: A Default Marker of Cardinality,” *Glossa* 5(1), 1–31.

前田満 (2025) 『構文発達のダイナミズム—構文化と構文変化』, 開拓社, 東京.

Maekawa, Takafumi (2013) “An HPSG Analysis of ‘A Beautiful Two Weeks’,” *Linguistic Research* 30(3), 407–433.

前川貴史 (2025) 「複数形名詞と不定冠詞の共起」『学習英文法を見直す』, 中澤和夫・大室剛志 (編), 39–54, 開拓社, 東京.

Oxford English Dictionary (1989²), CD-ROM. [OED]

Poutsma, Hendrik (1914) *A Grammar of Late Modern English. Part II: The Parts of Speech. Section I, A, Nouns, Adjectives and Articles*, P. Noordhoff, Groningen.

Quirk, Randolph, Sydney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.

Rissanen, Matti (1972) “The Use of ‘One’ and the Indefinite Article with Plural Nouns in English,” *Neuphilologische Mitteilungen* 73, 340–352.

Schmidt, Fredrik (1913) “The Indefinite Article before Plural Combinations in English,” *Minnesskrift af forna*

lärjungar tillägnad professor Axel Erdmann på hans sjuttioårsdag den 6 Febr. 1913, 147-170, Almqvist & Wiksells, Stockholm.

霜崎實（編）(2016)『クラウン総合英語 第3版』, 三省堂, 東京.

Solt, Stephanie (2007) “Two Types of Modified Cardinals,” handout, International Conference on Adjectives.
https://www.researchgate.net/publication/267373402_Two_Types_of_Modified_Cardinals

谷光生 (2020) 「数詞修飾構造 a beautiful two weeks の下位類について」『英語英米文学論輯：京都女子大学大学院文学研究科研究紀要』, 29-40.

Traugott, Elizabeth Closs and Graeme Trousdale (2013) *Constructionalization and Constructional Changes*, Oxford University Press, Oxford.

データ出典

Clarke, Arthur, C. *A Fall of Moondust*, Gollancz, London.

Davies, Mark (2004-) BYU-BNC. (Based on the British National Corpus from Oxford University Press).
<http://corpus.byu.edu/bnc/>.

Davies, Mark (2008-) The Corpus of Contemporary American English: 450 million words, 1990-present.
<http://corpus.byu.edu/coca/>.

Emerick, Geoff (2007) *Here, There and Everywhere*, Gotham Books, New York.

Felder, Don (with Wendy Holden) (2009) *Heaven and Hell: My Life in the Eagles (1972-2001)*, Phoenix, London.

Love, Mike (with James S. Hirsch) (2016) *Good Vibrations: My Life as a Beach Boy*, Faber & Faber, London.

ネットワークを用いた構文分析
—BE V-en to INF 構文を例に—

町田章（日本大学）
machida.akira@nihon-u.ac.jp

1. はじめに

英語には、以下の例の下線部に示すように、「be 動詞＋過去分詞＋to 不定詞」の表現パターンがある。

- | | | |
|--------|--|--------|
| (1) a. | The politician <u>is rumored to</u> receive a lot of bribes. | 【伝達動詞】 |
| b. | The bank teller <u>is reported to</u> have stolen the customer's money. | 【伝達動詞】 |
| (2) a. | The teacher <u>is thought to</u> be intelligent. | 【思考動詞】 |
| b. | He <u>is believed to</u> be guilty. | 【思考動詞】 |
| (3) a. | Inflation <u>is expected to</u> rise next year. | 【予測動詞】 |
| b. | The number of suicides <u>is predicted to</u> increase by 15,202 per year. | 【予測動詞】 |
| (4) a. | The thief <u>was seen to</u> run away in the dark. | 【知覚動詞】 |
| b. | The victim <u>was heard to</u> say something before being shot. | 【知覚動詞】 |
| (5) a. | John <u>is made to</u> leave the room. | 【使役動詞】 |
| b. | I <u>was ordered to</u> kill you. | 【使役動詞】 |

これらの表現パターンの中には法助動詞的な意味を表すものがあると言われている。実際、Halliday (1994)では、(6)から(8)に示すように、(a)の下線部が(b)の法助動詞に相当する意味を表すものとして扱われている。

- | | |
|--------|-------------------------------------|
| (6) a. | They <u>are required to</u> accept. |
| b. | They <u>must</u> accept. |
| (7) a. | They <u>are obliged to</u> accept. |
| b. | They <u>should</u> accept. |
| (8) a. | They <u>are allowed to</u> accept. |
| b. | They <u>may</u> accept. |

(Halliday 1994:287)

実際、この表現パターンと法助動詞の関係を指摘する先行研究は多い。例えば、Quirk et al. (1985)では、*be bound to*, *be supposed to*, *be meant to*, *be obliged to*, *be allowed to*, *be permitted to*, *be destined to* が semi-auxiliaries (p.143)または marginal auxiliaries (p.236)とされている。また、近年はコーパスを用いた実証的研究が盛んであり、Noël の一連の研究が優れている(Noël 2001, 2017,

2019)。他にも、*be said to*, *be expected to*, *be supposed to* の証拠性に関する Breeze (2017)や *be force to*, *be allowed to* の束縛的モダリティーに関する研究(福田・伊藤 2025)、歴史的観点から *be bound to* を扱った(家口 2025)などがある。

これらの先行研究で一致しているのは、この表現パターン (BE V-en to INF) の一部の事例は完全な助

動詞とは認められないものの助動詞的な性質を持っているという点であり、この表現パターンは文法化(grammaticalization)の途上にあるというところである。ただし、停滞または出現頻度が低下しているものもあるとの指摘もある(Breeze 2017, Noël 2019, 家口 2025)。

以上を踏まえ、本研究では Langacker の認知文法(Cognitive Grammar)および構文文法(Construction Grammars)の枠組みを用いて、英語において、BE V-ed to INF という形式の構文化(constructionalization)が進んでいることを示す。そのうえで、BE V-ed to INF 構文が助動詞的な機能を果たすように文法化する認知的要因について考察する。そして、この構文の法助動詞の特徴は、Modal Infinitive (MOD INF) 構文、X to INF 構文、BE PRED to INF 構文、SOR 構文、SSR 構文、受動化構文など複数の構文からなる構文ネットワークから説明されることを示す。

2. 文法構文化

はじめに、Goldberg (2006)による構文(construction)の定義から議論を始めたい。(9)の引用に示すように、構文とは学習されたすべての形式と意味のペアを指す用語である。つまり、言語表現はすべて構文であるということになる。そのため、形態素から語、イディオムに至るまで従来構文とは呼ばれていなかった表現単位もすべて構文ということになり、どのようなレベルで文法の分析を行うにしても必ず構文を扱うことになる。

- (9) All levels of grammatical analysis involve constructions: learned pairings of form with semantic or discourse function, including morphemes or words, idioms, partially lexically filled and fully general phrasal patterns. (Goldberg 2006:5)

また、構文は固定スロット(fix slots)とオープン・スロット(open slots)からできており、基本的な項構造のようにすべての要素がオープン・スロットである場合、定型句(e.g. *Are we there yet?*)のような、すべての要素が固定スロットである場合、そして、それらの中間にある両者が混在した場合などがある(cf. 前田 2025:26-28)。

構文の認定に関しては、Goldberg は、従来、(10)に示すように、構成要素から予測されない特徴を持っている形式と意味のペアであるとしていたが、近年は、十分な頻度で出現する形式と意味のパターンも構文であるとし、構文の定義を拡張した。

- (10) Any linguistic pattern is recognized as a construction as long as some aspect of its form or function is not strictly predictable from its component parts or from other constructions recognized to exist.

(Goldberg 2006:5)

- (11) In addition, patterns are stored as constructions even if they are fully predictable as long as they occur with sufficient frequency. (Goldberg 2006:5)

以上の定義から、本研究で扱う「be 動詞＋過去分詞＋to 不定詞」の表現パターン(e.g. *be expected to, be said to*…)は十分な頻度で出現するパターンであることから構文であると認定することができる。そのように認定したうえで問題となるのは、この構文を法助動詞とみなすことができるかどうかである。

Traugott and Trousdale (2013)によると、構文には語やイディオムなどの語彙的構文(lexical constructions)と文法的構文(grammatical constructions)があり、それぞれ構文化(constructionalization)を経て構文の地位を確立する。このような観点から見た場合、従来から研究されてきた文法化(grammaticalization)という現象

は、文法構文化であると再定義される。つまり、(12)の引用に示す通り、構文化によって生じた語彙的構文をもとに文法的構文が生じるということである(cf. 前田 2025:109-118)。

(12) 文法構文化(Grammatical Constructionalization)

Other series of changes in form and meaning create constructions that encode grammatical form-meaning pairs that differ from their lexical sources in being less referential, more abstract and procedural.

(Traugott and Trousdale 2013:23)

以上から、BE V-en to INF 構文が助動詞的な機能を果たすように文法化するという事は、すなわち、BE V-en to INF 構文が語彙的構文から文法的構文へと文法構文化するということになる。

この法助動詞へ文法構文化の経路について理解するために認知文法における法助動詞(Modal Auxiliaries)の概念構造についてここで説明しておきたい(cf. Langacker 2014)。認知文法では、言語を構成する名詞類(nominals)と節(clauses)は必ずグラウンディング(grounding)されていなければならないと考えられている。グラウンディングとは、要するに、会話で提示されるモノやコトは、話し手、聞き手、発話事態など(グラウンド G と呼ぶ)の文脈の中に必ず位置づけられなければならないということである。そして、名詞の場合には冠詞が、節の場合には時制辞や法助動詞などがこのグラウンディングの働きを担っている。

英語において、グラウンドが命題に対してどのような認識評価(epistemic assessment)を行っているかを表すのが認識的法助動詞であり、グラウンドの命題に対する実効統制力(effective control)を表しているのが束縛的法助動詞である。これをステージと観客のメタファー(ステージモデル)で理解すると、オフステージのグラウンドがステージ上(OS)にある命題をどのようなものとして捉えているかを表示するのが法助動詞ということになる。そのため、語彙的構文である BE V-en to INF 構文が文法的構文である助動詞構文になるためには、(13)のような事例の概念構造が図 1 (a)から図 1 (b)になることが必要である。

- (13) a. The Prime Minister is expected to resign. 【認識的】
b. The Prime Minister was forced to resign. 【束縛的】

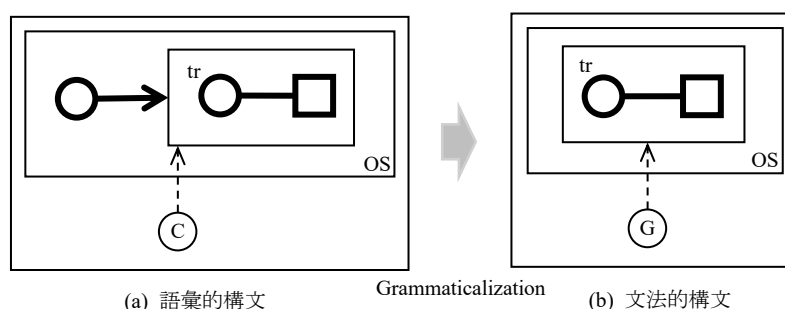


図 1 BE V-en to INF 構文の助動詞化

3. 文法構文化の経路

文法構文化について議論する前に語彙的構文化について確認しておく。言語変化を起こす要因の一つとして再分析(Reanalysis)という現象がある(cf. Hopper and Traugott 2003:50-58)。例えば、(14a)の主動詞と to 不定詞句の関係が、(14b)のように want と to が一塊と感じられるようになる際に生じているが構造の組み換えが再分析である。この再分析が足掛かりとなり、(14c)のように want to の縮約(contraction)が生

じることになる。

- (14) a. I want [to go to the party].
 b. I [want to] go to the party.
 c. I wanna go to the party.

実際、BE V-en to INF という語の連なりにこの再分析が生じ、本来の(15a)の構造が(15b)のように感じられるようになり、現在では Hopper and Traugott (2003)も指摘しているように、(15c)のように話し言葉では縮約が生じている。

- (15) a. He is supposed [to be there].
 b. He [is supposed to] be there.
 c. He is sposta be there. (cf. Hopper and Traugott 2003:129)

ただし、この再分析の議論は語彙的構文化が生じる経路の一例を示しているにすぎず、文法化については何も語っていない。図 1 (a)が図 1 (b)の概念構造を得るようになる過程が明らかにされていないからである。これには、主体化(Subjectification)と呼ばれる現象が深く関わっている。

簡単に言うと、主体化とは、認識の客体(object of conception)が認識の主体(subject of conception)になることである。これをステージモデルで捉えると、ステージ上にあった要素がオフステージに位置づけられることになる。要するに、「見られる側」が「見る側」になることである(cf. Langacker 1990)。

では、どのような認知メカニズムで認識の客体が認識の主体になるのであろうか。ここでは、動詞が表すプロセス(process)が主体化する際の意味的变化の経路を示す。はじめにステージ上にある認識の客体となっているプロセスの表す具体的内容が希薄化(attenuation)を受ける。この希薄化には、多くの場合、物的領域から社会的・経験的領域への領域の変換が含まれる。また、その際、多くの場合、プロセスの力の所在(the locus of potency)の拡散(diffusion)という現象が起こる。これらが生じると、認識の客体であったそのプロセスが認識の主体に移行する準備が整うことになる(cf. Langacker 1999)。

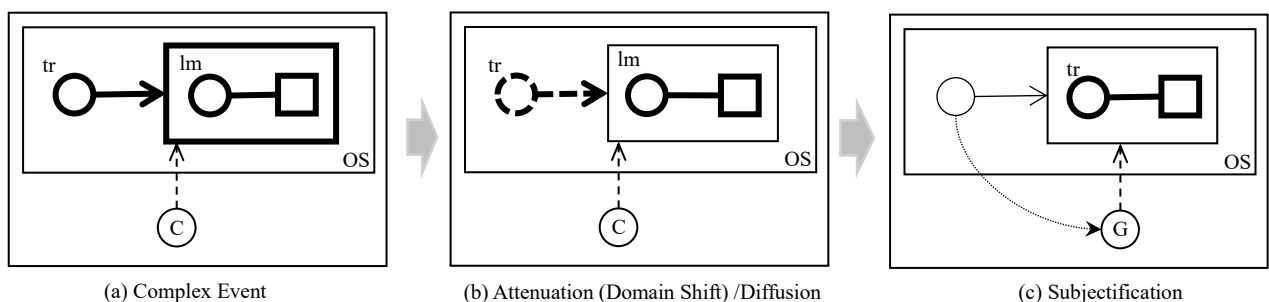


図 2 Subjectification

注意しなければならないのは、この希薄化や力の所在の拡散という現象は、主体化の専売特許ではないということである。例えば、受動化(Passivization)においてもこれらは生じうる。Shibatani (1985)によると、受動化の最も中心的機能は動作主の脱焦点化(agent defocusing)である。

図 3 (a)に受動化を行うと動作主が焦点から外れ、(b)に示すように目的語である lm が焦点化され主語(tr)となる。そのため、(c)に示すように、焦点から外れた動作主が不明確になり、それに伴ってその動作

主が行った行為までもが不明確になる。これは力の所在の拡散を意味し、プロセスの具体的内容の希薄化と言える。つまり、BE V-en to INF 構文の主体化に必要な概念構造は BE V-en の部分、つまり、受動構文によってもたらされたと考えられるのである。

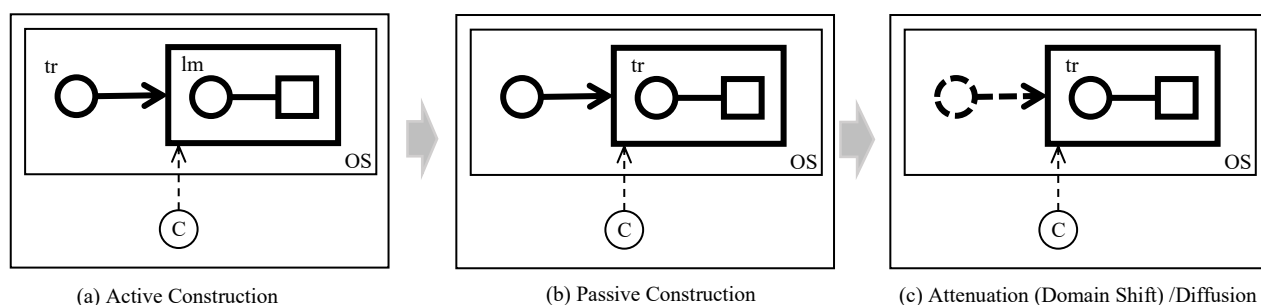


図3 受動化

ちなみに、BE V-en to INF 構文の表す事態が対応する能動文のそれよりも希薄化していることは度々指摘されている (Palmer 1988:199, 綿貫(他)1994:144)。

最後に、この一連の主体化の過程を支えるプロファイルと活性化領域の不一致(profile/active zone discrepancy)という現象について検討する(Langacker 1999:331)。Langacker(1999:434)は、いわゆるコントロール述語(control predicates)(16a)と繰り上げ述語(raising predicates)(16b)の事態把握の構造の違いを、モノ(things)に直接働きかけるか、または、モノが参与している事態（または命題）全体に働きかけるかの違いであるとしている。図4はこの Langacker(1999)の分析を簡略化して図示したものである。

- (16) a. He persuaded her to run for Prime Minister. 【コントロール述語】
b. He expected her to run for Prime Minister. 【繰り上げ述語】

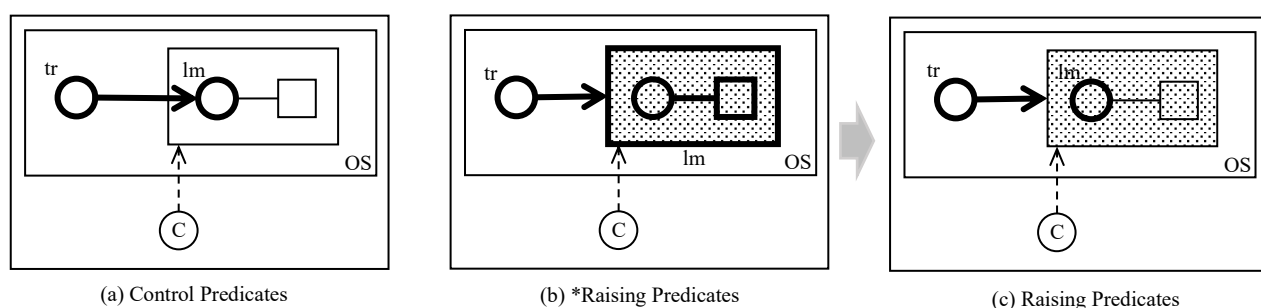


図4 Control and Raising Predicates

(16a)を図示した図4(a)は *persuade, compel, force, encourage, urge* などの目的語がコントローラーになるコントロール動詞 (cf. 原口・中村 1992) の事態把握を表しており、これらの動詞ではモノが *lm* として捉えられている。それに対し、(16b)の Subject-to-Object の繰り上げ動詞(SOR)では、図4(b)に示すように、モノではなく事態（命題）全体が *lm* と捉えられている点で異なっている。期待されているのは「彼女」ではなく「彼女が立候補すること」なのである。しかしながら、実際には、繰り上げ動詞が *to* 不定詞をとる場合は、プロファイルと活性化領域の不一致が生じ、図4(c)で示すように事態の参与者であるモノが *lm* とされている。活性化領域とは、表現されている関係認識(relation)に直接関与する箇所の

ことであり、ここではこの活性化領域と *lm* が一致していないのである。

Langacker によると、このプロファイルと活性化領域の不一致は、至る所で見られ、ほぼすべての表現が何らかの点でプロファイルと活性化領域の不一致を起こしている。例えば、(17)の例を見て欲しい。

(17) John began the report.

ここでの *lm* は *the report* となっているが、実際の活性化領域は *the report* ではない。図 5 (a)は誤りなのである。論理的に考えるとわかるが、何かを始めるということは何らかの行為を始めることを意味する。つまり、*begin* という動詞が直接関与する活性化領域は *the report* ではなくそれを含んだ行為（例えば「書く」など）なのである。したがって、(17)を正確に図式化すると、図 5 の(a)ではなく(b)ということになる。図 5 (b)の網掛けの部分本来目的語として言語化されるべき活性化領域を表しているが、実際には、目的語となっているのはこの行為の参与者である *the report* ということである。そして、これと同様の現象が繰り上げ述語にも生じていると考えるのである。

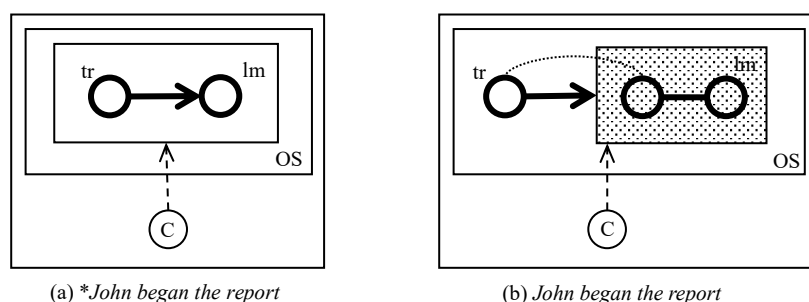


図 5 Profile/Active Zone Discrepancy

本研究で取り上げている BE V-en to INF 構文は受動構文であるため、実際には、Subject-to-Object 繰り上げ(SOR)に対応する図 4 (c)ではなく、(18)のような Subject-to-Subject 繰り上げ述語(SSR)の概念構造(図 6)と同じである。図 6 は Langacker (1999)に基づき改変して図示したものである。

(18) Don is likely to leave. (Langacker 1999:334)

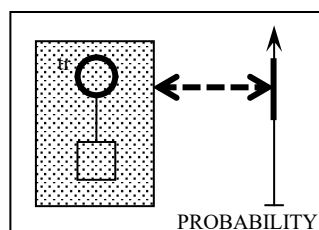


図 6 likely

以上、受動化、繰り上げ述語のプロファイルと活性化領域の不一致、これに Dixon (2005:252)が Modal (FOR) TO complement to と呼んでいる to 不定詞の意味を加えたものが主体化への動機づけとなり、BE V-en to INF 構文は、法助動詞的と同じ事態把握の構造を持つに至るものと考えられる。図 7 は BE V-en to INF 構文の概念構造である。そして、この構文は現在はまだ語彙的構文であるが、プロセスの希薄化

と力の所在の拡散が進んでいるため、主体化の準備は整っていると考えられる。

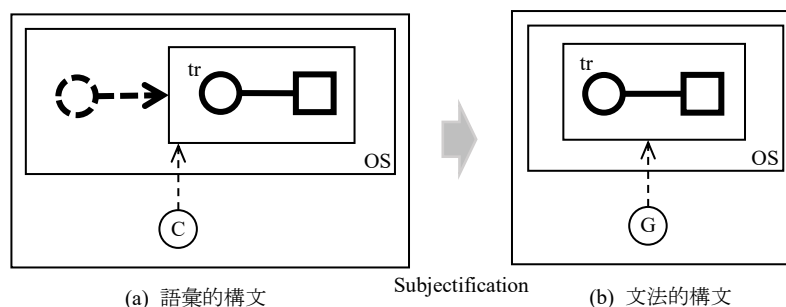


図7 BE V-ed to INF 構文

4. 鋳型としての構文

構文の中でもオープン・スロットのある構文は、新たな表現を生み出す鋳型として働くため、多少構文と構成要素の間に意味的な不整合であっても、構文全体としての意味的整合性を保つための矯正 (coercion) が行われることが知られている (Goldberg 1995)。例えば、(19)の事例を見てみよう。

- (19) a. Nixon was forced to resign. ($\simeq$ Nixon had to resign.)
 b. We are not allowed to eat pork. ($\simeq$ We must not eat pork.)

(福田・伊藤 2025, 一部改変)

(19)は図8(a)の概念構造を持つコントロール述語の受動化であるため、本来、図8(b)のようになるはずである。福田・伊藤(2025)によると、*be force to* の力の所在は「周囲の状況」にあり、*be allowed to* の力の所在は「社会共同体の法・慣習・規範」であることから、力の所在の拡散が見られる。また、*force* や *allow* の典型的な意味が物的な内容を含まないと考えられる。図8(b)で力の所在と *tr* に対するエネルギー伝達が破線で示されているのはそのためである。ただし、これは主体化ではなく受動構文の特徴によってもたらされたものであることに注意が必要である。

ここまでの議論から、コントロール述語の場合も主体化の道筋ができてるように一見見える。しかしながら、プロセスの主体化は図8(c)に示すように事態の参与者ではなく事態自体に向けられるプロセスでなければならないため、このままでは主体化は不可能である。(19)の主体化に必要なのは、主節のプロセスがモノに直接関与するのではなく、事態(命題)に関与するとみなされるかどうかなのである。

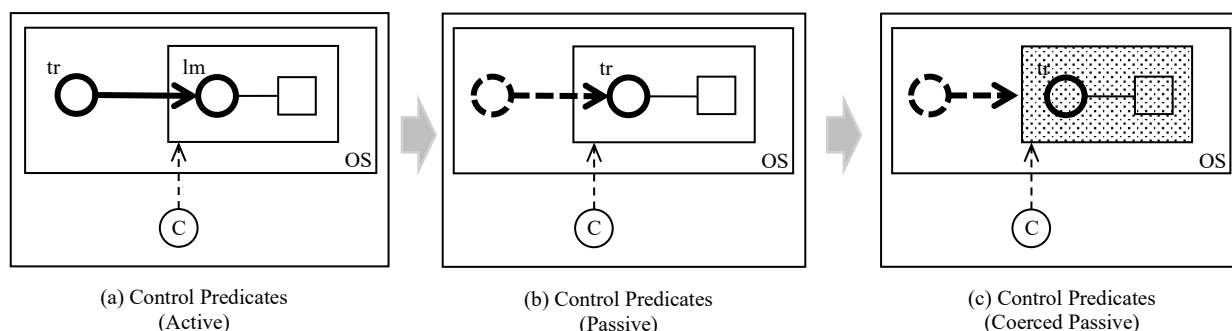


図8 構文による矯正

しかしながら、たとえコントロール述語であっても、この構文で用いられることにより不整合が矯正

され、図 8 (c) のような概念構造になりうる。実際、「ニクソンがやめることが強いられた」のかそれとも「ニクソンが強いられた」のか、「私たちが豚肉を食べないことが許されない」のかそれとも「私たちが許されない」のかの違いは、文脈によっても変わりうる。どちらかというとも後者の解釈の方が優勢のように思えるが、前者の解釈が全く不可能というわけではないのである。

また、対応する能動文を持たない事例についても、BE V-en to INF という形式が構文としての地位を獲得していることから説明できる。Hilpert (2019:42) も指摘しているように、統語操作によって能動文から受動文を派生する従来のアプローチでは、(20) のような受動文が存在するにもかかわらず、その派生元である(21)が存在しないことは重大な反証となっている。それに対し、派生を仮定しない構文的アプローチでは、そもそもそのような問題すら生じない。(20)は(21)から派生したのではなく、BE V-en to INF 構文を鋳型として生成された表現だからである。

- (20) a. Pat is reputed to be very rich.
b. Kim is said to be a manic depressive.

(Huddleston and Pullum 2002:1435)

- (21) a. * They repute Pat to be very rich.
b. * They say Kim to be a manic depressive.

同様に、(22) のような原形不定詞をとる知覚動詞と使役動詞の受動文に関する問題も生じない。従来の能動文から受動文への統語操作を仮定するアプローチでは、なぜ受動化すると(23)に示すように能動文には無かった to 不定詞が出現するのかという問いに答える必要が生じる(cf. Muraoka 2022, 村岡 2023)。

- (22) a. I saw him come out of the house.
b. They made us work all night.
(23) a. He was seen to come out of the house.
b. We were made to work all night.

(江川 1991:270)

しかしながら、統語的派生を想定しない構文的アプローチではそのような問題は生じない。(23)は BE V-en to INF 構文を鋳型として直接生成されるからである。必要なのは、図 7 (a) の概念構造と整合性のある意味内容を表しているかどうかである。

5. 残された課題

本研究で取り上げた BE V-en to INF 構文の事例の中には、プロセスの力の所在の拡散、希薄化が生じているため主体化の準備が整っているものもあると言える。その意味では、それらは語彙的構文というよりもむしろ文法的構文に近い。しかしながら、それらが完全な文法的構文になれていないことも確かである。その理由については依然として課題として残されている。

その原因の一つとして考えられるのがジャンルと文体の偏りである。例えば、Breeze (2017) のコーパスによる調査によると、この構文の認知的用法は極端に科学論文やジャーナリスティックな文章などの書き言葉に偏っていることがわかっている。文法化が日常会話のやりとりの中で醸成されていくものであると考えると、このジャンルと文体の偏りは文法化への阻害要因となってもおかしくない。実際、例外的に話し言葉で頻度を増やしている *be supposed to* は、*sposta* のように縮約も生じており、今後、文

法化が進む可能性がある。

また, Noël (2001:270)や福田・伊藤(2025:98)が主張しているように, (24a)のようなこの構文が, 話し手が客観性(を装いながら自身の主観)を伝える客観的モダリティの機能を持っているとすると, (24b)のような願望動詞も容認されることを誤って予測してしまう。「彼女が総理大臣に立候補すること」が望まれていると解釈できるからである。この問題に関しては, 稿を改めて議論したい。

(24) a. She is {expected/forced}to run for Prime Minister.

b. * She is wanted to run for Prime Minister.

最後にまとめとして, この構文と他の構文とのネットワーク関係を図9に示す(cf. Diessel 2023)。

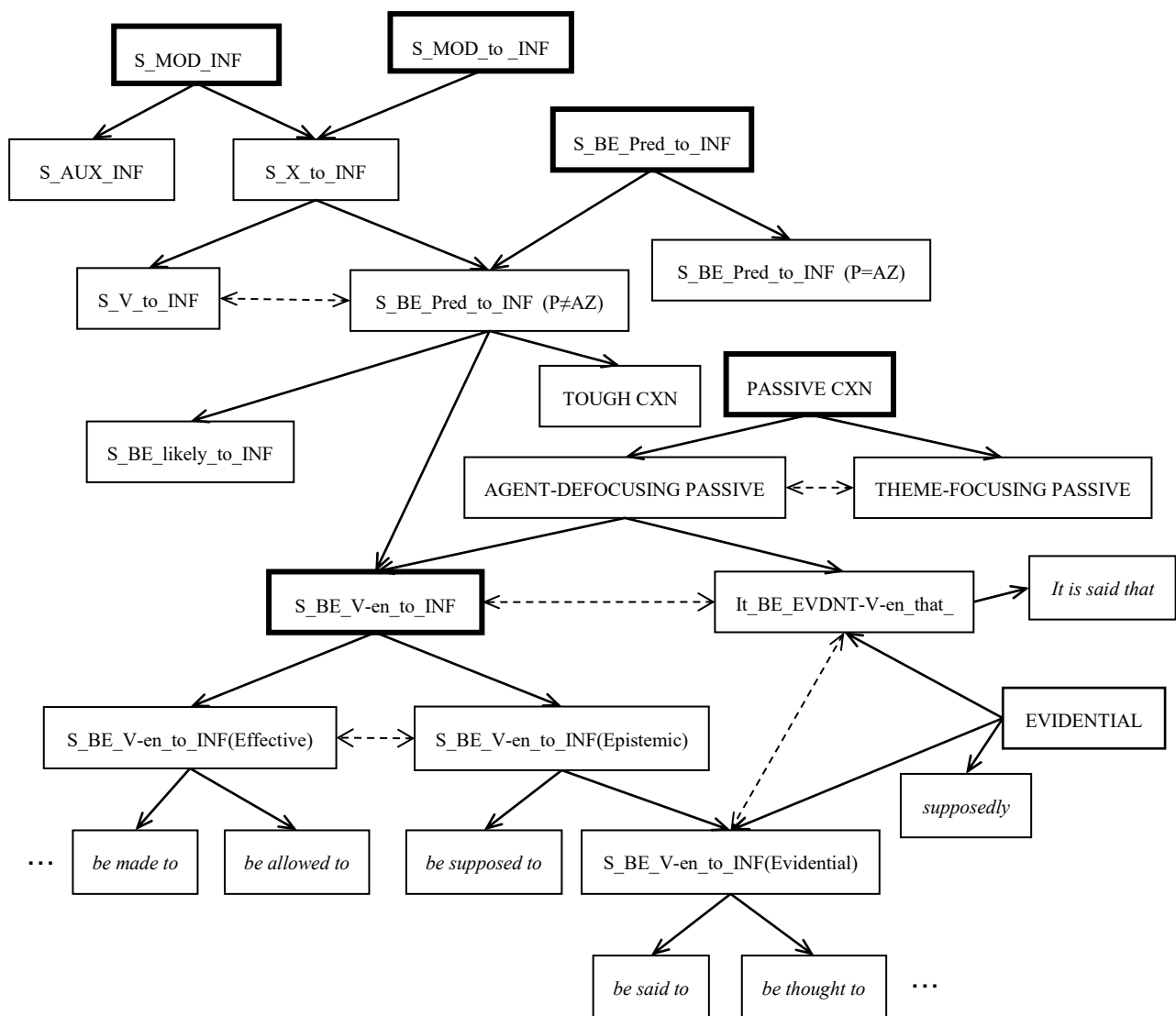


図9 BE_V-en_to_INF 構文のネットワーク

References

- Arrese, Juana Isabel Marín, Gerda Haßler, Marta Carretero (eds.) (2017) *Evidentiality Revisited*, John Benjamins.
 Breeze, Ruth (2017) Exploring evidential uses of the passive of reporting verbs through corpus analysis, in Arrese

et al. (eds.), 297-313.

- Diessel, Holger (2023) *The Constructicon*, Cambridge University Press.
- Dixon, R. M. W. (2005) *A Semantic Approach to English Grammar (2nd)*, Oxford University Press.
- 江川泰一郎(1991)『英文法解説』(改定三版), 金子書房.
- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions*, University of Chicago Press.
- Goldberg, Adele E. (2006) *Constructions at Work*, Oxford University Press.
- Halliday, M. A. K. (1994) *An Introduction to Functional Grammar (2nd)*, Edward Arnold.
- 原口庄輔・中村捷(編) (1992)『チョムスキー理論辞典』研究社.
- Hilpert, Martin (2019) *Construction Grammar and its Application to English (2nd)*, Edinburgh University Press.
- Hopper, Paul and Traugott, Elizabeth (2003) *Grammaticalization (2nd)*, Cambridge University Press.
- Huddleston, Rodney and Pullum, Geoffrey K. (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge University Press.
- 福田航平・伊藤一輝 (2025)「DEONTIC NIC 構文—[BE V-en to V_{inf}]の形式における束縛的モダリティ—」『日本認知言語学会論文集』25, 88-100.
- Langacker, Ronald W. (1990) *Concept, Image and Symbol*, Mouton du Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (1999) *Grammar and Conceptualization*, Mouton du Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (2014) Modals: Striving for control, In *English Modality*, Arrese, Juana Isabel Marín, et al. (eds.), Mouton du Gruyter, 3-55.
- Langacker, Ronald W. (2017) Evidentiality in Cognitive Grammar, in Arrese et al. (eds.), 13-55.
- 前田満 (2025)『構文発達のダイナミズム』開拓社.
- Muraoka, Soichiro (2022) Some Restrictions on the Choice of Infinitival Complements for the Passive Voice of Perception Verbs SEE and HEAR, 『英文学論叢』70 (日本大学英文学会), 45-64.
- 村岡宗一郎 (2023)「使役動詞の能動態と受動態に後続する不定詞補文の分布について」『英語語法文法研究』30, 162-176.
- Noël, Dirk (2001) The Passive matrices of English infinitival complement clauses evidentials on the road to auxiliarihood?, *Studies in Languages*, 25 (2), 255-296.
- Noël, Dirk (2017) Radically usage-based diachronic construction grammar and the development of non-deontic be bound to, *Lingua*, 199, 72-93.
- Noël, Dirk (2019) The decline of the Deontic NCI construction in Late Modern English: Towards a radically usage-based perspective on constructional attrition, *Cognitive Linguistic Studies*, 6(1), 22-57.
- Palmer, F.R. (1988) *The English Verb (2ed)*, Longman.
- Quirk Randolph, Geoffrey Leech, Sidney Greenbaum, Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman.
- Shibatani, Masayoshi (1985) Passives and its related constructions, *Language*, 61 (4), 821-848.
- Traugott, Elizabeth Closs and Graeme Trousdale (2013) *Constructionalization and Constructional Changes*, Oxford University Press.
- 綿貫陽・淀縄光洋・Petersen, Mark (1994)『教師のためのロイヤル英文法』旺文社.
- 家口美智子 (2024)「準助動詞の文法化の過程における主語の発達について」『英語語法文法研究』第31号, 39-55.

柴崎礼士郎（明治大学）
reijiro@meiji.ac.jp

1. はじめに

本発表では、以下の(1)に見られる語用論標識（pragmatic marker）の連鎖を考察する。分析対象のデータは現代アメリカ英語である（第3節を参照）。語用論標識の一つである *the fact is (that)* に注目し、その前に生起する他の語用論標識との連鎖を分析することで、一定の連鎖のパターンが確認できることを例証する。以下、*the fact is (that)* を太字で示し、その他の語用論標識には下線を施してある。紙幅の都合で、説明上必要な場合を除き原文の日本語訳は省略する。語用論標識の定義は、関連用語と合わせて第3節で明示する。

- (1) Mr. HOKE: I mean, what's amazing is, you know, **the fact is that** Congresswoman Oakar has been a tremendous champion of mammography for women and she...

(1992 *ABC_Brinkley*; SPOK, COCA)

2. 研究の背景

語用論標識の多くは副詞表現と重なるため関連研究は少ない（e.g. Greenbaum 1969; 岡田 1985; 三浦 1991; Shibasaki in press）。談話標識（discourse marker）研究も盛んであり（内田 2009; 松尾・他 2015; Rhee et al. 2021; 小野寺 2024; 柴崎 2025）、通時的考察（e.g. Brinton and Shibasaki 2025; Higashiizumi and Shibasaki 2025）、あるいは、周辺部研究との関連考察も少ない（e.g. Beeching and Detges 2014; Van Olmen and Šinkūnienė 2021）。

語用論標識の連鎖についても先駆的研究があり（e.g. Sebba and Tate 1986）、とりわけ Koops and Lohmann (2013) 以降、断続的にはあるが研究成果が報告されている（e.g. Koops and Lohmann 2013, 2015; Shibasaki 2018; Haselow 2019; Lohmann and Koops 2022; Pinson 2025a,b）。本発表では *the fact is (that)* を軸として、それに先行する語用論標識との連鎖を考察する。

3. 研究方法

データは、(2)に示す COCA (Davies 2008-) の spoken ジャンルからのものに限定している（最終アクセスは 2025 年 2 月 21 日）。検索式は[* * * the fact is]とし、収集できたデータは各々のコンテキストで事例ごとに精査した。

- (2) COCA (= *The Corpus of Contemporary American English*) (Davies 2008-)

本発表では関連用語を以下のように定義しておく。談話標識は前後の情報を連鎖する接続機能を主とする表現であり、主情報を導入するための根拠となるコンテキストを前提としている。語用論標識は言語使用者の態度表明を示す表現であり（e.g. 肯定や断定などのスタンス機能）、必ずしも接続機能を示すものではない（Higashiizumi and Shibasaki 2025）。データ分析を進めると、*the fact is (that)* は言語使用者の態度表明機能がより強いと判断できるため、本発表ではラベルとして語用論標識を用いる。なお、語用論標識 *the fact is (that)* は、話者の見解である主情報を導入する直前に生起する機能があることから、投射詞（projector）とみなされることもある（Hopper and Thompson 2008; Shibasaki 2014）。

4. 調査結果

上述の方法で検索したところ、結果は表 1 のようになった。紙幅の都合で、使用頻度の高い上位 16 パターンのみを示し、その他のパターンは一括りにまとめている。確認できた上位 100 パターン（355 事例）のうち、*the fact is (that)* の直前に生起する語用論標識は *I mean* と *you know* が相対的に多いことが分かる。また、*the fact is (that)* にカンマ、ポーズあるいは言い直し（truncation）が先行する場合と、カンマなど（つまりポーズなど）が無く定型化していると判断できる場合もある。そこで、表 2 と表 3 に、それぞれのパターンをまとめている。表 2 は 14 パターンに分類可能で、表 3 は 10 パターンに分類できる。2 つの分類結果から、特定の語用論標識 2 つの連鎖は語法として可能ではなかと判断できる。例文を(3)から(6)に示す。

表 1: 好まれる語用論標識の連鎖 (COCA: 最終アクセス 2025 年 2 月 21 日) PM=語用論標識

順位	PM 連鎖パターン	素頻度	順位	PM 連鎖パターン	素頻度
1	. I MEAN , THE FACT IS	67	10	: I MEAN , THE FACT IS	5
2	, YOU KNOW , THE FACT IS	25	11	BUT YOU KNOW , THE FACT IS	5
3	. YOU KNOW , THE FACT IS	9	12	-- YOU KNOW , THE FACT IS	4
4	, I MEAN , THE FACT IS	8	13	. AND I THINK THE FACT IS	4
5	: YOU KNOW , THE FACT IS	8	14	ABOUT IT , BUT THE FACT IS	4
6	: (VOICEOVER) THE FACT IS	7	15	ALL DUE RESPECT , THE FACT IS	4
7	? I MEAN , THE FACT IS	7	16	DO THAT . BUT THE FACT IS	4
8	WELL , I THINK THE FACT IS	6	その他	Other 84 types (freq. 4 ~2 each)	182
9	. BUT I THINK THE FACT IS	5	合計		355

表 2: The fact is (that)の直前にカンマやポーズ (‘---’) がある連鎖

順位	PM 連鎖パターン	素頻度	順位	PM 連鎖パターン	素頻度
1	<i>I mean,</i>	92 (50.5%)	9	<i>The fact is ---</i>	2 (1.1%)
2	<i>You know, (incl. And you know [2])</i>	50 (27.5%)	10	<i>(And) the fact --</i>	2 (1.1%)
3	<i>Well,</i>	12 (6.6%)	11	<i>I don't know why,</i>	2 (1.1%)
4	<i>Ø</i>	4 (3.3%)	12	<i>But the ---</i>	2 (1.1%)
5	<i>Look, the,</i>	3 (2.2%)	13	<i>.. [silence]</i>	2 (1.1%)
6	<i>But, look,</i>	3 (2.2%)	14	<i>(And) it's ---</i>	2 (1.1%)
7	<i>which is,</i>	2 (1.1%)			
8	vocative (e.g., <i>Juan</i>)	2 (1.1%)	合計	182/355 (=51.3%)	182 (100%)

表 3: The fact is (that)の直前にカンマやポーズ (‘---’) がない連鎖

順位	PM 連鎖パターン	素頻度	順位	PM 連鎖パターン	素頻度
1	<i>But (incl. But/The/No --- But [3x2])</i>	77 (44.5%)	7	<i>But you know</i>	2 (1.2%)
2	<i>Ø</i>	52 (30.1%)	8	<i>That's a fact.</i>	2 (1.2%)
3	<i>And (incl. And --- And [3])</i>	14 (8.1%)	9	<i>That's the fact.</i>	2 (1.2%)
4	<i>But/And I think Ø-COMP</i>	13 (7.5%)	10	<i>That's (or That is) not the point.</i>	2 (1.2%)
5	<i>I think that</i>	5 (2.9%)			
6	<i>But I mean</i>	2 (1.2%)	合計	173/355 (=48.7%)	173 (100%)

(3) MR-GREGORY: It gets a laugh. Is there any grain of truth to that?

MR-AXELROD: No. I mean, **the fact is** we are going to have to tackle the fiscal problems.

(2012 *NBC_MeetPress*; SPOK, COCA)

(4) BOB EDWARDS: It's really a political statement, not a financial statement.

TOM SCULLY: No, I would say, you know, **the fact is**, if you look in any department, Congress doesn't have the staff or the people to figure out exactly what they need to do to run the Department of Transportation, ...

(1995 *NPR_Morning*; SPOK, COCA)

(5) SEN-CHUCK-HAGEL-1: Well, I don't know if we're back to square one, Bob, but **the fact is**, as we all know, diplomacy is hard work.

(2006 *CBS_FaceNation*; SPOK, COCA)

(6) STACY-LONDON# Nobody can compete with the Hollywood image. The 20-year-olds in the flyover states can't compete. That is not the point. **The fact is that** ageism has been a huge problem in Hollywood for so long.

(2015 *THE VIEW 11:01 AM EST*; SPOK, COCA)

4. 考察

4.1 より広範な語用論標識の連鎖

*The fact is (that)*を軸として語用論標識の連鎖を考察した場合、*I mean* と *you know* は共起する可能性が高いことがわかった。一方で、(3)では*I mean* の前に *no* が先行しており、(4)には*I would say* と *no* が先行している。(5)では*but* の前に *Bob* も生起しており、研究によっては呼び掛けも語用論標識の一つとみなされている (Pinson 2025a,b)。そこで、表 1 の上位 3 パターン (101 例) の生起談話を精査し、語用論標識の可能な生起順を考察する。

まず、例文(7)を検討してみる。日本語訳は現筆者の試訳である。

(7) LEMON# Is he right?

RICH# Well, yes, I mean, the fact is that -- however, I have to say, in the cases of both Bill O'Reilly and Brian Williams, neither of them really covered the war properly, the Iraq war when it was ginning up, none of them questioned the intelligence and all the stuff that was wrong, in the case of a war.

(2015 CNN Tonight; SPOK, COCA)

LEMON: 彼 (Jon Stewart) は間違っていないの？

RICH# そうだね、うん (彼は正しい)。つまり (or というか)、実際のところは -- けれども、[次のことは] 言っておかないとなんだけど、ビル・オライリーとブライアン・ウィリアムズ両氏の場合、どちらもかの戦争を厳密に取材していなかったのですよ、イラク戦争を。戦争が勃発した時、諜報活動や誤り沙汰について二人は疑問視しませんでした。戦争について言えばですが。

Rich の発話中に用いられている語用論標識機能は、以下のように判断することができる¹。なお、projector「投射詞」とは、後続談話に話者の見解を予測させる機能を有する表現である (第 3 節)。

(7') RICH#	<i>Well,</i>	<i>yes.</i>	<i>I mean,</i>	<i>the fact is that</i>	<i>-- however,</i>	<i>I have to say,</i>
	Turn initiator (Hesitation)	(Dis)agreement (to interlocutors)	Dispreferred response	Projector: that anticipates an upcoming speaker's statement	Concessive marker	Hedge that anticipates an upcoming FTA

まず、発話冒頭がインタラクション機能を有する *well* で始まり、その後、質問に対する肯定反応を示すものの (*yes*)、政治的見解を公の場で示すことへの躊躇 (*I mean*) が見て取れる。そして、*the fact is that* を用いて見解を述べるといきや、本音 (i.e. 戦争報道が適切に取材されていなかったこと) を述べるまでに、譲歩 (*however*) と垣根表現 (*I have to say*) が用いられている²。

例文(8)では、Marco Antonio Rubio 氏 (当時上院議員、現在国務長官) の目測の鋭さを話題にしているところである。先行文脈で、Rubio 氏が鋭い先読み能力を持つことをアイスホッケーのメタファーを用いて説明したのち (i.e. *where the puck is going to be*)、(8)が続いている。

(8) [Context: The speakers talk about Marco Rubio, now Secretary of State, especially about his political skills and savvy.]

NOONAN# Yes. Yes, yes, yes.

BROWNSTEIN# So, look, I mean, you know, the fact is, is that there -- you know, as I said, in all likelihood, you will have an -- you will have an outsider populist who will emerge and in the -- as it gets down to March and beyond, you will have someone more from kind of the center right establishment bracket.

(2015 CBS Face The Nation; SPOK, COCA)

¹ 以下の語用論標識の機能については、Matilde Pinson 氏との意見交換も参考にしている (個人談話 2025 年 3 月 20 日)。

² 本発表では、参照点とする *the fact is (that)* に先行する語用論標識を分析対象としている。しかし、(7)の場合、*the fact is (that)* の直後に話者の見解が導入されるわけではなく、2 つの語用論標識 *however* と *I have to say* が生起している点は注目される。

NOONAN# そう、そう、そう、そう。

BROWNSTEIN# それで、ほら、つまり、ほら、実際のところ、ほら、私が述べたように、ほとんど確実に、アウトサイダーのポピュリストが登場するでしょう。3月以降には、右派中道の側からどなたかが出てくるでしょう。

例文(8)は、今回の調査で最も多くの語用論標識が連鎖している事例であり、機能は以下のように示すことができる。

(8') BROWNSTEIN#	<i>So,</i>	<i>look,</i>	<i>I mean,</i>	<i>you know,</i>	<i>the fact is,</i>	<i>is that</i>
	Turn initiator (linked to previous discourse)	Attention-getting 1	Dispreferred response	Attention-getting 2	Projector	Double-BE (e.g. Hesitation, Intensifying)
	<i>(there) -- you know</i>	<i>as I said,</i>	<i>in all likelihood,</i>	<i>you will have an [...]</i>		
	Attention-getting 3 (reformulating the preceding info)	Reportative evidential	Epistemic booster	SPEAKER'S STATEMENT		

(7)の場合と同じく、話者のターンを開始する合図になる表現ではじまり (*so*)、注意喚起表現 (*look*) が仲介するものの、政治的見解を述べる際の躊躇が *I mean* に見て取れる。軸となる *the fact is* に後続する語用論標識も話者の見解を裏付ける表現として注目に値するが、ここでは *the fact is* のコピュラが繰り返し用いられる「二重コピュラ (double-be)」について触れておく³。二重コピュラの機能はコンテキストに応じて柔軟であるが、ここでは躊躇しているため表現を選ぶための時間稼ぎの機能もあるであろう。投射詞機能を有する点は *the fact is (that)* と共通している。

101 例のコンテキストを精査した結果、以下のよう語用論標識の連鎖が見えてきた。

表 4: *The fact is (that)* を軸とした語用論標識の連鎖の概観 (COCA spoken)

Functional sequence		Example	Types of PM
↑ Less formulaic ↓ More formulaic ↑ Less formulaic	Turn-initiator/ Linker	<i>So</i>	<i>and, well, oh, but (still), still, so, now, because</i>
	(Dis)agreement (w/t intensifiers)	<i>yes</i>	<i>that's not true, no, yes exactly, wait a second, absolutely, I agree with that, I has to, I can't believe this</i>
	Mitigator (polite, interpersonal)	<i>I would say</i>	<i>I think</i>
	Address/ Attention-getting 1	<i>Bob</i>	<i>Cliff, look, NYC</i>
	Sign of dispreferred response	<i>I mean</i>	
	Attention-getting 2	<i>you know (S-initial)</i>	
	PROJECTOR	<i>the fact is</i>	
	Double-BE/ Intake of breath	<i>is</i>	<i>now</i>
	Complementizer	<i>that</i>	
	Personal involvement/ Viewpoint expression	<i>for all of us</i>	<i>you know (S-medial), you could say, Paula</i>
	Concessive	<i>however</i>	<i>no matter how much</i>
	Epistemic booster/ Reportative evidential/ Hedge	<i>as I said</i>	<i>I have to say, I don't think, and I think, by hook or by crook</i>

軸となる *the fact is* の直前に生起する語用論標識は、表 2 と表 3 で示したように定型的な連鎖が見られた。その意味で、置き換え可能な表現がほとんど確認できなかった。一方で、ターン開始位置には接続詞を中心とした多様な表現が生起可能であり、同様の傾向は *the fact is* に後続する連鎖についても言える。第 4 節では、2 つの語用

³ 同現象には複数の用語が当てられている。事例研究に基づく詳細は柴崎 (2015) で示されている。

論標識の連鎖が確認できたが、さらに先行する語用論標識との連鎖も今後検討に値すると思われる (cf. Heine 2023: 346–347)。

4.2 節を越えた構文 (化) の可能性について

管見では、構文文法の可能性を最も広く解釈した研究の 1 つは Diessel (2019) である⁴。以下の表に示す。

表 5: 文法ネットワークの種類の概観 (Diessel 2019: 22)

Signal as networks	
Symbolic relations	Associations between form and meaning
Sequential relations	Associations between linguistic elements in sequence
Taxonomic relations	Associations between representations at different levels of specificity
Network of signs	
Lexical relations	Associations between lexemes
Constructional relations	Associations between constructions
Filler-slot relations	Associations between particular items and slots of constructions

ここで注目するのは sequential relations であり、その点について Diessel (2019: 15) は統語的境界を越えて連続生起する表現に言及している。例として高頻度で生起するチャンク (chunk) やプレハブ表現 (prefab) を指摘して、Bybee and Scheibman (1999) が分析している *I don't know* を挙げている。統語的な境界を越えた連続生起という意味で、本稿で取り扱う語用論標識も考察対象になりうると思える⁵。Diessel (2019) は以下のスキーマを提示して表現の連鎖を示している。

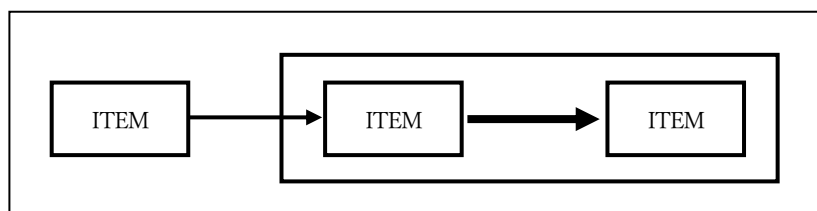


図 1: 連鎖の関連性 (sequential associations) (Diessel 2019: 15)

図 1 は連続生起する表現がチャンク化することを示している⁶。Bybee and Scheibman (1999) の事例で考えると、*don't* と *know* は高頻度で生起するチャンクであり、その影響もあり音韻縮小も確認されている。そこへ、統語的には動詞句の外に位置する主語が言語的境界を飛び越えてチャンク化を果たしている。最も共起率の高い *I* がチャンクの一部として認識され、*I don't know* の *I* も音韻縮小を被っている。

第 4.1 節までは、*the fact is (that)* を軸として、それに先行する表現との連鎖を機能面から考察した。一方で、Diessel (2019) や Altmann and Kamide (1999) の提案するように、言語の線状性に注目して、ターン開始部分から後続する語用論標識との関係を 1 つずつ考察する必要性もある。つまり、*I mean* が使われることで *the fact is (that)* (あるいは言い換え表現である *the thing is, the point is, etc.*) が予測できる可能性である。以下に繰り返す(3)であれば *no* > *I mean* > *the fact is* の連鎖の予測可能性、(4)であれば *no* > *I would say* > *you know* > *the fact is* の連鎖の予測可能性である。

(3) MR-AXELROD: No. I mean, **the fact is** we are going to have to tackle the fiscal problems.

(2012 *NBC_MeetPress*; SPOK, COCA)

⁴ Trousdale (2025) も同様の見解を示している。

⁵ Diessel (2019) は同書 5 章で考察を掘り下げると述べているが、本発表で提示するような談話レベルでの連鎖は扱われていない。

⁶ 特定の表現が後続する表現を予期させる点について、Altmann and Kimide (1999) の研究が Diessel (2019: 15) で言及されている。

- (4) TOM SCULLY: No, I would say, you know, **the fact is**, if you look in any department, Congress doesn't have the staff or the people to figure out exactly what they need to do to run the Department of Transportation, ...
(1995 NPR_Morning; SPOK, COCA)

試みに *no* の次に生起する表現を COCA で検索すると (search string: NO * * * *), *No. I mean* (192 例) と *No, I mean* (105 例) が確認でき、数ある生起表現中第7位の連鎖であることがわかる。同じく *I mean* の次に生起する表現を検索すると (search string: I mean * * * *), *you know* が群を抜いて最も多く共起する表現であることがわかる。また、*I mean* に後続する表現を定冠詞付きの要素 (search string: I mean, the * is) に限定すると、*fact, reality, question, problem, truth, etc.* などの類似表現が上位を占めていることも確認できる。決して強い傾向ではないものの、近い傾向が *you know* の後続表現についても言えそうである (search string: you know, the *)。

今後の継続調査に依存する部分は大きいものの、以下のような連鎖関係が見えてきそうである。つまり、図2に例示するようなコミュニケーション効果のある機能連鎖は一つの定型性を担っており、各機能スロットに連鎖性の強い表現が用いられる (連想される) ことで、全体が語法・構文機能を果たしていると見做すこともできる (渡辺・柴崎 (編) 2023 も参照)。PM=pragmatic marker。

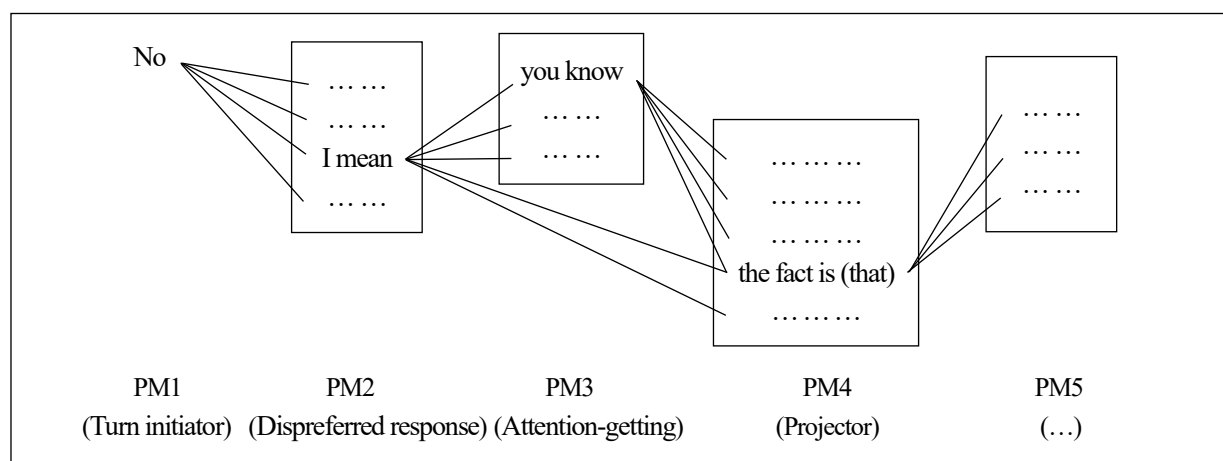


図2: *The fact is (that)*を含む語用論標識の連鎖の可能性

4.3 構文の横軸について

前田 (2025: 47-49) が指摘しているように、構文文法研究では横軸 (horizontal links, sister nodes) はあまり研究が進んでいない。しかし、前節までに論じた語用論標識の連鎖を考えると、横軸の関係を深く考察する価値はあると思える。前田 (2025: 48) も「横軸のリンクには、形式は異なるが同じ機能を共有する複数の構文を結合する働きがある」と考える」との見解を提示している。そして、「構文間に横軸のリンクが生まれるためには、両者の間にある程度の意味的重複 (semantic overlap) が必要となる」と指摘している (48 頁)。表4にまとめたように、ある機能に対する表現は複数認められ、軸となる表現に対して確認可能な連鎖を示している。この点を鑑みると、語用論標識の連鎖は上述の量的考察から (ある程度) 支持できるだけではなく、理論的にも貢献できる可能性があると言えそうである。

他方で、Sommerer and Van de Velde (2025: 237-238) が指摘するように、縦軸 (taxonomic links) と横軸の必要性には議論の余地が残されている。例えば、縦軸を用いて極度に抽象化をする必要はないとする研究者もあり、場合によっては中間レベルで要素間の関連性を読み取ることも可能である (e.g. *my life, his wife, its way, etc.*などを極度に抽象化せずとも *our country* などは導き出せる)。

5. 結論と今後の課題

本発表では、現代アメリカ英語の事例を分析して以下の点を確認した。

- (9) a. 語用論標識は連鎖する場合があります、それらの生起順には一定の傾向が確認できる。
- b. 一部の語用論標識は使用頻度の面で連鎖と見做せるものもあり、談話レベルでの構文 (化) と判断できる

可能性がある。

- c. 語用論標識の連鎖は研究途上にあり、今後も様々な視点から考察が可能である。

今後の課題として通時的考察の必要性が挙げられる。また、語学教育への応用も検討可能である。

謝辞

本発表は科研費基盤研究 (C) (課題番号: 22K00610) の補助を一部受けている。準備の段階で Matilde Pinson 氏から貴重なコメントをいただきました。御礼申し述べます。

参考文献

- Altmann, Gerry T. M. and Yuki Kamide. 1999. Increment interpretation at verbs: Restricting the domain of subsequent reference. *Cognition* 73, 247–264.
- Beeching, Kate and Ulrich Detges (eds.) 2014. *Discourse Functions at the Left and Right Periphery: Crosslinguistic investigations of language use and language change*. Leiden: Brill.
- Brinton, Laurel J. and Reijirou Shibasaki. 2025. “No matter what, you must think positive”: The development of *no matter (what)* as a pragmatic marker. *Studies in Modern English* 41, 1–30.
- Bybee, Joan & Joanne Scheibman. 1999. The effects of usage on degree of constituency: The reduction of *don't* in English. *Linguistics* 37, 575–596.
- Diessel, Holger. 2019. *The Grammar Network: How linguistic structure is shaped by language use*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Greenbaum, Sidney. 1969. *Studies in English Adverbial Usage*. London: Longman.
- Haselow, Alexander. 2019. Discourse marker sequences: Insights into the serial order of communicative tasks in real-time turn production. *Journal of Pragmatics* 146, 1–18.
- Heine, Bernd. 2023. *The Grammar of Interactives*. Oxford: Oxford University Press.
- Higashiizumi, Yuko and Reijirou Shibasaki (eds.) 2025. *The Emergence of Pragmatic Markers from Chinese Compounds in Chinese, Japanese and Korean*. Leiden: Brill.
- Hopper, Paul J. and Sandra A. Thompson. 2008. Projectability and clause combining in interaction. In Ritva Laury (ed.), *Crosslinguistic studies of clause combining*, 99–123. Amsterdam: John Benjamins.
- Koops, Christian and Arne Lohmann. 2013. Discourse marker sequencing and grammaticalization. *Berkeley Linguistics Society* 39, 108–122. <http://dx.doi.org/10.3765/bls.v39i1.3873>
- Koops, Christian and Arne Lohmann. 2015. A quantitative approach to the grammaticalization of discourse markers: Evidence from their sequencing behavior. *International Journal of Corpus Linguistics* 20, 232–259.
- Lohmann, Arne and Christian Koops. 2022. Pragmatic marker combinations: Introduction. *Journal of Pragmatics* 196, 1–5.
- 前田満 2025. 『構文発達のダイナミズム—構文化と構文変化』東京：開拓社.
- 三浦敏明 1991. 『英語副詞の研究』東京：文化書房博文社.
- 岡田伸夫 1985. 『副詞と挿入文』東京：大修館書店.
- 小野寺典子 2024. 『談話標識へのアプローチ—研究分野・方法論・分析例』東京：ひつじ書房.
- Pinson, Matilde. 2025a. Left-peripheral *bottom line* sequences. *Folia Linguistica*; aop.
- Pinson, Matilde. 2025b. [N is] focalizing sequences in the initial field: Pragmatics and ordering preferences. Paper given at *ISEL8*, Santiago de Compostela, Sept 1–4, 2025.
- Rhee, Seongha, Reijirou Shibasaki and Xinren Chen (eds.). 2021. Grammaticalization of Discourse Markers in East Asian Languages. Special Issue of *East Asian Pragmatics* 6 (3).
- Sebba, Mark and Shirley Tate. 1986. YOU KNOW WHAT I MEAN? Agreement Marking in British Black English. *Journal of Pragmatics* 10, 163–172.
- Shibasaki, Reijirou. 2014. On the grammaticalization of *the thing is* and related issues in the history of American English. In Michael Adams, Robert D. Fulk and Laurel J. Brinton (eds.), *Studies in the History of the English Language VI*, 99–122. De Gruyter Mouton.
- 柴崎礼士郎 2015. 「現代アメリカ英語の二重コピュラ構文」秋元実治・青木博史・前田満 (編) 『日英語の文法化

と構文化』, 147–180. 東京：ひつじ書房.

Shibasaki, Reijirou. 2018. Sequentiality and the emergence of new constructions: *That's the bottom line is (that)* in American English. In Hubert Cuyckens, Hendrik De Smet, Leisbet Heyvaert and Charlotte Maekelberghe (eds.), *Explorations in English Historical Syntax*, 283–306. Amsterdam: John Benjamins.

柴崎礼士郎 2025. 「書評」 小野寺典子（著）『談話標識へのアプローチ—研究分野・方法論・分析例』『語用論研究』第26号, 112–126.

Shibasaki, Reijirou. in press. From adverb to verb: The making of the fictitious verb *wis* and related issues. In S. Whittle, C. Wallis, C. Wong and S. Fitzmaurice (eds.), *Interacting Forces in English Historical Linguistics* (tentative title). Amsterdam: John Benjamins.

Sommerer, Lotte & Freek Van de Velde. 2025. Chapter 9: Constructional networks. In Mirjam Fried & Kiki Nikiforidou (eds.), *The Cambridge handbook of Construction Grammar*, 220–246. Cambridge: Cambridge UP.

Trousdale, Graeme. 2025. The surprising English language. Plenary lecture at the 8th Conference of the International Society for the Linguistics of English (ISLE8), Santiago de Compostela, Spain, Sept. 4, 2025.

Van Olmen, Daniël and Jolanta Šinkūnienė (eds.) 2021. *Pragmatic Markers and Peripheries*. Amsterdam: John Benjamins.

渡辺拓人・柴崎礼士郎（編）2023. 『英語史における定型表現と定型性』東京：開拓社.

コーパス・辞書・辞典

Davies, Mark. 2008-. *The Corpus of Contemporary American English* (COCA). Available online at <https://www.english-corpora.org/coca/> [last access: Feb 21, 2025]

松尾文子・廣瀬浩三・西川眞由美 2015. 『英語談話標識用法辞典—43の基本ディスコース・マーカ—』東京：研究社.

内田聖二〔編〕2009. 『英語談話表現辞典』東京：三省堂.

1. はじめに

- 英語の数・量推移構文は、(1)のような自動詞文、他動詞文に加え、(2)のような、分詞による修飾表現＋名詞の構造がよく見かけられる。特に対応する日本語と比較するとその特徴が際立つ。
- 増減・繰り返し・継続表現といった数・量推移構文はこのような日英語の表現パターンの違いを見せる。(3)は(2)の具体事例。

(1) a. NP + increase・increase + NP

b. NP + repeat・repeat + NP

c. NP + continue・continue + NP

(2) a. increase-ed/ing + NP・decrease-ed/ing + NP

「NPが増加する・減少する」、「NPを増やす・減らす」

b. repeat-ed/ing + NP 「NPが繰り返される」、「NPを繰り返す」

c. continue-ed/ing + NP 「NPが続く」、「NPを続ける」

(3) a. Increased control mechanisms won't solve that problem.

b. 規制の仕組みを増やしたとしても問題解決には至りません

(TCSE, Samantha Nutt: The real harm of the global arms trade／サマンサ・ナット：
武器貿易がもたらす真の害とは何か、下線は筆者)

- 日本語では、主語＋述語、主語＋目的語＋述語のようなコト的な表現に、英語では対応する部分が分詞による修飾表現＋名詞のモノ的な表現となっており、同じ状況に対する選択構文が異なる傾向。
- 本発表では(2)のような構造のタイプを分析対象とし、英語の増減・繰り返し・継続を表す構文の特性や談話機能を日本語の志向パターンと比較しながら考察する。
- 本発表では、構文は、談話の一部を構成する単位であり、談話との連続性を念頭にした枠組みで捉える必要があるため、構文を形式、意味、談話機能から成るものとする（cf. Goldberg 2006: 5）。
- さらに、個別言語の表現形式に反映される志向も構文の意味に含まれることを主張し、日英語の数・量推移構文の特性を、あらゆる構文を談話処理のパターンとしてみなす The Access-and-Activation Model (Langacker 2012, 2016, etc.) を援用して分析する。

2. 英語の数・量推移構文の談話機能

- 英語の数・量推移構文の形式的特徴である、分詞による修飾表現＋名詞のモノ的な表現の談話機能

* 本研究の一部は JSPS 科研費 JP20K00668 の助成を受けたものである。

を *Longman grammar of spoken and written English* (LGSWE) および *The Corpus of Contemporary American English* (COCA) に基づき考察する。

Longman Grammar of Spoken and Written English (LGSWE)

- Single pronouns abound in the conversation text, while longer and more complex structures are predominant in the written registers (LGSWE: 231).
- Overall, noun phrases with a modifier are relatively rare in conversation (LGSWE: 578)
- Overall, noun phrases with premodifiers are three to four times more common in expository written registers than in conversation (LGSWE: 589).
- Apparently the great need for brevity in news favors this kind of premodification, even at the cost of less explicitness (LGSWE: 589).
- The use of multiple premodifiers is certainly very efficient, packing dense informational content into as few words as possible (when compared with the use of postmodifiers or separate clauses) (LGSWE: 597).

⇒

- ・修飾要素＋名詞のような長めで複雑な構造の名詞句は会話より、書き言葉で好まれる。
- ・修飾要素＋名詞のような構造はニュースの簡潔性を求めることから好まれる。
- ・(複数の) 修飾要素＋名詞のような構造は情報量の多い内容をできるだけ少ない語に圧縮する効果的な方法。

COCA (Corpus of Contemporary American English)での使用ジャンル

増減表現

- ・ increased [n*]で検索

18274 件中 : academic: 7363; magazine: 2851; web: 2610; news: 2109; blog: 1966; spoken: 1101; TV/M: 143; fiction: 131

increased risk: 3080; increased use: 641; increased demand: 555

- ・ increasing [n*]で検索

14139 件中 : academic: 5402; magazine: 2123; web: 1997; news: 1837; blog: 1709; spoken: 776; fiction: 209; TV/M: 86

increasing number: 2246; increasing numbers: 1119; increasing pressure: 466

- ・ decreased [n*]で検索

1542 件中 : academic: 778; magazine: 245; web: 221; blog: 145; TV/M: 62; news: 55; spoken: 29; fiction: 7

decreased risk: 135; decreased levels: 74; decreased blood: 46

- ・ decreasing [n*]で検索

976 件中 : academic: 491; magazine: 124; web: 122; blog: 117; news: 63; spoken: 34; fiction: 16;

TV/M: 9

decreasing number: 63; decreasing trend: 56; decreasing order: 44

繰り返し表現

- ・ repeated [n*]で検索

5249 件中 : academic: 2237; news: 759; magazine: 657; web: 624; blog: 414; spoken: 349; fiction: 152; TV/M: 57
repeated measures: 721; repeated requests: 385; repeated reading: 331

• repeating [n*]で検索

720 件中 : magazine: 162; web: 121; academic: 114; fiction: 112; blog: 97; TV/M: 42; news: 38; spoken: 34
repeating pattern: 64; repeating things: 46; repeating words: 38; repeating patterns: 38

継続表現

• continued [n*]で検索

6876 件中 : academic: 2287; web: 1022; news: 921; blog: 919; magazine: 822; spoken: 503; fiction: 298;
TV/M: 104

continued existence: 484; continued support: 429; continued growth: 387

• continuing [n*]で検索

6099 件中 : academic: 1781; spoken: 1087; news: 932; web: 706; magazine: 683; blog: 562; TV/M: 177;
fiction: 171

continuing education: 1087; continuing resolution: 346; continuing coverage: 236

⇒

- 基本的にアカデミックな書き言葉で多用され、口語では使用頻度が少ない。LGSWE と類似の結果。
- 比較的過去分詞＋名詞の構造での使用が多い。

数・量推移構文の談話機能

- 談話上で起こり得る事態の情報を圧縮し、談話をスリム化する機能→情報の圧縮 (cf. 村尾 (2025a))
- 英語の数・量推移構文の分詞＋名詞という形式はこの談話機能だけから求められるものか。

3. 日本語の数・量推移構文との比較

- 日英語の表現形式の違いは状況内の視点と状況外の視点による主観性に関わる事態認知の違いから分析される傾向 (吉川 (1995)、安西 (2000 [1983])、本多 (2005)、池上 (2011)、野村 (2014)、中村 (2019)、など)。
- 日英語の表現パターンの違いの中で、コト志向 (叙述) とモノ志向 (名詞) の対立もよく指摘され (池上 (1981)、吉川 (1995)、野村 (2014) など)、日英語の数・量推移構文の対立もこのパターンに含まれる (村尾 2023a)。

TED Corpus Search Engine (TCSE) による日英語の数・量推移構文の使用傾向

3.1. 増減表現

increase

121 件中

I 日 : 叙述的 英 : 叙述的 82 件

- 元々数量・推移表現はプロセスを表すため、動詞として叙述的に記号化されるのが基本。

(4) a. During that period, while the fetal brain is developing, we know that exposure to certain agents can

actually increase the risk of autism.

- b. 胎児の脳が発達するこの期間に 特定の作用因子にさらされることが 自閉症のリスクを増す ことが 分かっています

(TCSE, Wendy Chung: Autism — what we know (and what we don't know yet)／ウェンディ・チャン: 自閉症—分かっていること (と、まだ分かっていないこと)、下線は筆者)

II 日：叙述的 英：名詞 16 件 (increase など、増減表現をそのまま名詞化したもの 2 件含む)

- 典型的な日本語と英語の志向パターンの違いを反映。

(5) a. Alcohol may also slow down stomach emptying, which could lead to increased production of gastric acid.

- b. さらに アルコールによって 胃排出が遅くなり 胃酸の分泌を増加させる 可能性があります

(TCSE, Judy Grisel: How does alcohol cause hangovers?／ジュディス・グリゼル: お酒を飲むと二日酔いになるしくみは?、下線は筆者)

III 日：名詞 英：名詞 14 件

- 日本語でたとえ名詞句になっていたとしても数量の変化を表す名詞が主要部で、英語のように数量の変化対象ではない。「増加」など、叙述構造のまま名詞化した語彙の使用が目立つ。

(6) a. It has allowed increases in oil and gas exploration and extraction, the potential for commercial shipping, as well as increased tourism.

- b. 石油やガスの探査や採掘の増加や 貨物の輸送経路としての可能性の拡大 観光産業の増加をも 招いています

(TCSE, Kate Stafford: How human noise affects ocean habitats／ケイト・スタッフォード: 人間由来の水中騒音がいかに海の世界を脅かしているか、下線は筆者)

IV 日：名詞 英：叙述的 9 件

- 典型的な日英語の志向パターンと逆であるが、日本語はほとんどが叙述構造のまま名詞化した「増加」などの「増～」という語彙の使用が目立ち、叙述的構造を反映した名詞化となっている。

(7) a. As the crisis wore on, the government limited who was eligible for relief and tasked Ireland with funding the relief efforts themselves by increasing local taxes.

- b. 危機が深刻化するにつれ 政府は救済の対象者を制限し 地方税の増額による 救援活動への資金提供を アイルランドに課しました

(TCSE, Stephanie Honchell Smith: What really caused the Irish Potato Famine／ステファニー・ホンチェル・スミス: アイルランドのジャガイモ飢饉が起きた本当の理由、下線は筆者)

decrease

121 件中

I 日：叙述的 英：叙述的 111 件

- 元々数量・推移表現はプロセスを表すため、動詞として叙述的に記号化されるのが基本。

(8) a. If you increase variety of perspective, you might actually decrease shared reality.

b. 「視点の多様性」を上げることで「事実の共有度」が下がる かもしれません
(TCSE, Jack Dorsey: How Twitter needs to change/ジャック・ドーシー: ツイッターが必要としている変革、下線は筆者)

II 日: 叙述的 英: 名詞 2 件

➤ 典型的な日本語と英語の志向パターンの違いを反映。

(9) a. Now, to be fair, self-driving cars are predicted to dramatically reduce traffic accidents and fatalities by removing human error from the driving equation. Plus, there may be all sorts of other benefits: eased road congestion, decreased harmful emissions, and minimized unproductive and stressful driving time.

b. 公平を期して言うと 自動運転車は運転から 人的なミスを取り除くことで 交通事故や死者の数を 劇的に減らすと 予想されており その他にも様々な 利点があります 道路の混雑を緩和し 有害ガス排出量を減らし 非生産的でストレスのある運転を 人間がする時間を最小限にできます

(TCSE, Patrick Lin: The ethical dilemma of self-driving cars/パトリック・リン: 自動運転車の倫理的ジレンマ、下線は筆者)

III 日: 名詞 英: 名詞 5 件

➤ 日本語でたとえ名詞句になっていたとしても数量の変化を表す名詞が主要部で、英語のように数量の変化対象ではない。「減少」、「低下」という叙述構造のまま名詞化した語彙の使用目立つ。

(10) a. Your difficulty breathing and poor-quality rest may also lead to headaches, decreased concentration, and chronic fatigue.

b. また呼吸困難や質の悪い睡眠は 頭痛や 集中力の低下 慢性疲労の原因にもなります

(TCSE, Alayna Vaughan: Why do some people snore so loudly?/アレイナ・ボーン: なぜ大音量でいびきをかくのか?、下線は筆者)

IV 日: 名詞 英: 叙述的 3 件

➤ 典型的な日英語の志向パターンと逆であるが、日本語は全て「低下」、「削減」という叙述構造のまま名詞化した語彙の使用が目立ち、叙述的構造を反映した名詞化となっている。

(11) a. And this improved flexibility likely decreases the chance of incurring certain muscle injuries.

b. そして この柔軟性の向上により 特定の筋肉が損傷するリスクの低下が 期待されます

(TCSE, Malachy McHugh: How stretching actually changes your muscles/マラキー・マクヒュー: ストレッチは実際どのように筋肉に変化を及ぼすのか、下線は筆者)

3.2. 繰り返し表現

repeat

151 件中

I 日: 叙述的 英: 叙述的 123 件

➤ 元々数量・推移表現はプロセスを表すため、動詞として叙述的に記号化されるのが基本。

(12) a. And whatever they were doing just before they got the reward, they repeat that particular pattern.

b. 報酬を受け取った直前の行動が何であっても その行動パターンを繰り返すのです

(TCSE, Michael Shermer: The pattern behind self-deception／マイケル・シャーマー:「自己欺瞞の背後にあるパターン」、下線は筆者)

II 日：叙述的 英：名詞 11 件

➤ 典型的な日本語と英語の志向パターンの違いを反映。

(13) a. Similar to the diver and the vaulter, it is only through repeated practice that the maneuver can be learned and executed to the highest standard.

b. 飛び込みや 跳馬の選手と 同じように 練習を繰り返し 動きを身に付ける ことによつてのみ このような動きは 実現できるので

(TCSE, Raffaello D'Andrea: The astounding athletic power of quadcopters／ラファエロ・ダンドリーア: クアッドコプターの驚くべき運動能力、下線は筆者)

III 日：名詞 英：名詞 13 件

➤ 「繰り返し～する NP」の「繰り返し」のような副詞修飾構造をして、叙述的構造をより反映した名詞句や、動詞を名詞化した「繰り返し」の使用による叙述的構造を反映した形が目立つ。

(14) a. . . this complicated network is just made of a handful of simple, repeating interaction patterns like motifs in a stained glass window.

b. この複雑なネットワークは いくつかの簡単な 繰り返し現れる相互作用パターンだけで できているのです ステンドグラスのモチーフの ようなものです

(TCSE, Uri Alon: Why science demands a leap into the unknown／ウーリ・アロン: 真の革新的科学のために、未知の領域へ飛び込むことが不可欠な理由、下線は筆者)

IV 日：名詞 英：叙述的 4 件

➤ 典型的な日英語の志向パターンと逆であるが、日本語は叙述的な構造のものをそのまま名詞化した例が目立つ。

(15) a. Your brain builds connections that link the reward with the behavior, driving you to repeat it.

b. 脳は 行動と報酬を結びつけるように 神経回路を形成し 行動の繰り返しを誘導します

(TCSE, TED-Ed: Why is it so hard to break a bad habit?／TED-ED: 悪い習慣をやめるのはなぜ難しいのでしょうか?、下線は筆者)

3.3. 継続表現

continue

102 件中

I 日：叙述的 英：叙述的 97 件

➤ 元々数量・推移表現はプロセスを表すため、動詞として叙述的に記号化されるのが基本。

(16) a. Now, as we continue to tinker with the oceans, more and more reports are predicting that the kinds of

seas that we're creating will be conducive to low-energy type of animals, like jellyfish and bacteria.

- b. 海に手を加え続けることで クラゲやバクテリアのような低エネルギー生物が支配する海が作られると予想するレポートが増えています

(TCSE, Tierney Thys: Swim with the giant sunfish／ティアニー・ティス：巨大マンボウと過ごすとき、下線は筆者)

II 日：叙述的 英：名詞 3件

- 典型的な日本語と英語の志向パターンの違いを反映。

(17) a. Limiting human activity along migratory routes and in other critical habitats, and reducing noise pollution throughout the ocean would help ensure whales continued survival.

- b. 回遊ルートや重要な生息地で 人間の活動を制限し 海全体で騒音公害を減らすことは クジラが生き続ける一助となるでしょう

(TCSE, Stephanie Sardelis: Why do whales sing?／ステファニー・サーデルリス：なぜクジラは歌うのか？、下線は筆者)

III 日：名詞 英：名詞 2件

- 日本語は「継続的な」のような形容詞的になっていて、修飾要素のプロセス性が低く、プロセス性の高い修飾要素＋名詞構造を取りやすい英語とは異なっている。

(18) a. Clinicians best deliver quality equitable care when they have continuing education about how to best support lactation and breastfeeding.

- b. 臨床医が最も適切なケアを 誰にでも提供できるようにするには 母乳栄養と授乳に関する最善の支援策について 継続的な教育を受けることが必要です

(TCSE, Katie Hinde: What we don't know about mother's milk／ケイティ・ハインド：私たちが母乳についてまだ知らないこと、下線は筆者)

IV 日：名詞 英：叙述的 0件

- 英語の数・量推移構文に対応する日本語と比較した上で考えると、
- ・(2)の構造の英語の数・量推移構文は完結にまとめた情報を一度に示せるため、書き言葉で使用しやすく学術的な場で多用されると思われる（談話機能）。
 - ・日本語の数・量推移構文の志向パターンを踏まえると、日本語の当該構文は必ずしも英語のように情報圧縮について談話からの強い要請が認められるわけではない。
 - ・英語の数・量推移構文の情報圧縮の形式は英語の名詞志向からも影響を受けている（個別言語固有の特性）と考えられる。

⇒談話機能＋個別言語固有の特性を構文の意味として認める必要がある。

4. The Access-and-Activation Model による日英比較

- The Access-and-Activation Model (Langacker (2012), (2016), etc.)を用いて、言語表現の背後にある「概

念基盤 (conceptual substrate)」内の「処理枠 (processing window)」の違いから日英語の違いを説明 (村尾 (2023b, c), (2024), (2025a, b))。

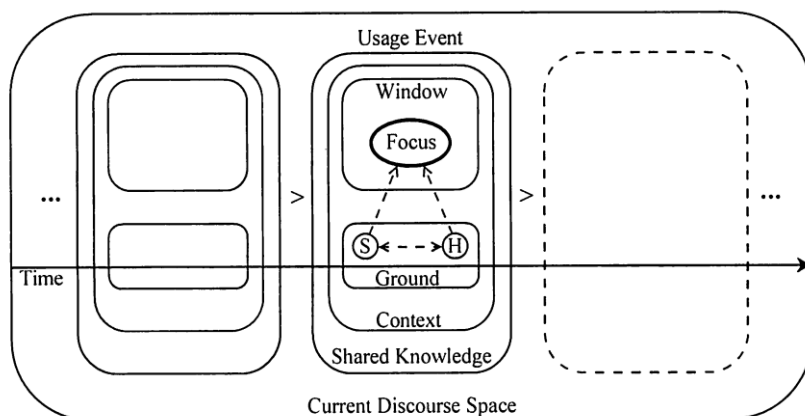


図 1 : 概念基盤 (Langacker 2012: 96)

言語の意味は「概念基盤」に支えられている (Langacker (2008), (2012), (2016))。

- In CG, grammar and discourse form a continuum of symbolic assemblies, involving structures of different sizes appearing in processing windows of different duration. (Langacker 2016: 37)

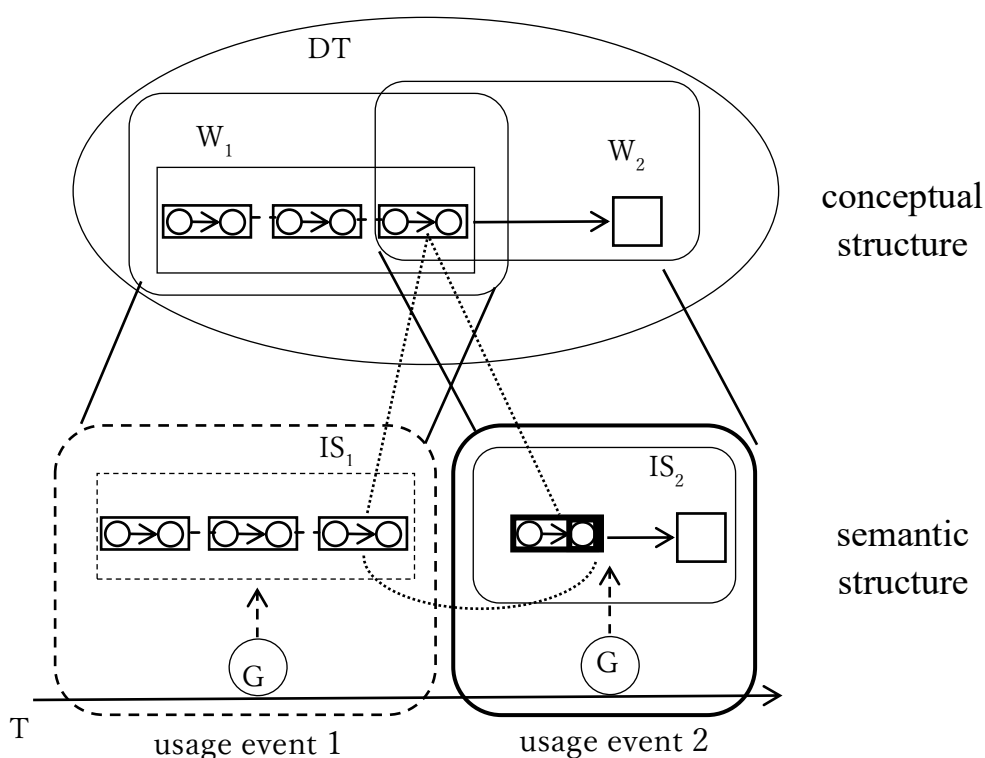


図 2 : 英語の scope of awareness ((13a)... repeated practice...)

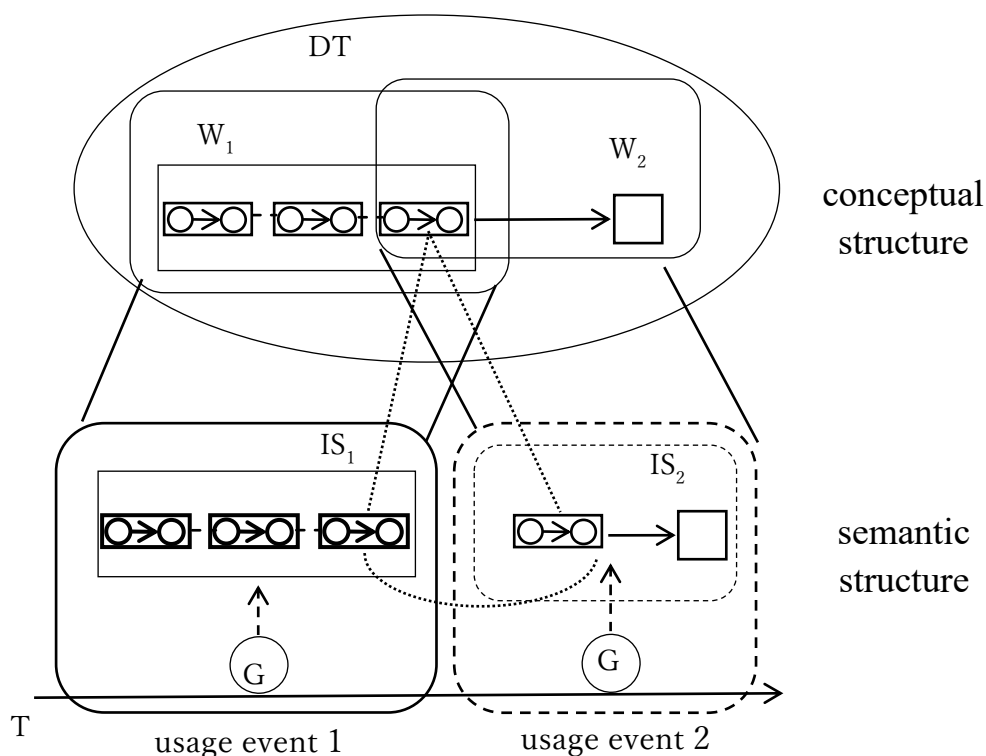


図 3：日本語の scope of awareness ((13b)... 練習を繰り返し...)

- DT (Descriptive Target) 内の情報に部分的に順次アクセスし、処理枠 (processing window: W) の内容を言語処理する過程で構造ができる。
- 英語：処理枠 W1、処理枠 W2 にアクセスし、最終的に 処理枠 W2 のみ活性化しプロファイル。W1 で順次的走査によって生じた「プロセス」(usage event 1) が総括的走査により、非時間化され (分詞)、W2 内にある、「繰り返し」プロセスの最終段階がプロファイル (usage event 2)。usage event 1 の内容は概念基盤内では背景化されつつ、usage event 2 の概念化を支えている。
- 日本語：処理枠 W1 にアクセスして活性化させ、W2 にアクセスせず順次的走査による「プロセス」のまま記号化され (usage event 1)、叙述表現となる。usage event 2 は背景にあったとしても、(13b) の例では、英語型のような名詞句構造になることはないため、言語処理するためにここにアクセスすることはない。

5. おわりに

- 分詞＋名詞構造の英語の数・量推移構文はアカデミックなどの書き言葉において情報を圧縮してスリム化する機能を持つ。
- 英語のこの構造は英語の名詞志向という個別言語の思考パターンも反映。
- 構文＝形式＋意味 (談話機能＋個別言語固有の特性含む) ⇒ The Access-and-Activation Model に反映され、日英語の数・量推移構文の特性が「概念基盤」内の「処理枠」の違いに現れる。

参考文献

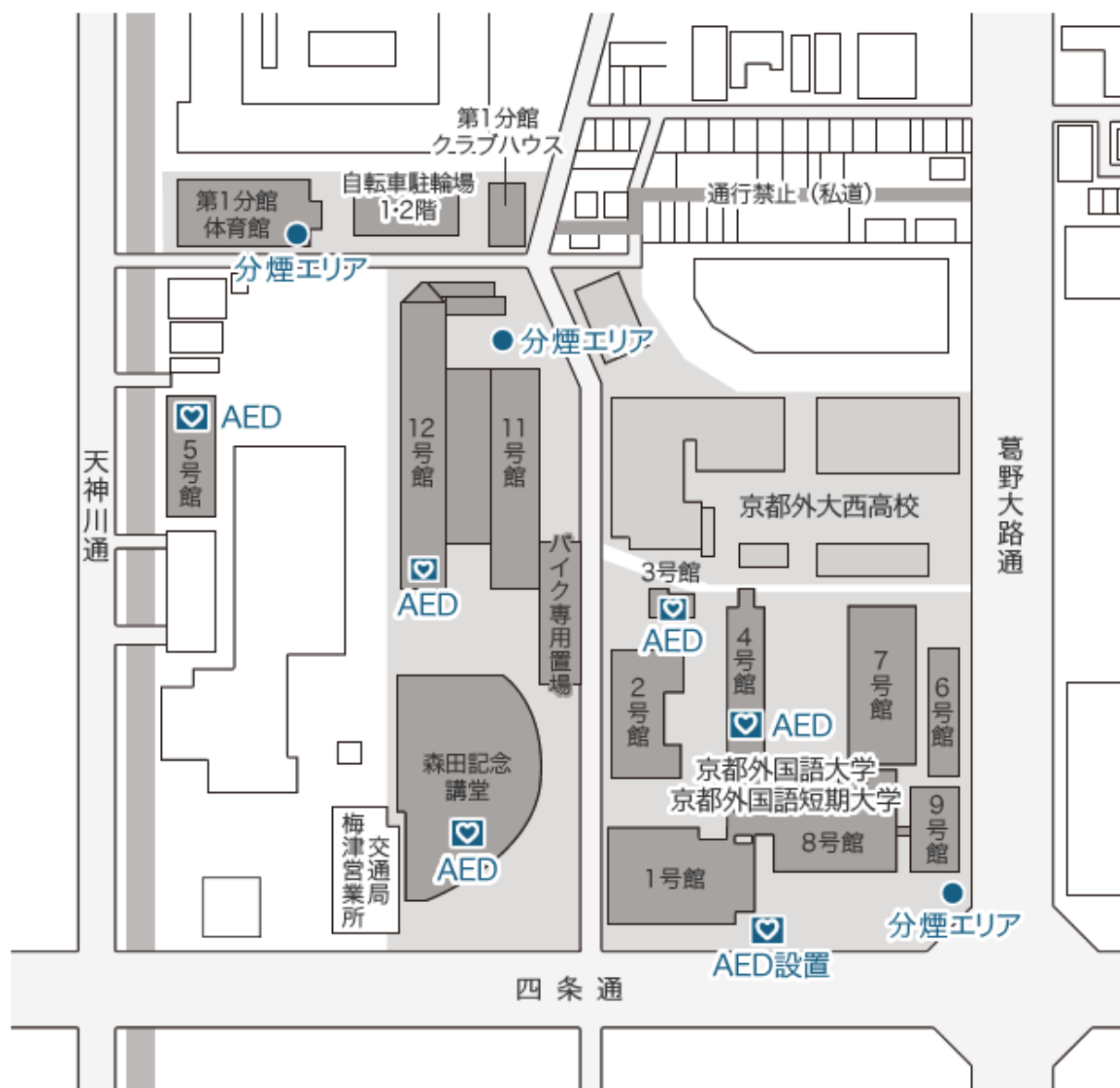
安西徹雄 (2000 [1983]) 『英語の発想』筑摩書房、東京 (初版は 1983 年に講談社より)。

- Biber, Douglas et al. (1999) *Longman Grammar of Spoken and Written English*, Pearson Education Limited, Harlow.
- Goldberg, Adele E. (2006) *Constructions at Work: The Nature of Generalization in Language*, Oxford University Press, Oxford.
- Hasebe, Yoichiro (2015) Design and Implementation of an Online Corpus of Presentation Transcripts of TED Talks. *Procedia: Social and Behavioral Sciences* 198(24), 174–182.
- 長谷部陽一郎 (2018) TED Corpus Search Engine: TED Talks を教育と研究に活用するためのプラットフォーム『英語コーパス研究』25, 159–172.
- 本多啓 (2005) 『アフォーダンスの認知意味論：生態心理学から見た文法現象』東京大学出版会，東京.
- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』大修館，東京.
- 池上嘉彦 (2011) 「日本語と主観性・主体性」『ひつじ意味論講座 第5巻 主観性と主体性』，澤田治美 (編)，49–67，ひつじ書房、東京.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*, Oxford University Press, Oxford.
- Langacker, Ronald W. (2012) “Interactive Cognition: Toward a Unified Account of Structure, Processing, and Discourse,” *International Journal of Cognitive Linguistics*, 3 (2), 95–125.
- Langacker, Ronald W. (2016) “Toward an Integrated View of Structure, Processing, and Discourse”, *Studies in Lexicogrammar: Theory and Applications*, ed. by Grzegorz Drozd, 23–53, John Benjamins, Amsterdam/Philadelphia.
- 村尾治彦 (2023a) 「日英語の増減表現について：動詞志向と名詞志向の観点から」『ことばの謎に挑む—高見健一教授に捧げる論文集』平田一郎他編，127—137，開拓社，東京.
- 村尾治彦 (2023b) 「構文ネットワークにおける日英語の増減表現とプロファイル」『認知言語学における捉え方・プロファイルの可能性を探る 他言語比較からみる英語の姿』日本英文学会九州支部大会シンポジウム 英語学部門ハンドアウト.
- 村尾治彦 (2023c) 「認知文法からみた談話：The Access-and-Activation Model とその応用」『談話と文法・文化を考える』第5回大阪言語学談話会ハンドアウト.
- 村尾治彦 (2024) 「日英語の対照研究：The Access-and-Activation Model の観点から」『談話と文法：the Access-and-Activation Model を前提に』第6回大阪言語学談話会ハンドアウト.
- 村尾治彦 (2025a) 「構文としての談話：The Access-and-Activation Model を基盤に」第11回大阪言語学談話会ハンドアウト.
- 村尾治彦 (2025b) 「The Access-and-Activation Model による日英語の数・量推移構文分析」『エネルギー』第50号，ドイツ文法理論研究会.
- 中村芳久 (2019) 『認知文法研究—主観性の言語学—』くろしお出版，東京.
- 野村益寛 (2014) 『ファンダメンタル認知言語学』ひつじ書房，東京.
- 吉川千鶴子 (1995) 『日英比較 動詞の文法—発想の違いから見た日本語と英語の構造—』くろしお出版，東京.

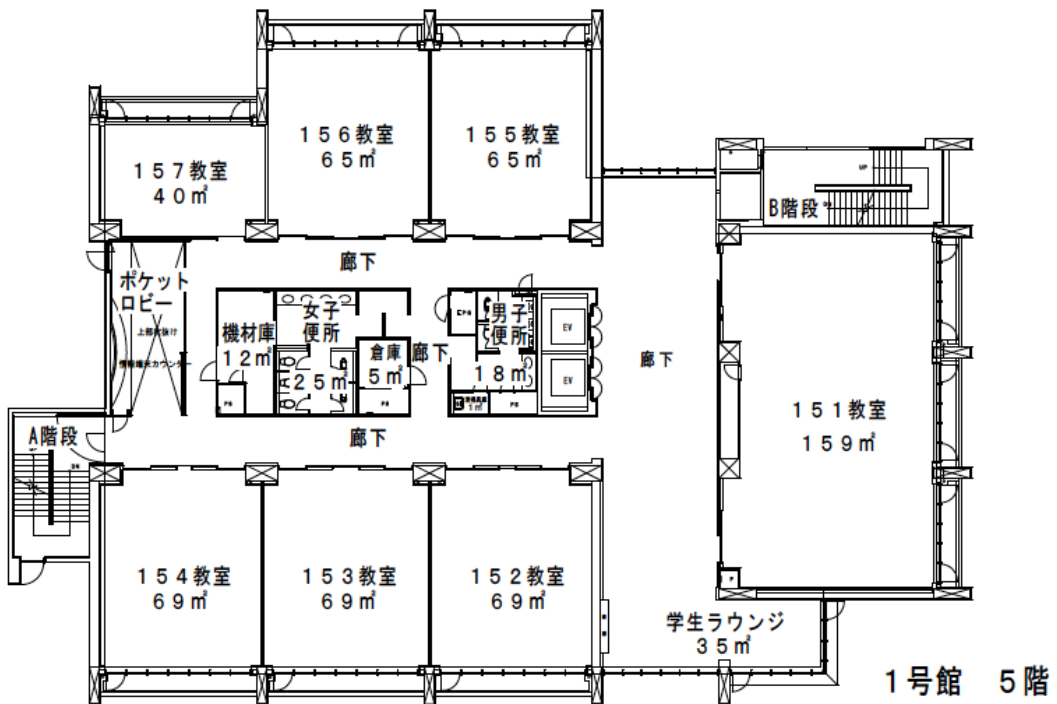
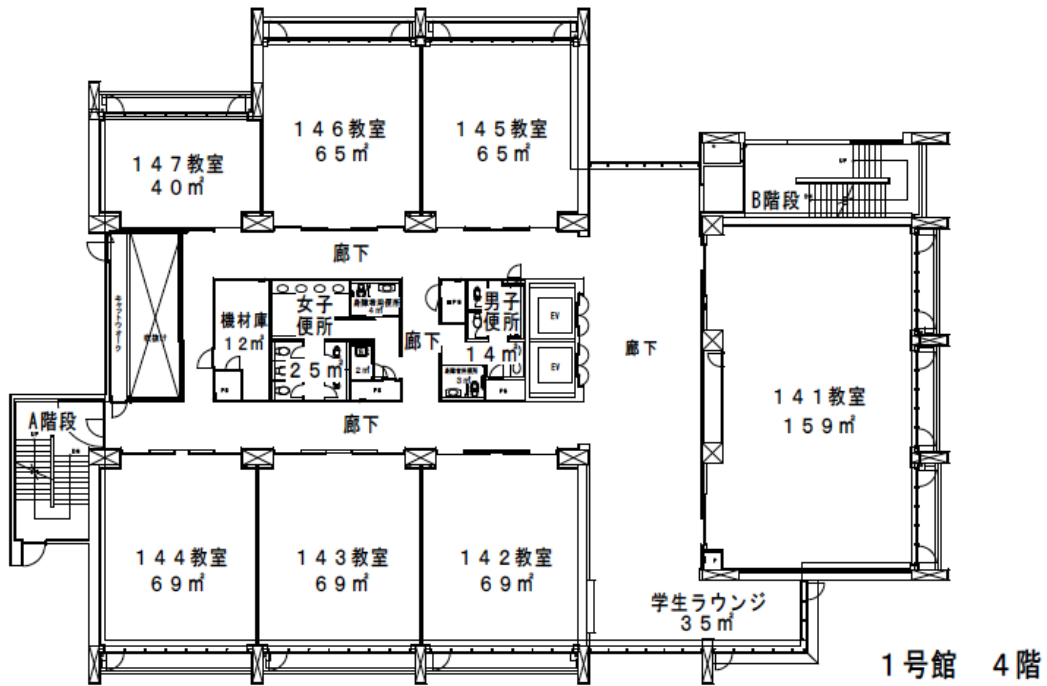
例文出典・使用コーパス

- Davies, Mark. (2008-) The Corpus of Contemporary American English (COCA), <https://www.english-corpora.org/coca/>
- 長谷部陽一郎, TED Corpus Search Engine (TCSE), <https://yohasebe.com/tcse>.

京都外国語大学キャンパスマップ



京都外国語大学 1号館館内図



英語語法文法学会役員

名誉顧問	八木克正	安井 泉	内田聖二	
会長	吉良文孝			
事務局長	松原史典			
会計・名簿	小澤賢司			
会計監査	佐藤健児			
運営委員	五十嵐海理	大澤 舞	大竹芳夫	金澤俊吾
	吉良文孝	住吉 誠	出水孝典	中澤和夫
	西脇幸太	前川貴史	松原史典	村上まどか
	山岡 洋	山本 修	吉田幸治	吉川裕介
編集委員	大竹芳夫（編集委員長）			
	大橋 浩	大室剛志	金澤俊吾	吉良文孝
	須賀あゆみ	滝沢直宏	中澤和夫	中山 仁
	西田光一	野村忠央	林龍次郎	松村瑞子
	家口美智子	山岡 洋	吉田幸治	

発行日	2025 年 10 月 11 日
編集・発行	英語語法文法学会
代表者	吉良文孝
事務局	〒605-0927 京都市東山区渋谷通り東大路東入ル3丁目上馬町 544 京都女子大学文学部 英語文化コミュニケーション学科 松原史典 研究室内 TEL : 075-531-9082（内線） FAX : 075-531-9120（代表） Email: segu.office@gmail.com URL: https://segu.sakura.ne.jp
振替口座	02260-0-70393 英語語法文法学会 © 英語語法文法学会